岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 688 集

迫田（はさまだ）Ⅰ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

２０１８

国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所
（公財）岩手県文化振興事業団

迫田Ⅰ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されております。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行ない、その調査の記録を保存とする措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸沿岸道路建設事業に関連して、平成28年度に実施した迫田Ⅰ遺跡の調査成果をまとめたものであります。

今回の調査では、古代の竪穴住居跡や縄文時代の遺物包含層などの遺構が検出され、三陸沿岸部での土地利用の様子を明らかにすることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所、大槌町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成30年３月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団
理　事　長　菅　野　洋　樹

例　　言

1．本報告書は、岩手県上閉伊郡大槌町大槌第 15 地割字迫田 60-1 ほかに所在する迫田Ⅰ遺跡の発掘調査成果を収録したものである。

2．本報告書掲載の遺跡の調査は、三陸沿岸道路建設に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。

3．迫田Ⅰ遺跡の岩手県遺跡台帳の登録の遺跡コード番号並びに遺跡略号は以下のとおりである。
迫田Ⅰ遺跡　番号：ＭＧ 33 － 0061　略号：ＨＡＳＩ － 16

4．野外調査面積及び調査期間、室内整理期間、及び担当者は以下の通りである。

	調査面積	期間	担当者
野外調査	2,600 ㎡	平成 28 年８月１日～10 月 21 日	羽柴直人　對馬利彦　酒井野々子
室内整理		平成 28 年 11 月１日～平成 29 年３月 31 日	對馬利彦

5．野外調査での遺構写真撮影は調査担当者、遺物写真撮影は当センター写真撮影を専門とする期限付職員が担当した。

6．本報告書の執筆は第Ⅰ章を国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所が、その他を對馬、羽柴、酒井が各担当部分を分担して執筆した。

7．実測委託・各種鑑定・分析等は以下の機関に委託した。
石器実測・・・・・・・・・・・・・・㈱ラング
火山灰分析鑑定・・・・・・・・・・㈱火山灰考古学研究所
航空写真撮影・・・・・・・・・・・東邦航空株式会社
石器類石材同定・・・・・・・・・・花崗岩研究会
座標原点の測量・・・・・・・・・・有限会社スカイ測量設計
表土除去、排土処理等・・・・・・・アート工業株式会社

8．野外調査及び報告書作成にあたり、次の方々の協力を得た（敬称略・順不同）。
鎌田精造（大槌町教育委員会）、小向裕明（大槌町教育委員会）、千田和文（大槌町教育委員会）

9．調査成果の一部は平成 28 年度発掘調査報告書（岩埋文第 676 集）、現地公開資料等で公開してきたが、本書の内容が優先するものである

10．本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2
1　地理的環境 …… 2
（1）遺跡の位置と立地 …… 2
（2）遺跡周辺の地形 …… 2
2　周辺の遺跡 …… 2
Ⅲ　調査と整理の方法 …… 7
1　調査の経過 …… 7
2　野外調査の方法 …… 7
3　室内整理の方法 …… 9
4　基本土層 …… 9
Ⅳ　検出された遺構と遺物 …… 10
1　概　　要 …… 10
2　古代の竪穴住居跡 …… 10
3　古代の出土遺物 …… 19
4　縄文時代の遺物包含層 …… 23
5　縄文時代の遺物 …… 27
Ⅴ　ま　と　め …… 46
Ⅵ　火山灰分析 …… 47
報告書抄録 …… 73

表　目　次

第 1 表　周辺遺跡一覧表 …… 6
第 2 表　土師器・須恵器観察表 …… 22
第 3 表　縄文土器観察表（遺物包含層１） …… 35
第 4 表　土製品観察表（遺物包含層１） …… 36
第 5 表　縄文土器観察表（遺物包含層２）…… 36
第 6 表　石器観察表（遺物包含層１） …… 44
第 7 表　石器観察表（遺物包含層２） …… 45
第 8 表　石器観察表（排土場中） …… 45

図 版 目 次

第 1 図　地形分類図 …… 3
第 2 図　周辺遺跡分布図 …… 5
第 3 図　遺構・グリッド配置図・基本土層 …… 8
第 4 図　SI01 竪穴住居跡（１） …… 11
第 5 図　SI01 竪穴住居跡（２） …… 12
第 6 図　SI02 竪穴住居跡（１） …… 14
第 7 図　SI02 竪穴住居跡（２） …… 15
第 8 図　SI03 竪穴住居跡 …… 17
第 9 図　SI04 竪穴住居跡 …… 18
第 10 図　SI01・SI02 土師器 …… 20
第 11 図　SI03・SI04・遺構外土師器、須恵器 … 21
第 12 図　遺物包含層１ …… 24
第 13 図　遺物包含層２ …… 26
第 14 図　遺物包含層１土器（１） …… 29
第 15 図　遺物包含層１土器（２） …… 30
第 16 図　遺物包含層１土器（３） …… 31
第 17 図　遺物包含層１土器（４） …… 32
第 18 図　遺物包含層１土器（５） …… 33
第 19 図　土製品・遺物包含層２土器 …… 34
第 20 図　遺物包含層１石器（１） …… 37
第 21 図　遺物包含層１石器（２） …… 38
第 22 図　遺物包含層１石器（３） …… 39
第 23 図　遺物包含層１石器（４） …… 40
第 24 図　遺物包含層１石器（５） …… 41
第 25 図　遺物包含層１石器（６）・
包含層２石器（１） …… 42
第 26 図　遺物包含層２石器（２）・
遺構外石器 …… 43

写真図版目次

写真図版 1　調査区遠景 …… 55
写真図版 2　調査区全景 …… 56
写真図版 3　SI01 竪穴住居跡（１）…… 57
写真図版 4　SI01 竪穴住居跡（２）…… 58
写真図版 5　SI02 竪穴住居跡（１）…… 59
写真図版 6　SI02 竪穴住居跡（２）…… 60
写真図版 7　SI03 竪穴住居跡 …… 61
写真図版 8　SI04 竪穴住居跡 …… 62
写真図版 9　遺物包含層・作業風景等 …… 63
写真図版 10　SI01・SI02 土師器 …… 64
写真図版 11　SI03・SI04・遺構外土師器、
須恵器 …… 65
写真図版 12　遺物包含層１土器（１）…… 66
写真図版 13　遺物包含層１土器（２）…… 67
写真図版 14　遺物包含層１土器（３）・
土製品・包含層２土器 …… 68
写真図版 15　遺物包含層１石器（１）…… 69
写真図版 16　遺物包含層１石器（２）…… 70
写真図版 17　遺物包含層１石器（３）…… 71
写真図版 18　遺物包含層１石器（４）・
包含層２石器・遺構外石器 …… 72

Ⅰ　調査に至る経緯

迫田Ⅰ遺跡は、三陸沿岸道路「釜石山田道路」の道路改築事業に伴い、その事業域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路「釜石山田道路」は、岩手県釜石市甲子町第13地割（釜石JCT（仮））から岩手県下閉伊郡山田町船越（山田南IC）を結ぶ延長約23kmの自動車専用道路として平成5年度に事業化しており、この区間のうち、釜石両石IC～釜石北IC間(延長約4.6km)は平成23年3月5日に供用している。また、釜石JCT（仮）において東北横断自動車道釜石秋田線（釜石～花巻）と連結している。

当該区間の現道国道45号には「恋の峠」という急勾配、急カーブの交通の難所があり、この難所の早期解決を目的に釜石両石IC～釜石北IC間（延長約4.6km）について先行的に整備を行い、平成23年3月5日に開通、その6日後の3月11日に東日本大震災の津波が太平洋沿岸を襲ったところであるが、岩手県釜石市鵜住居地区の小学校・中学校の生徒等570名の津波からの避難場所、避難経路として機能した。

釜石山田道路をはじめ三陸沿岸道路等の既に供用していた区間は、東日本大震災において救助・救援や支援物資の輸送など「命の道」としての機能を発揮したとともに、新たに事業化が決定されていた復興道路・復興支援道路と併せ、東日本大震災からの早期復興への貢献、現道の溢路解消、交通混雑の緩和、交通安全の確保及び走行性、利便性の向上により地域間交流の促進や拠点間の連携強化、物流の効率化、定時制・速達性の確保により地域の産業・経済・観光等への貢献が期待されている。

さらに救急医療施設への救急搬送時間の短縮や医療施設間の連携強化、災害時の救助・救援活動の支援により地域の安全・安心の確保に資するものである。また、「いのちを守り海と大地と共に生きる　ふるさと岩手・三陸の創造」を目指す姿とする「岩手県東日本大震災津波復興計画」の3つの原則のひとつ「安全の確保」においても、「災害時の確実な緊急輸送や代替機能を確保した信頼性の高い道路ネットワーク」を構築する幹線道路ネットワークとして位置づけられている重要な社会基盤である。

当該道路事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年11月12日付け国東整南陸調品確第49－4号「埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課あて試掘調査の依頼を行った。岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課では、平成24年12月12日に試掘調査を実施し、平成25年1月16日付け教生第1431号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により埋蔵文化財が確認されたことから発掘調査が必要となるので工事に先立ちその取扱について岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と協議するように回答があった。その回答を受けて南三陸国道事務所では、平成25年2月25日付け国東整南陸調品確第1062－4号「道路事業における埋蔵文化財の発掘調査について」により発掘調査を依頼したところである。

平成28年度において、岩手県教育委員会教育長から平成28年2月26日付け教生第1771号「平成28年度埋蔵文化財発掘調査事業について」により（公財）岩手県文化振興事業団から提出された計画書に基づき協議及び契約事務を取り進めるように通知があったことから、（公財）岩手県文化振興事業団と協議を経て平成28年4月1日付けで発掘調査に係る委託契約を締結、調査を実施することとなったものである。

（国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地 理 的 環 境

（1）遺跡の位置と立地（第1図）

迫田Ⅰ遺跡は岩手県上閉伊郡大槌町大槌第15地割に所在する。遺跡が所在する大槌町は、岩手県の沿岸南部に位置し、北は山田町、北西は宮古市、西は遠野市、南は釜石市と接し、東は太平洋に面している。総面積は169.72㎢で総人口は約12,298人（平成28年12月現在）を数える。町域は山地が主体であるが、三陸沖漁業が産業の中心を担っており、陸中海岸の景勝も含め豊かな天然湾の活用に力を注いでいる。

迫田Ⅰ遺跡は岩手県立大槌高等学校の南西約350ｍ、大槌川北岸に位置する。今回の調査区域は北緯39度22分11秒、東経141度53分57秒に相当する。北側から延びる丘陵端部に立地し、調査区は尾根線に挟まれた谷状の地形で、西から東に下る斜面地である。調査前の状況は山林で、遺構検出面の標高は11～22ｍである。地形図上では国土地理院発行２万５千分の１地形図「大槌」（NJ-54-7-16-4,13-4-2）、５万分の１地形図「大槌」（NJ-54-13-4）の図幅に含まれる。

（2）遺跡周辺の地形（第1図）

大槌町は町域の大部分を北上山系から成る山岳が占めており、支脈が丘陵として広がりを見せている。標高の高い白見山（1,173m）、高滝森（1,160m）、妙沢山（1,103m）などの山々は主に町域の西側にそびえ立ち、妙沢山南西の土坂峠に源を発する大槌川が山麓の間を縫って町の中央付近を南東流し、白見山の山裾から延びる小鎚川がその南側を同様に流れて大槌湾に注がれる。これらの河川沿いの谷底平野及び氾濫平野を中心に市街地が築かれている。

太平洋に面した町の東側は北の船越湾、南の大槌湾ともにリアス式海岸が発達し、沖合で親潮と黒潮の交流する豊かな漁業場となっている。また景勝地としても活用されており、海岸風景は岩手県北部から宮城県気仙沼付近までを範囲とする陸中海岸国立公園の一部として指定を受けている。なお、これらは平成25年には青森県南部の種差海岸階上岳県立公園及び八戸市内の２地区を編入して、三陸復興国立公園へと名称が改められている。船越湾には海水浴場として有名な浪板海岸と吉里吉里海岸が所在している。そこから海岸沿いにやや南下したところに吉里吉里港が開かれ、市街地が形成されている。その東には船越湾と大槌湾を区切って北東に突出した吉里吉里半島があり、半島に沿うような形で時計回りに松島、野島、二才島、丸島、長根島などが浮かぶ。

報告遺跡は、地形分類図上では中起伏山地の端部に所在している。遺跡のすぐ南側は浜、及び河原の地形分類となり、大槌川に面している。遺跡から大槌川河口までは直線で約1,700ｍの距離である。

2　周 辺 の 遺 跡

大槌町内の遺跡は平成27年３月現在で、101箇所が岩手県遺跡台帳に登録されている。その中には弥生時代・古代～近代の遺跡も見られるものの、約半数が縄文時代の遺跡となっている。また鉄滓の散布地が23箇所あり、製鉄関連の生産遺跡も多数存在している。そのほか、中世に支配した大槌氏に関する城館、近世の大槌代官所に関連する遺跡もいくつか見られる。分布状況をみると、太平洋に

浪板
浪板海岸
鮫鼻
野島
松島
弁天島
二才島
(毛無島)
丸島
長根島
浪ノ助島
名越島
吉里吉里
赤浜
大槌港
蓬莱島
(珊瑚島)
七戻崎
松島
雀島
室浜
大槌湾
長崎
釜石
大槌湾
平磯崎
根浜海岸
早障子崎
箱崎白浜
箱崎町
人形宿
小間倉崎
浪板崎
黒崎
中根
両石湾
大起伏山地(起伏量400m以上)
中起伏山地(起伏量400～200m)
小起伏山地(起伏量200m未満)
山麓地及び他の緩斜面
丘陵地Ⅰ(起伏量200～100m)
砂礫段丘
谷底平野及び氾濫平野
海岸平野及び三角州
浜及び河原
磯
人工改変地
崖
壁岩
2級河川
国道
県道

第１図　地形分類図

面した市街地と国道45号線沿いの開発地域、また大槌川と小鎚川の河口周辺に密集し、それら河川の流域にも数箇所点在している。

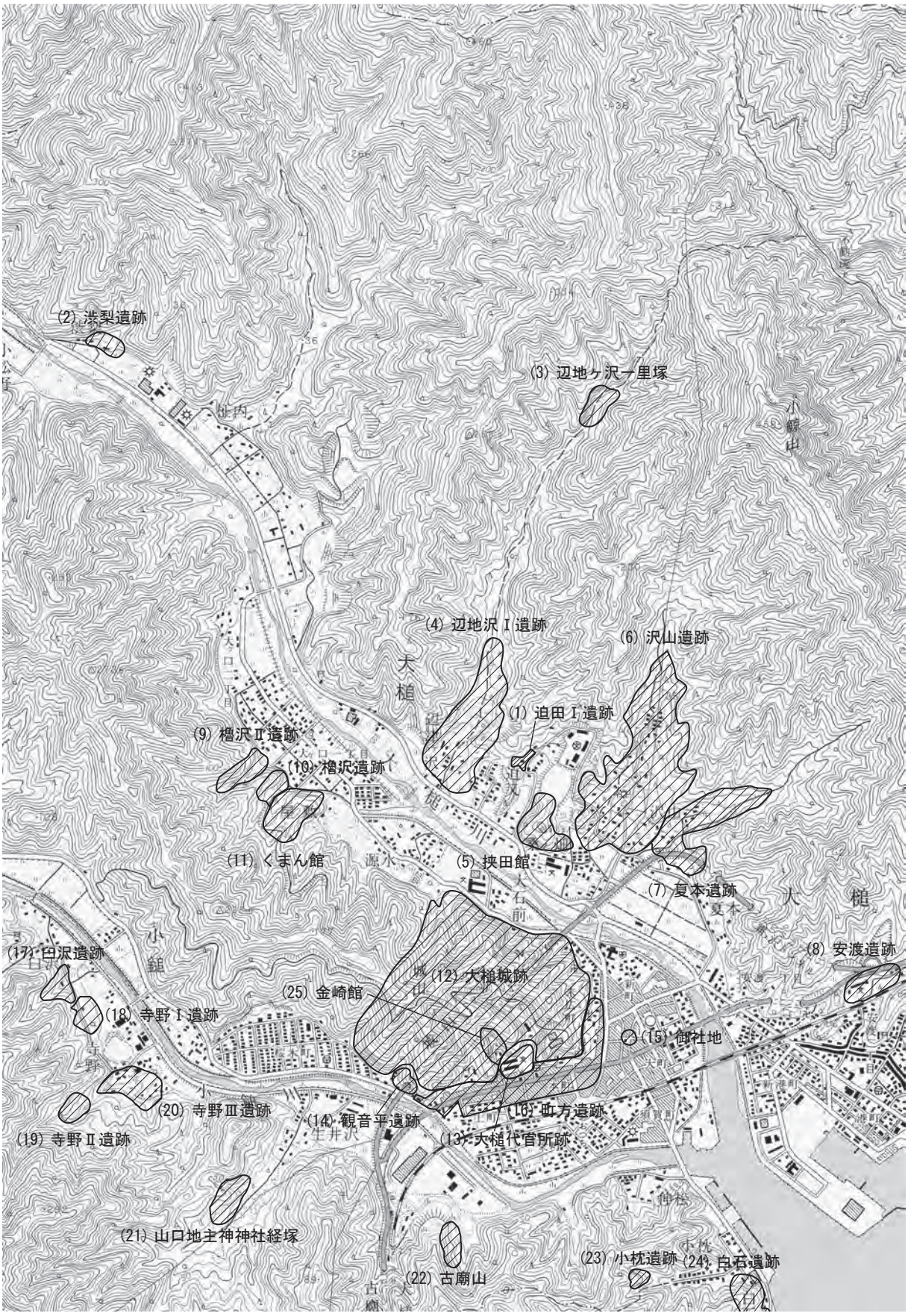
迫田Ⅰ遺跡が所在する大槌川北岸には、西から東へほぼ連続する形で、縄文土器の散布地である（４）辺地沢Ⅰ遺跡、本報告書の（１）迫田Ⅰ遺跡、中世城館の（５）挟田館跡、（６）沢山遺跡、（７）夏本遺跡が横並びに所在する。挟田館跡は平成28年度に三陸道路建設に係る発掘調査が着手されている。沢山遺跡は平成６年に個人住宅の建設に係わり、大槌町教育委員会によって発掘調査が実施された（大槌町教育委員会1995）。調査では縄文時代中期末～後期初頭の住居跡１棟、平安時代前半の住居跡２棟が検出されている。夏本遺跡は昭和62年に国道45号大槌バイパス改良工事に伴って5,300㎡の発掘調査がおこなわれた。調査は（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施している。縄文時代中期の集落跡（竪穴住居25棟）と弥生時代後期の竪穴住居跡１棟、古代（奈良、平安時代）の竪穴住居跡５棟、住居状遺構、鍛冶工房跡などが検出された。出土遺物では赤彩が施された土師器壺（球胴甕）が注目される。また、夏本遺跡は昭和62年（上記バイパス関連調査の終了後）、小枝ケ沢河川災害関連事業に伴い、大槌町教育委員会によって980㎡の発掘調査がおこなわれている（大槌町教育委員会1988）。調査では縄文時代中期の竪穴住居跡２棟が検出され、弥生時代の土器、土師器が出土している。

図示した範囲中での大槌川の南岸には、上流から（９）櫓沢Ⅱ遺跡、（10）櫓沢遺跡、（11）くまん館跡、（12）大槌城跡が並ぶ。櫓沢Ⅱ遺跡は、砂防ダム建設工事に伴い、平成９年に大槌町教育委員会により発掘調査がおこなわれた（大槌町教育委員会1998）。調査面積は250㎡である。調査では縄文時代の土坑、竪穴遺構、遺物包含層が検出され、遺物包含層では多数の縄文時代晩期の土器が出土している。また、古代と推測される木炭焼成遺構、鉄滓、羽口が出土し、近隣に製鉄炉跡の存在が予測されている。櫓沢Ⅱ遺跡の南東には尾根を一つ隔てて櫓沢遺跡が所在する。昭和27年に調査がおこなわれ、大槌町史上巻（大槌町史編集委員会1996）にその概略が記載され、「奈良時代末期から平安時代初期」の製鉄遺跡と評価されている。櫓沢遺跡の南東に接してくまん館跡が所在する。北東方向に突出する丘陵端部に造成された中世城館である。大槌城跡は大槌川南岸から市街北部に広がる広大な城館跡である。大槌町のシンボルともいえる城館であり、町民には「城山」として親しまれ、平成４年には県指定史跡に指定されている。公園化事業に伴った大槌町教育委員会による11次にわたる調査（大槌町教育委員会1995、1997）によって、堀跡、帯曲輪、掘立柱建物跡などが確認されている。

この他、大槌地域では、大槌町教育委員会が平成６～８年に調査を実施した（13）大槌代官所跡（大槌町教育委員会1995、2007）、平成26年に発掘調査がおこなわれた大槌市街地と重なる（16）町方遺跡など、近世都市を構成する遺跡の調査も進展しており、県内で他に例の少ない性格の遺跡調査として特筆される。

参考・引用文献

岩手県　1974『北上山系開発地域土地分類基本調査　大槌・霞露ヶ岳』
大槌町教育委員会　1988『夏本遺跡発掘調査報告書』大槌町教育委員会文化財調査報告書第２集
大槌町教育委員会　1990『大槌町内遺跡分布調査報告書Ⅱ』大槌町文化財調査報告書第５集
大槌町教育委員会　1995『沢山遺跡発掘調査報告書』大槌町文化財調査報告書第６集
大槌町教育委員会　1995『大槌代官所跡発掘調査概報』大槌町文化財調査報告書第７集
大槌町教育委員会　1997『大槌城跡 ―第６次・７次発掘調査報告書』大槌町文化財調査報告書第８集
大槌町教育委員会　1998『櫓沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書』大槌町文化財調査報告書第９集
大槌町教育委員会　2007『大槌代官所跡発掘調査報告書』大槌町文化財調査報告書第10集
大槌町史編纂委員会　1966『大槌町史上巻』
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1989『夏本遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第134集



国土地理院 1:25,000 大槌

第２図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	よみがな	種別	時代	遺構・遺物	所在地	調査経歴	文献等
1	迫田Ⅰ	はさまだⅠ	集落跡	縄文・平安	縄文土器、土師器、住居跡	大槌第15地割	H28年調査	本報告書
2	渋梨	しぶなし	散布地	縄文	縄文土器、石棒	大槌第10地割		
3	辺地ケ沢一里塚	へんちがさわいちりづか	一里塚	近世	塚２基	国有林内		
4	辺地沢Ⅰ	へんちがさわⅠ	散布地	縄文	縄文土器	大槌字辺地沢		
5	挟田館（七郎館・十王館）	はさまだだて	城館跡	中世	空堀２条、平場、帯郭	大槌第23地割		
6	沢山	さわやま	散布地	縄文・平安	縄文土器（中期）、石器、住居跡、土師器	大槌第24地割	Ｈ６調査　個人住宅に伴う緊急調査	Ｈ７年報告書刊行
7	夏本	なつもと	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器、弥生土器、住居跡	大槌第24地割	Ｓ62年（岩手県埋蔵文化財センター・大槌町教育委員会）調査	Ｓ63年報告書刊行
8	安渡	あんど	散布地	縄文	縄文土器、石器	安渡２丁目		
9	櫓沢Ⅱ	やぐらざわⅡ	生産遺跡	縄文・奈良・平安	縄文土器（晩期）、土師器、鉄滓、羽口、土坑・炭窯	大槌第11地割字大ヶ口	Ｈ９年調査	H10年に調査報告書刊行
10	櫓沢	やぐらさわ	生産遺跡	縄文・奈良	鉄滓、縄文土器（晩期）、土師器、須恵器	大槌第14地割	Ｓ27調査	
11	くまん館	くまんだて	城館跡	不明	空堀、平場、帯郭	大槌第14地割		
12	大槌城跡	おおつちじょうあと	城館跡	中世	平場、空堀、帯郭、掘立柱建物跡、土坑他	小鎚第32地割字金崎	Ｓ58年～H11年まで第11次の調査	Ｈ９年報告書刊行 県指定史跡
13	大槌代官所跡	おおつちだいかんしょあと	史跡	近世	礎石建物、鍛冶場跡、柱穴列群	上町１番	Ｈ５年試掘調査　Ｈ６～８年本調査（大槌小学校建設に伴う調査）	Ｈ７年１次調査概要刊行
14	観音平	かんのんだいら	社寺跡	近世	平場	上町		
15	御社地	おしゃち	社寺跡	近世	石碑、経石、石祠、埋経碑	末広町３番地	Ｈ８年ふれあいセンター建設に伴う調査	町指定史跡
16	町方	まちかた	町屋跡	近世・近代	近世・近代町屋 陶磁器　銭貨 上水道遺構 井戸跡	上町、本町、末広町と大町の一部	H26年発掘調査	
17	臼沢	うすざわ	散布地	縄文	縄文土器（後期）	小鎚第20地割		
18	寺野Ⅰ	てらのⅠ	散布地	縄文	縄文土器（後期）	小鎚第22地割		
19	寺野Ⅱ	てらのⅡ	散布地	縄文	縄文土器、羽口	小鎚第23地割		
20	寺野Ⅲ	てらのⅢ	散布地	縄文	縄文土器	小鎚字寺野		
21	山口地主神神社経塚	やまぐちじぬしがみじんじゃきょうづか	経塚	近世	埋経碑２基、石祠	小鎚第26地割		
22	古廟山	こびょうざん	社寺跡、経塚、散布地	縄文・近世	平場、石碑、石仏	小鎚第28地割	H12年調査（林道建設に伴う緊急調査）	
23	小枕	こまくら	散布地	縄文	縄文土器	小鎚第28地割		
24	白石	しろいし	散布地	縄文	縄文土器（後期）	小鎚第28地割		
25	金崎館	かねざきだて	城館跡	中世	平場、帯郭、空堀	小鎚字金崎	H10年林道建設に伴う調査・範囲確認調査	

Ⅲ　調査と整理の方法

１　調 査 の 経 過

平成 28 年７月 14 日（木）に調査地の確認、プレハブ用地の選定をおこなった。８月１日（月）午前に埋蔵文化財センターから発掘調査機材を積み込みし、午後より迫田Ⅰ遺跡調査事務所に機材を搬入した。２日（火）、３日（水）には調査事務所、調査区の環境整備と雑物撤去を人力でおこなった。また合わせて、調査区に至る通行路の整備もおこなった。４日（木）、５日（金）には、木根の少ない調査区南東部にトレンチを設定し、人力による試掘をおこない、遺物の包含の具合、遺構検出面を確認した。

８月８日（月）からバックホーを使用し粗掘を開始した。排土は調査区外の三陸道路事業地内へキャリアダンプで搬出した。11 日（木）より 16 日（火）までお盆期間に伴い調査を中断した。17 日（水）からバックホーによる粗掘を再開する予定であったが、台風の影響による荒天、キャリアダンプの搬出路のぬかるみにより、作業再開は 22 日（月）となった。この後、バックホーによる粗掘は９月 16 日（金）まで続いた。この間､度重なる台風､降雨の影響により作業不可能な日が多く､作業は遅滞した。これに対応するため９月１日（木）からはバックホー１台を追加し、バックホー２台、キャリアダンプ１台の体制で粗掘、排土をおこなった。

バックホーによる粗掘と並行して、９月７日（水）より遺構検出を本格的に開始し、９月 16 日（金）までに主要部分の遺構検出を完了した。また、９月 12 日（月）からは検出を完了した遺構から順次、遺構精査を開始している。この後、遺物包含層も含む遺構精査は 10 月 20 日（木）に終了した。

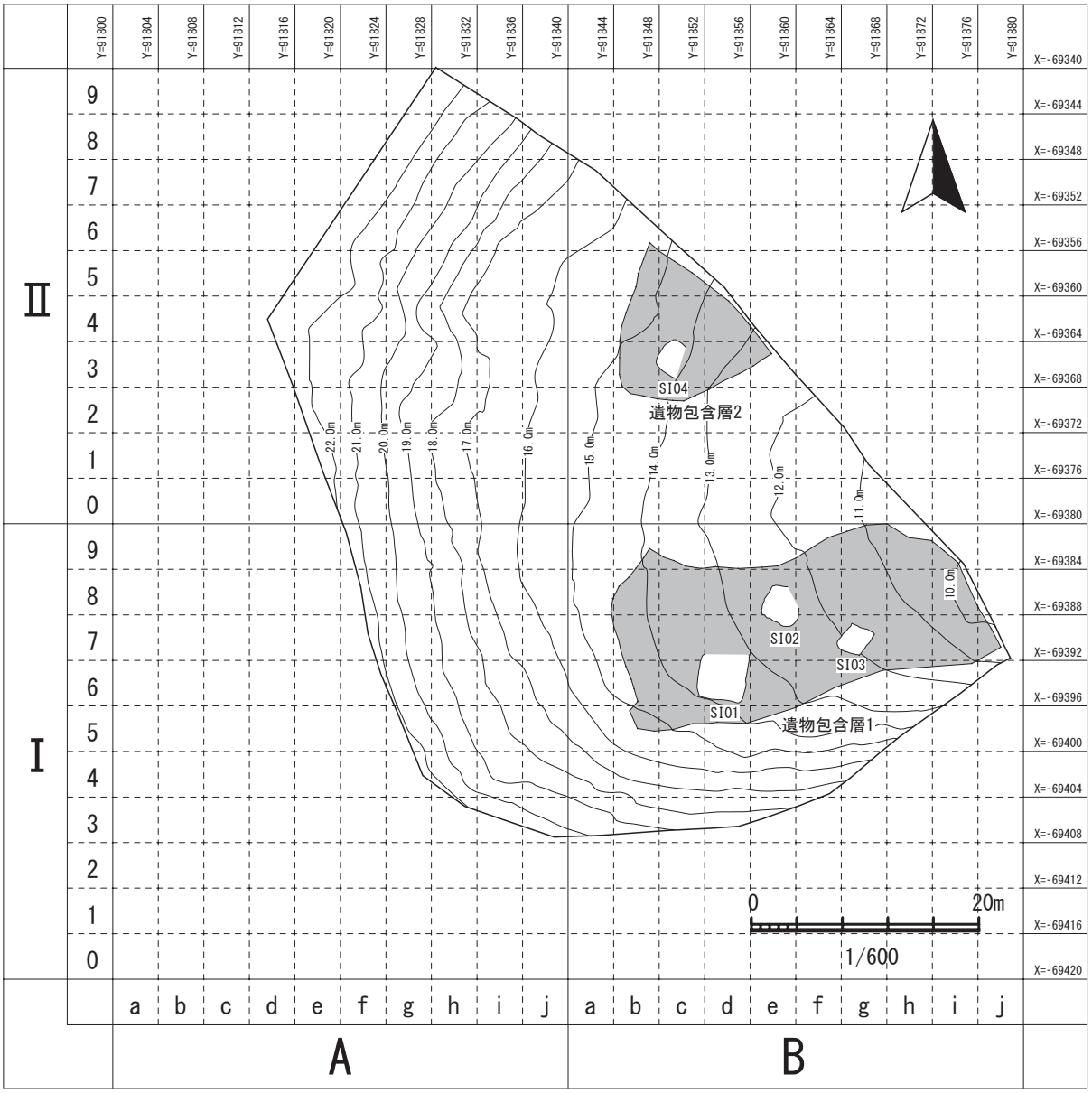
10 月３日（月）からは、近接する挟田館跡の調査を並行して開始することになり、調査事務所を、挟田館跡に近接する場所に移設することとなった。調査事務所移設は 10 月５日（水）に完了した。また、10 月 13 日（木）には迫田Ⅰ遺跡の航空写真撮影と現地公開を実施した。10 月 20 日（木）には県生涯学習文化課､南三陸国道事務所の立ち会いのもと､終了確認がおこなわれた。そして､10 月 21 日（金）には調査区域から機材を完全撤収し、迫田Ⅰ遺跡の野外調査を終了した。

２　野外調査の方法

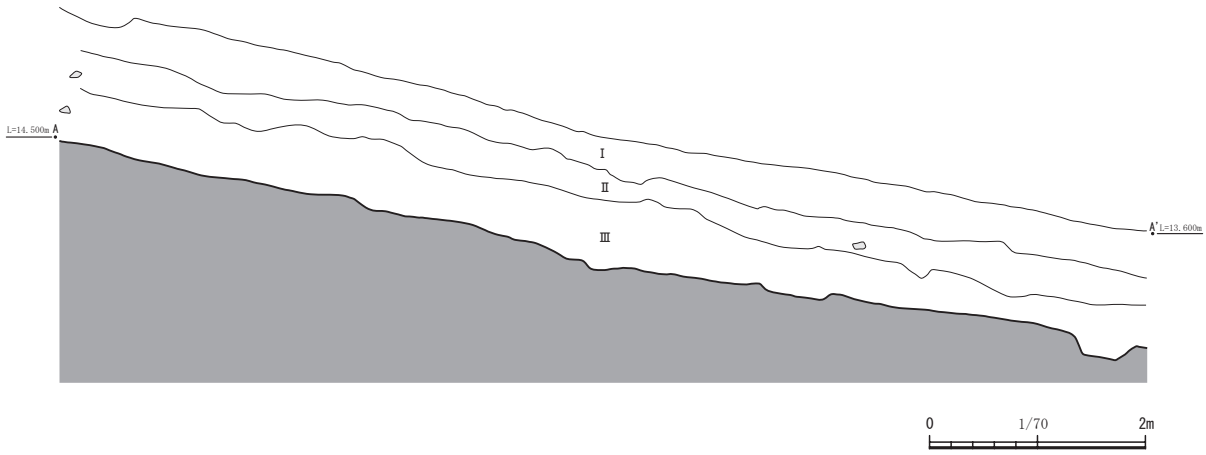
グリッドの設定

グリッドは平面直角座標のＸ系（世界測地系）に沿って設定している。座標値は第３図に示すとおりである。大グリッドは一辺 40 ｍとし、東西は西から東に向かって大グリッド毎にＡ、Ｂ・・・とアルファベットの大文字を 40 ｍ毎に付し、南北は南から北へ向かってⅠ、Ⅱ・・・とローマ数字を 40 ｍ毎に付している。大グリッドの呼称は南北ラインの算用数字と東西ラインのアルファベットの大文字との組み合わせで「ＩＡ」「ⅡＢ」というように表す。大グリッドはさらに内部を一辺４ｍの小グリッドに細分している。小グリッドは西から東に向かってａ、ｂ、ｃ、ｄ～ｊとアルファベットの小文字で付し、南から北に０、１、２、３、４、５～９とアラビア数字を付す。グリッドの呼称は大グリッドと小グリッドの組み合わせで「ＩＡ３ｃ」「ⅡＢ４ｃ」とういうように示す。各々のグリッドの呼称は、グリッドの南西隅の杭に表示されることとなる。ＩＡ０ａの座標値はＸ＝－ 69,420 ｍ、Ｙ＝ 91,800 ｍ、ⅡＢ０ａの座標はＸ＝－ 69,380 ｍ、Ｙ＝ 91,840 ｍとなる。なお、本報告の迫田Ⅰ遺

遺構・グリッド配置図



基本土層



第３図　遺構・グリッド配置図・基本土層

跡の調査範囲は、大グリッドＩＡ、ⅡＡ、ＩＢ、ⅡＢに収まっている。

遺構の名称

遺構の名称は、竪穴住居跡をＳＩとした。検出順にＳＩ01～ＳＩ04となる。また、本報告書では遺物包含層を遺構として扱うが、その名称は略号を用いず、「包含層１」「包含層２」と呼称する。

粗掘り・遺構検出

雑物撤去後にトレンチを設定し、遺物の包含状況、遺構の検出面を把握した。その後、遺構検出面及び遺物包含層上面まで重機を用いて表土を除去した。遺構の確認は表土を除去した面をジョレン、両刃鎌で平滑にし、プランを確認するようにした。

遺構の精査

検出した遺構は、土層を観察するベルトを設定して掘り下げることを基本とした。またカマドなどは適宜、土層観察ベルトを設定している。

遺物の取り上げ

遺物包含層、遺構外の遺物はグリッド毎に取り上げた。遺構内の遺物は必要と思われる場合、地点とレベルを記録した。またそれ以外では可能な限り埋土の層位ごとに取り上げるように努めた。

実測・写真撮影

平面実測は電子平板（株式会社CUBIC　遺構実測支援システム）を使用しておこなった。また断面実測については、従来どおり、レベルを用いて水平を設定し手作業による実測を主体としておこなった。写真撮影は一眼レフデジタルカメラを主に使用した。撮影は埋土堆積状態や遺物の出土状況、遺構の完掘状況などについて行った。

３　室内整理の方法

出土遺物は水洗の後、注記を行い、接合、復元作業を実施した。これらの作業終了後、報告書掲載遺物を選び出し、登録をおこなった。

電子平板で実測した遺構データは点検を行い、断面図の合成等を経て図版としての体裁を整えた。本報告書で掲載の縮尺は、竪穴住居跡：1/50、竪穴住居カマド：1/25、遺物包含層：1/200とし、図版には縮尺率を表すスケールと方位を付している。

遺物実測は原則として実寸で行った。また、遺物の縮尺は、縄文土器、土師器、須恵器:1/3、石器:2/3または1/2を基本とした。適宜縮尺を変更している個体もある。図版には縮尺率を表すスケールを付している。なお遺物写真図版の掲載番号は遺物図版と同一である。

野外調査で撮影したデジタル写真は台帳の作成をおこない、データごとにフォルダ整理を行った。また、報告書掲載分の遺物撮影もデジタルカメラでおこない、データごとに整理をおこなった。そして、これらのデジタル写真データから報告書掲載写真を選択し、写真図版版下を作成した。

これらの作業の終了後、原稿の執筆を行い、報告書を編集した。

４　基　本　土　層

調査区域の比高は10ｍ以上あり、土層の厚さは均一ではない。基本土層は調査区域内で平均的な層厚と層序を有し、遺物包含層を含むⅡＢ４ｅ～５ｄ付近の調査区境の断面を第３図に提示する。

第Ⅰ層　10YR3/2黒褐色土　草根多量混入

第Ⅱ層　10YR2/1黒色土　10YR3/2黒褐色土まだらに多量混入

第Ⅲ層　10YR3/4暗褐色土　10YR4/4褐色土　縄文時代前期前葉以前の遺物を含む土層である

Ⅳ　検出された遺構と遺物

１　概　　要

今回の迫田Ｉ遺跡の調査で検出された遺構は、平安時代前半の竪穴住居跡４棟、縄文時代の遺物を包含する遺物包含層２箇所である。平安時代前半の竪穴住居としたものには、カマドを有しない所謂「竪穴建物」も含んでいる。また、「遺物包含層」は人為的に構築された遺構とは異なるものであるが、範囲が認識できる状況で検出されており、報告の便も兼ね、本報告書では遺構として扱う。また、出土遺物は、土師器、須恵器、縄文土器、縄文土器片を加工した土製品、剥片石器、礫石器である。

検出された遺構、遺物が古代と縄文時代に明確に分離できるため、「２　古代の竪穴住居」「３　古代の遺物」「４　縄文時代の遺物包含層」「５　縄文時代の遺物」の項目順に記述する。

２　古代の竪穴住居跡

ＳＩ01 竪穴住居跡（第４、５、10図、写真図版３、４）

〔位置〕ＩＢ６ｃ、６ｄ、ＩＢ７ｄに位置する。

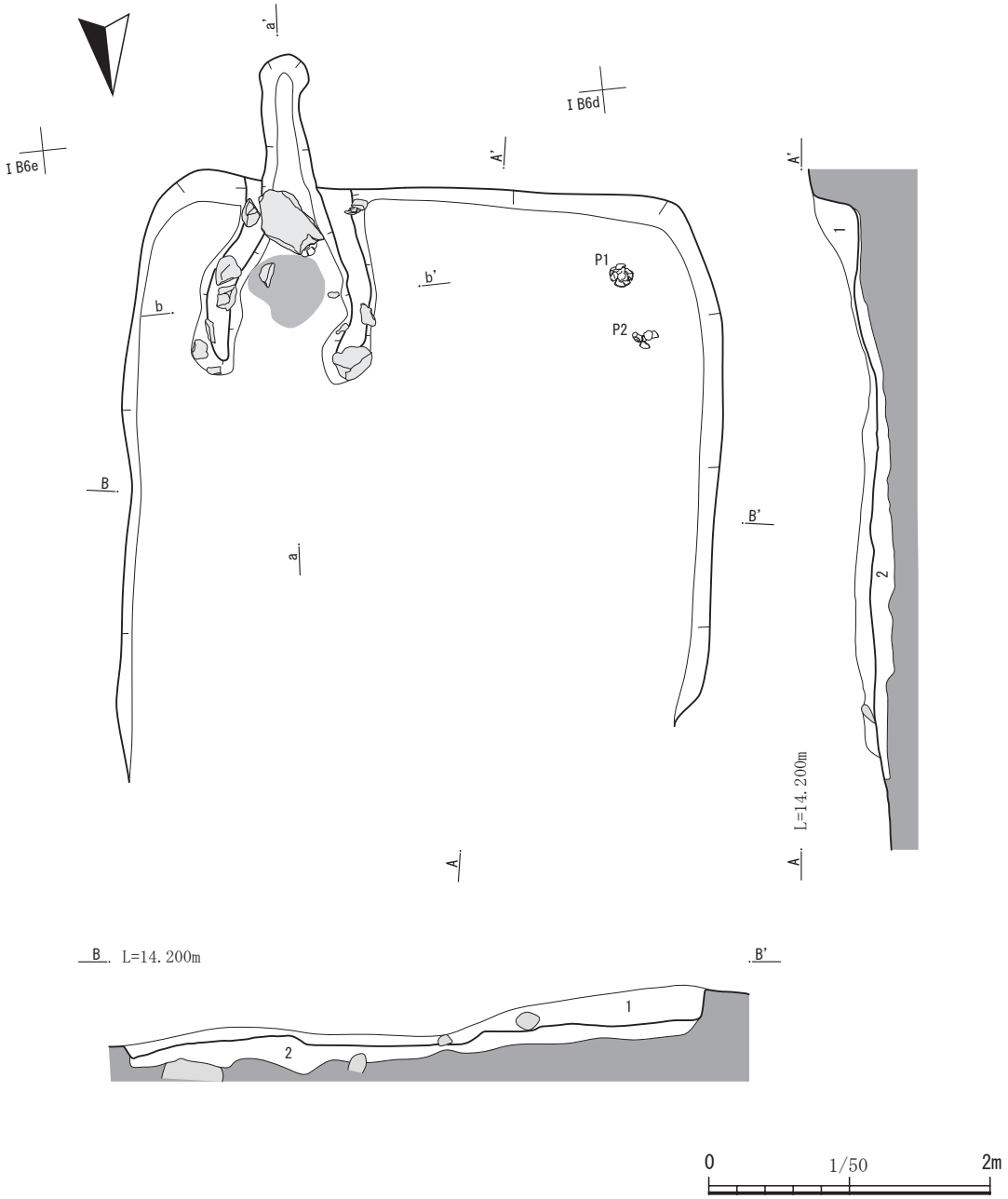
〔重複〕遺物包含層１を掘り込んで構築されている。

〔形態〕東西長約425㎝、南北長は北壁が検出できなかったので確定できないが、約425㎝程度と推測される。床面積はプランを方形と想定した場合、約18.06㎡と推測される。床面はカマド付近が他の部分より高くなっている。貼床は１～20㎝の厚さで全面に施されている。確認面から床面までの深さは０～30㎝と浅いが、これは元来の掘り込みが浅いのではなく、基本土層Ⅱ層中での遺構確認が困難であったことに起因する。柱穴は検出されなかった。また壁溝等も存在しない。

〔カマド〕南壁の東側に偏してカマドが検出された。掘込み式の煙道である。煙道底面は煙出に向かって緩やかに高くなっていく。煙出部分の平面形は煙道部分よりもやや膨隆している。ソデは礫を芯材にして黄色土または褐色土を塗り込んで構築している。煙道入口にも扁平な礫が落ちており、カマド天井部も礫を芯材にして構築したと解釈される。火床面は約53㎝×50㎝の広がりで、明赤褐色の色調を呈している。熱変化は深さ約５㎝に達している。火床面から煙道側に外れた位置に土師器長胴甕下半部（第５図Ｐ３、第10図３）が倒位に置かれており、支脚と解釈される。この支脚土器の上には、カマド天井部芯材礫が載っている。

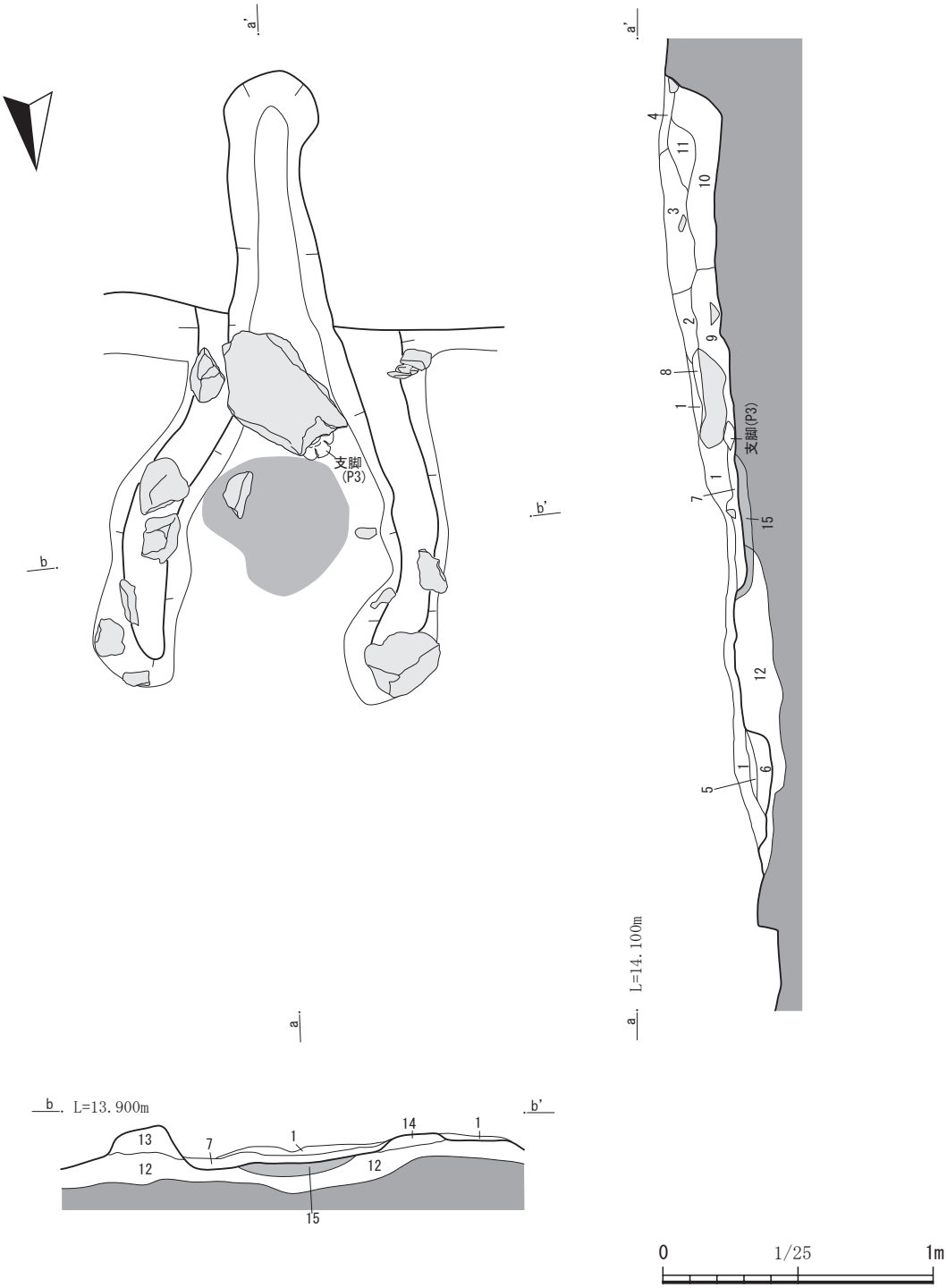
〔埋土〕埋土は１層に分けられる。自然堆積と推測されるが、確認できた埋土が薄く、確実な判断は難しい。

〔出土遺物〕床面、カマド及び埋土中から土師器が総量で810ｇ出土した。この中で図示した土師器は４点で、重量合計は652ｇである。南西隅付近の床面に土師器坏（第４図Ｐ１・第10図１）が正位に、また土師器長胴甕下半部（第４図Ｐ２・第10図２）が割れた状態で出土している。１の土師器坏はロクロ成形で、切離しは回転糸切である。底面～底辺部に再調整は施されていない。内面は下半部が放射状、上半部は横位のヘラミガキが施され、黒色処理がなされている。外面上半には油煙が付着している。燈明具としての使用であろうか。また外面中央部に「千」と解される墨書がある。坏を正位に置いた場合、文字は横位になる。２の土師器長胴甕は下半部の約半分の残存である。ロクロ不使用の長胴甕で外面は縦位と横位のヘラケズリ、内面は横位のヘラナデが施されている。外底面は



SI01（A-A' B-B'）
１．10YR2/2　黒褐色土　10YR3/3　暗褐色土をまだらに少量混入　草根多量に混入　しまりあまりなし
２．10YR3/2　褐色土　炭化物粒少量混入　貼床

第４図　SI01 竪穴住居跡（１）

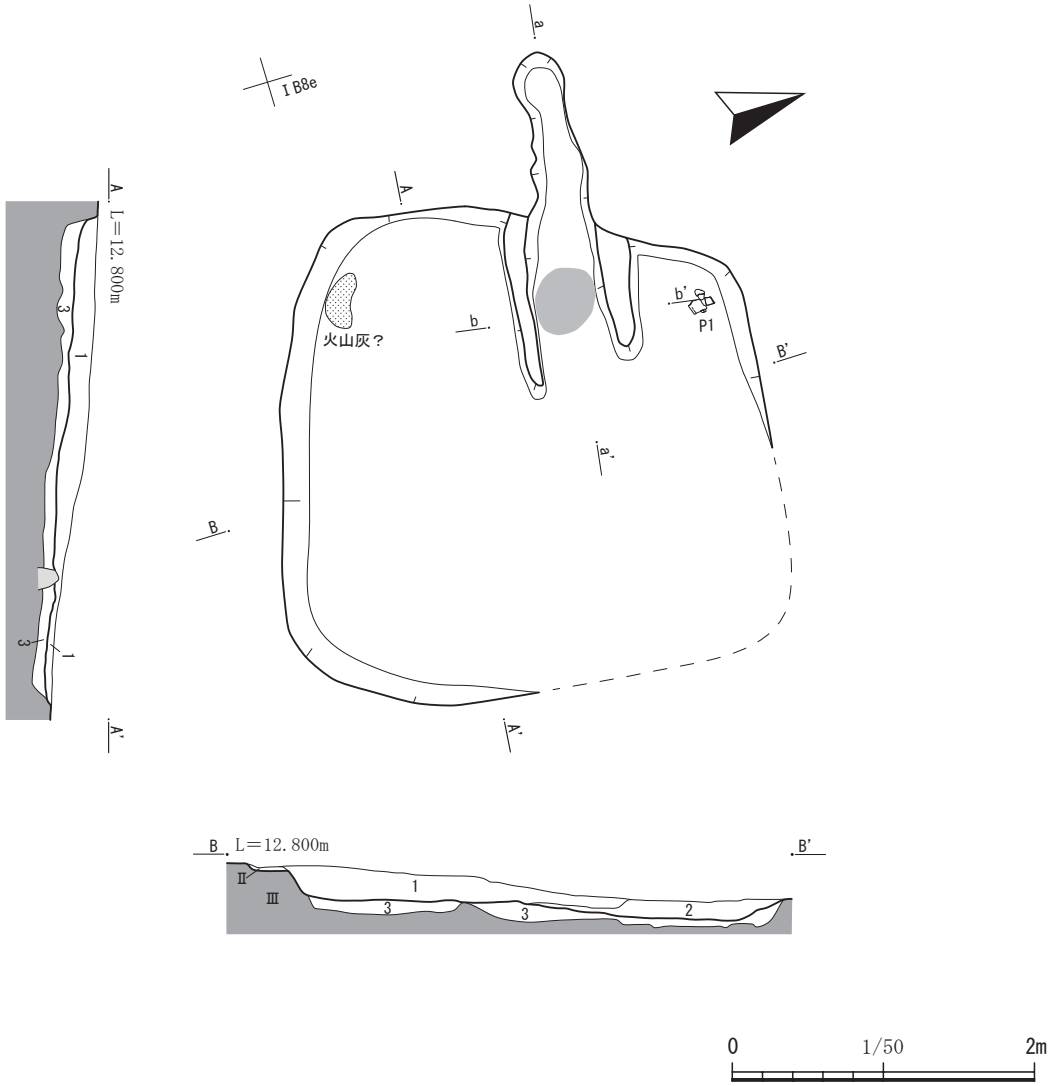


SI01 カマド（a-a’　b-b’）
1．10YR2/2　黒褐色土　10YR5/8　黄褐色土まだらに多量混入
2．10YR4/4　褐色土　10YR7/8　黄橙色土粒多量混入
3．10YR3/2　暗褐色土　基本土層Ⅲ層に類似する土
4．10YR7/8　黄褐色土　10YR3/2　暗褐色土まだらに多量混入
5．2.5YR5/8　明赤褐色焼土　10YR4/4　褐色土まだらに多量混入
6．10YR3/2　黒褐色土　2.5YR5/8 明赤褐色焼土粒多量混入
7．5YR4/6　赤褐色土　2.5YR4/6　赤褐色焼土多量混入
8．2.5YR4/6　赤褐色焼土　10YR7/8　黄橙色土粒多量混入
9．7.5YR4/4　褐色土　2.5YR4/6　赤褐色焼土粒、炭化物粒多量混入
10．10YR4/4　褐色土　炭化物粒　5YR5/8　明赤褐色粒少量混入
11．10YR2/1　黒色土　5YR5/8　明赤褐色焼土粒多量混入
12．10YR3/2　褐色土　炭化物粒少量混入　貼床
13．7.5YR4/4　褐色土　10YR2/1　黒色土多量混入　カマドソデ
14．2.5YR7/8　黄色土　7.5YR4/4　褐色土少量混入　カマドソデ
15．2.5YR5/8　明赤褐色焼土　火床面

第５図　SI01 竪穴住居跡（２）

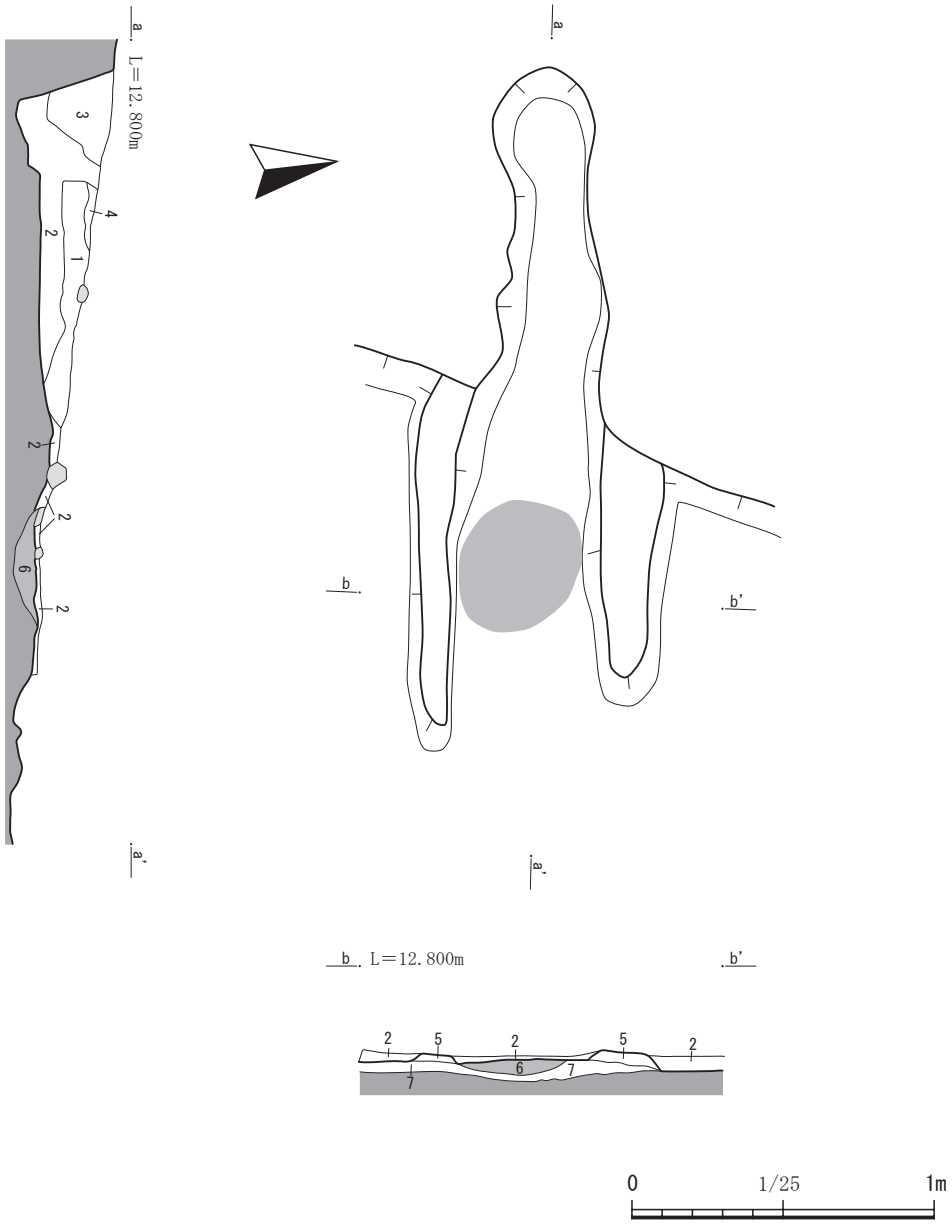
木葉痕がみられる。３はロクロ不使用の土師器長胴甕の下半部の破片である。下半部のほぼ全部がそろっている。カマドの支脚として用いられたものである。外面は縦位のヘラケズリ、内面は横位のヘラナデ、外底面はヘラケズリが施されている。外底面は平坦ではなく中央部が盛り上がっている。４はロクロ不使用の土師器長胴甕で、埋土中からの出土である。内外面口縁部はヨコナデ、外面体部は縦位を主とするヘラケズリ、内面体部は横位のヘラナデが施される。
〔性格〕古代の竪穴住居跡である。
〔年代〕出土した土師器・須恵器の形態から９世紀～ 10 世紀前半代の構築、使用と推測する。

ＳＩ 02 竪穴住居跡（第６、７、10 図、写真図版５、６）
〔位置〕ＩＢ７ｅ、８ｅに位置する。
〔重複〕遺物包含層１を掘り込んで構築されている。
〔形態〕東西長約 320㎝、南北長 290 ～ 320㎝のやや不整な方形プランである。床面積は約 9.92㎡である。床面は南西側に向かってやや高くなっていく。貼床は４㎝程の厚さで、ほぼ全面に施されている。確認面から床面までの深さは０～ 20㎝と浅いが、これは元来の掘り込みが浅いのではなく、基本土層Ⅱ層中での遺構確認が困難であったことに起因する。柱穴は検出されなかった。また壁溝等も存在しない。
〔カマド〕西壁の中央やや北よりにカマドが検出された。掘込み式の煙道である。煙道底面は煙出に向かってごく緩やかに高くなっていく。煙出部分の平面形は煙道部分よりもやや膨隆し、底面も煙道底面より深く落ち込んでいる。ソデはにぶい黄褐色土で構築している。ソデの芯材は存在しない。火床面は約 40㎝× 45㎝の広がりで、明赤褐色の色調を呈している。熱変化は深さ約６㎝に達している。
〔埋土〕埋土は２層に分けられる。自然堆積と推測されるが、確認できた埋土が薄く、確実な判断は難しい。北西コーナ付近で床面よりやや浮いた状態で、火山灰に類似する灰色の物質が 15 × 25㎝の範囲で検出された。肉眼観察では火山灰であるのか否か判断できず。自然科学分析を依頼している（本報告書　Ⅵ自然科学分析）。
〔出土遺物〕床面、カマド及び埋土中から土師器が総量で 570 ｇ出土した。この中で図示した土師器、須恵器は４点で、重量合計は 333 ｇである。５はロクロ不使用の小型土師器長胴甕である。埋土中からの出土である。内外面口縁部はヨコナデ、外面体部は縦位のヘラナデ、内面体部は横位のヘラナデが施される。内面口縁部には炭化物が帯状に付着している。６はカマド北脇の床面に貼り付いた状態で出土した。ロクロ不使用の土師器長胴甕である。やや小振りであるが、大型の長胴甕の部類に入ると思われる。内外面口縁部はヨコナデ、外面体部は縦位を主とするヘラケズリ、内面体部は横位のヘラナデが施される。７はロクロ使用の土師器長胴甕である。埋土から出土した。口縁部と下半部を欠いている。外面体部上半部はロクロ調整、下半部はヘラケズリ、内面はロクロ調整が施されている。外面には薄く煤が付着する。又、外面に沈線状の筋がついているが意図的なものとは思われない。８は土師器長胴甕の底部付近の破片である。埋土から出土した。確定できないがロクロ使用の長胴甕と推測される。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。外底面には板の圧痕と推測される痕跡が付く。
〔性格〕古代の竪穴住居跡である。
〔年代〕出土した土師器・須恵器の形態から９世紀～ 10 世紀前半代の構築、使用と推測する。



SI02（A-A' B-B'）
1．10YR2/2　黒褐色土　10YR5/6　黄褐色土まだらに少量混入
2．10YR3/4　暗褐色土　10YR5/6　黄褐色土まだらに少量混入
3．10YR5/4　にぶい黄褐色土　10YR2/2　黒褐色土まだらに多量混入　貼床

第６図　SI02 竪穴住居跡（１）

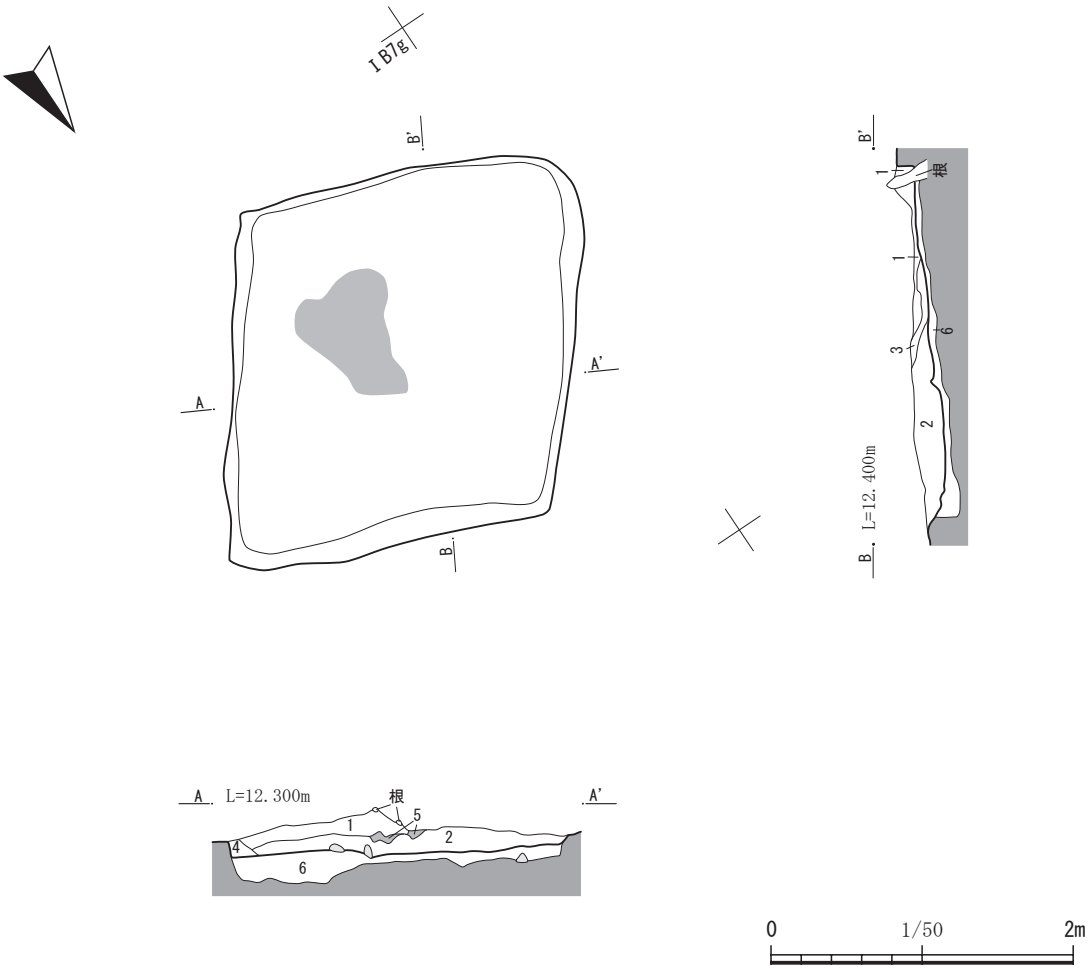


SI02 カマド　(A-A' B-B')
1．5YR4/3　にぶい赤褐色土　10YR2/2　黒褐色土まだらに多量混入
2．10YR3/2　暗褐色土　炭化物粒多量混入
3．10YR3/2　暗褐色土　2.5YR4/4　にぶい赤褐色焼土少量混入
4．10YR6/4　にぶい黄橙色土
5．10YR5/4　にぶい黄褐色土　カマドソデ
6．2.5YR5/8　明赤褐色焼土　カマド火床面
7．10YR4/4　褐色土　10YR2/1　黒色土まだらに多量混入　貼床

第７図　SI02 竪穴住居跡（２）

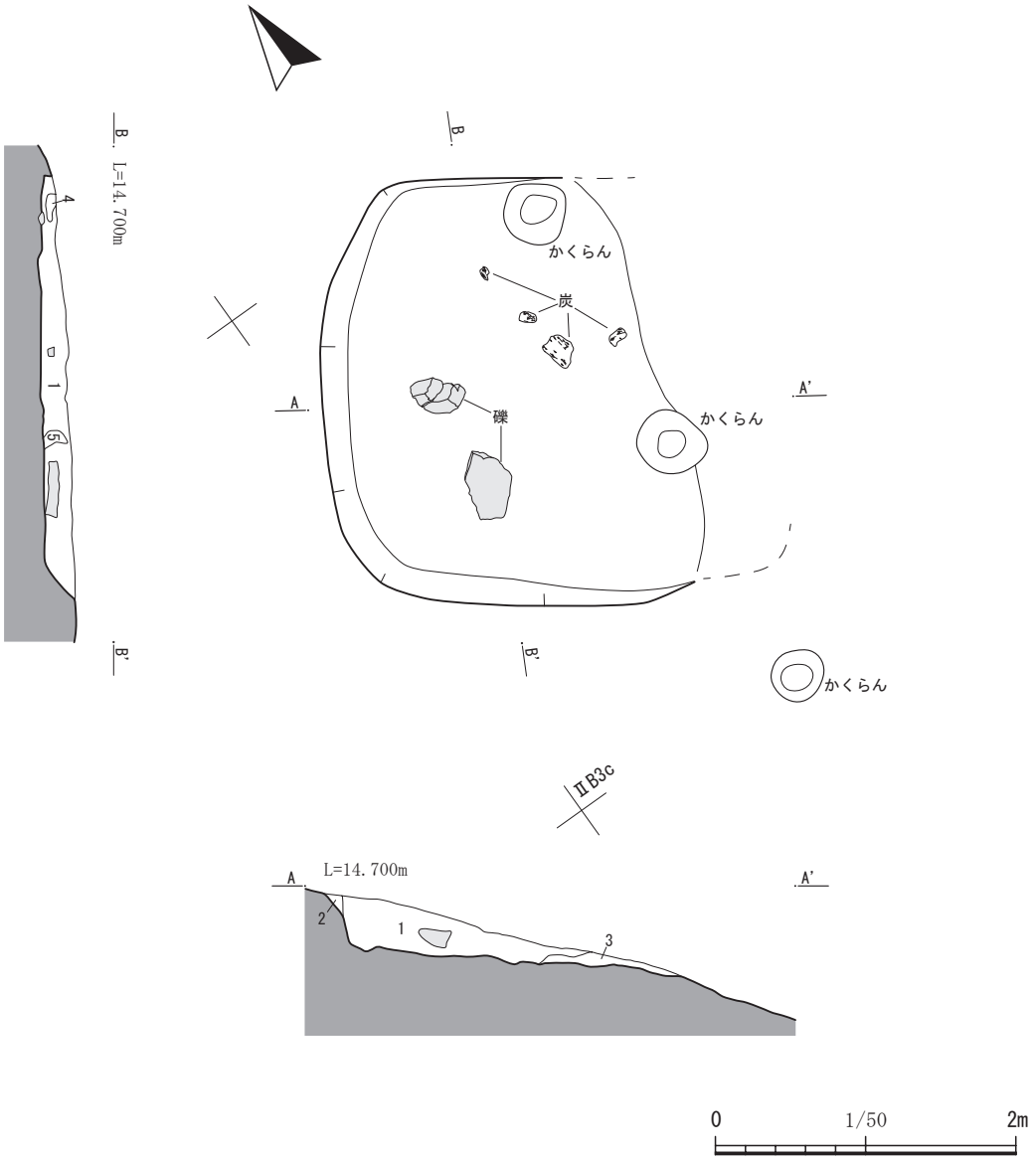
ＳＩ 03 竪穴住居跡（第８、11 図、写真図版７）
〔位置〕ＩＢ７ｆ、７ｇに位置する。
〔重複〕遺物包含層１を掘り込んで構築されている。
〔形態〕東西長約 220㎝、南北長 240㎝の不整な方形プランである。床面積は約 5.28㎡である。カマドを有しておらず、竪穴建物に分類すべきかもしれないが、ここでは竪穴住居として扱う。床面は南に向かってやや高くなっていく。貼床は４～ 20㎝程の厚さで、全面に施されている。確認面から床面までの深さは４～ 30㎝と浅いが、これは元来の掘り込みが浅いのではなく、基本土層Ⅱ層中での遺構確認が困難であったことに起因する。柱穴は検出されなかった。また壁溝等も存在しない。
〔カマド〕存在しない。
〔埋土〕埋土は５層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断が難しい。床面上に堆積した２層の上面に明赤褐色焼土（５層）の分布がみられる。この焼土は２層が堆積した面で火を焚いた一次焼土と推測され、住居の堆積過程に生成されたと判断される。よって、この焼土は本住居の使用時に伴うものではない。
〔出土遺物〕床面、カマド及び埋土中から土師器が総量で 353 ｇ出土した。この中で図示した土師器は２点で、重量合計は 126 ｇである。９はロクロ不使用の小型土師器長胴甕である。埋土中からの出土である。内外面口縁部はヨコナデ、外面体部は縦位のヘラナデ、内面体部は横位のヘラナデが施される。内面口縁部には炭化物が帯状に付着している。10 はロクロ不使用の土師器長胴甕である。埋土から出土した。内外面口縁部はヨコナデ、外面体部は縦位を主とするヘラナデ、内面体部は横位のヘラナデが施される。内面には炭化物が付着する。
〔性格〕古代の竪穴住居跡、あるいは竪穴建物跡である。
〔年代〕出土した土師器・須恵器の形態から９世紀～ 10 世紀前半代の構築、使用と推測する。

ＳＩ 04 竪穴住居跡（第９、11 図、写真図版８）
〔位置〕ⅡＢ３ｃ、４ｃに位置する。
〔重複〕遺物包含層２を掘り込んで構築されている。また、近代以降と推測される柱穴？によって床面東側の一部が損なわれている。
〔形態〕北東～南西長は約 280㎝である、プランの東部が失われており、北西～南東長は最大 238㎝分が検出されている。プランを方形と仮定した場合、床面積は約 7.73㎡と想定される。床面は概ね平坦である。貼床は施されていない。確認面から床面までの深さは０～ 32㎝と浅いが、これは元来の掘り込みが浅いのではなく、基本土層のⅡ層中での遺構確認が困難であったことに起因する。柱穴は検出されなかった。また壁溝等も存在しない。
〔カマド〕検出された範囲ではカマドは存在しない。プランが失われている南東壁、あるいは北東壁の東寄りにカマドが構築されていた可能性はある。
〔埋土〕埋土は５層に分けられる。埋土としたものに２次堆積の焼土、炭化材も含んでおり、住居焼失後に自然堆積としたものと推測される。
〔出土遺物〕床面、カマド及び埋土中から土師器、須恵器が総量で 540 ｇ出土した。この中で図示した土師器、須恵器は６点で、重量合計は 452 ｇである。11 はロクロ調整の土師器坏である。埋土中からの出土である。外面はロクロ調整で底辺部での再調整は無い。底面切り離しは回転糸切である。内面は横位と縦位のヘラミガキが施され、黒色処理がなされている。12 はロクロ調整の土師器坏である。埋土中からの出土である。外面はロクロ調整で底辺部での再調整は見当たらない。内面は上部が横位、



SI03（A-A' B-B'）
１．10YR2/2　黒褐色土　草根多量混入
２．10YR3/2　黒褐色土　10YR5/6　黄褐色土まだらに少量混入
３．10YR2/1　黒色土　10YR3/2　黒褐色土まだらに多量混入
４．10YR3/3　暗褐色土　しまりなし
５．5YR5/8　明赤褐色焼土　１次焼土と思われる
６．10YR5/4　にぶい黄褐色土　10YR2/2　黒褐色土まだらに多量混入　貼床

第８図　SI03 竪穴住居跡



SI04 (A-A' B-B')
1．10YR2/2　黒褐色土　草根多量混入
2．10YR3/2　黒褐色土　しまりなし
3．10YR2/2　黒褐色土　炭化物粒多量混入
4．2.5YR6/8　橙色焼土　1次焼土ではない
5．10YR8/3　浅黄橙色土　炭化物粒　焼土多量混入

第9図　SI04 竪穴住居跡

下部が放射状のヘラミガキが施され、黒色処理がなされている。13 はロクロ使用の土師器長胴甕で中型の器種である。埋土から出土した。外面口縁～体部上端部はロクロ調整、体部はヘラケズリ、内面はロクロ調整とヘラナデが施されている。14 はロクロ使用土師器長胴甕である。埋土から出土した。外面口縁部～体部上半部はロクロ調整、内面はヘラナデが施される。15 はロクロ不使用の土師器長胴甕である。埋土から出土した。内外面口縁部はヨコナデ、外面体部は縦位のヘラケズリ、内面体部は横位のヘラナデが施される。外面には炭化物が付着する。16 は須恵器の長頸瓶と推測される。体部片で器種は特定できず甕の可能性もある。埋土からの出土である。内外面ともにロクロ調整が施される。外面には緑色の自然釉がかかる。

〔性格〕古代の竪穴住居跡である。焼失したものと推測される。

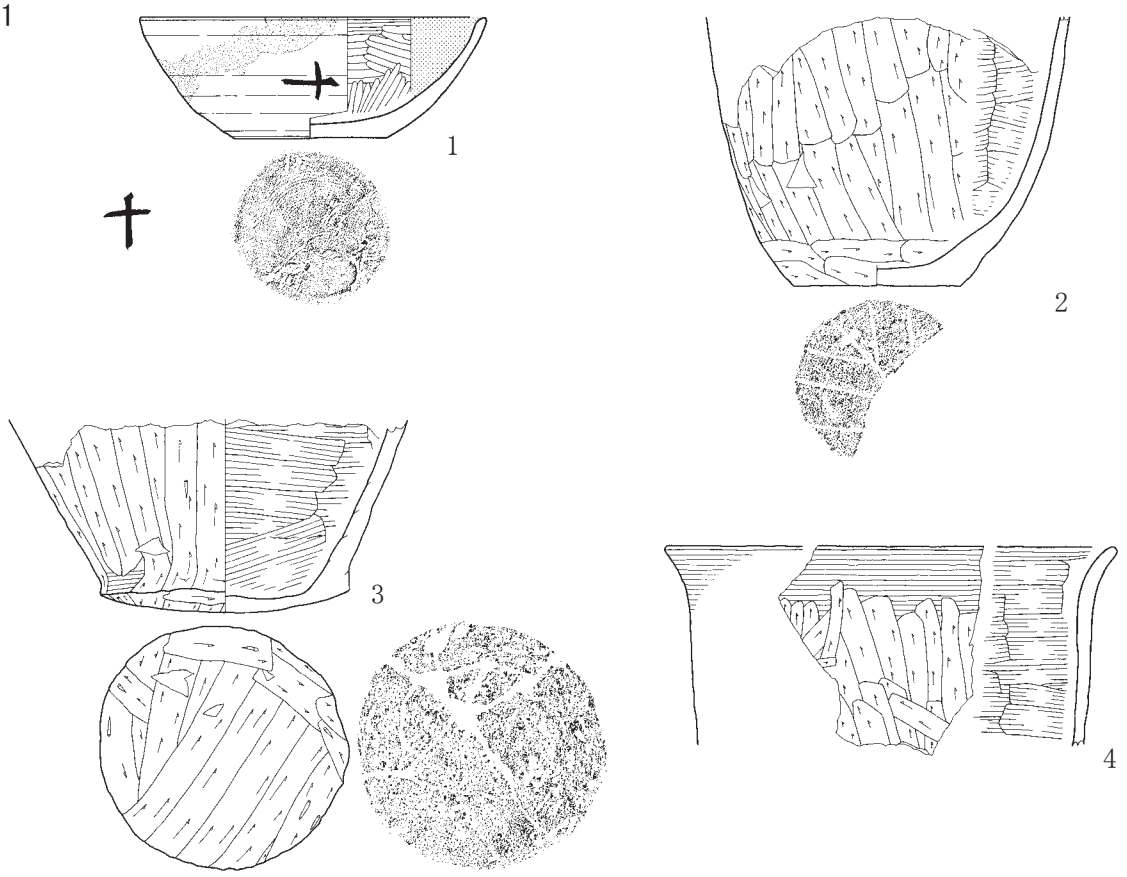
〔年代〕出土した土師器・須恵器の形態から９世紀～ 10 世紀前半代の構築、使用と推測する。

３　古代の出土遺物（第 10、11 図、写真図版 10、11）

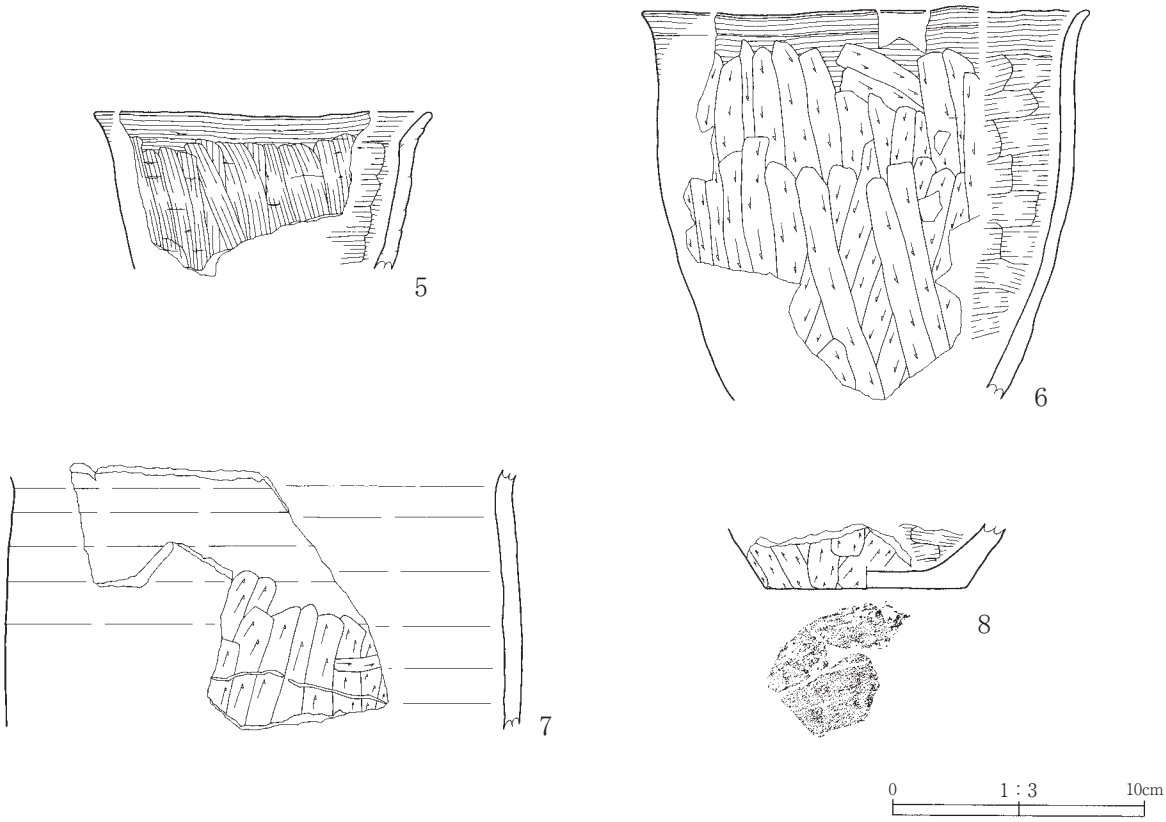
古代（９～ 10 世紀頃）の出土遺物は、土師器、須恵器がある。総量で 2,573 ｇの出土である。この内、図示したものは 20 点、合計重量 1,714 ｇである。これらのほとんどは、竪穴住居に伴っての出土である。これ以外に、試掘や粗掘中に遺構外の出土として取り上げた遺物もあるが、これらも本来は竪穴住居跡に伴っていた可能性が高い。個々の土師器、須恵器については観察表でその内容を示す。また、竪穴住居に伴う遺物については、各遺構の文章中でもその内容を記している。ここでは、遺構外出土の土師器、須恵器の説明を文章で補足する。

17、18 はロクロ不使用の土師器長胴甕である。ともにＩＢ７ｅグリッドからの出土である。出土グリッドからするとＳＩ 02 竪穴住居に伴う可能性が高いが、ＳＩ 01 竪穴住居も近い位置にあり所属は確定できない。17 は小型の土師器長胴甕で口縁部内外面がヨコナデ、体部外面が縦位のヘラナデ、体部内面が横位のヘラナデである。内面には炭化物が付着している。18 は土師器長胴甕の下半部片である。外面は縦位のヘラケズリ、内面は横位のヘラナデが施される。19 は須恵器甕の下半部片と推測される。外面上半部はロクロ、下半部は縦位のヘラケズリが施される。今回調査の試掘時の「下段トレンチ」からの出土で、グリッドはＩＢ８ｅ付近に相当し、ＳＩ 02 竪穴住居に伴う可能性が高い。19 は須恵器大甕の破片である。外面にタタキ目、内面にアテ具痕がみられる。今回調査の試掘時の「上段トレンチ」の出土でグリッドはＩＢ６ｄ～７ｄ付近に相当する。

SI01

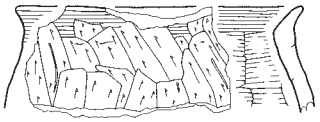


SI02

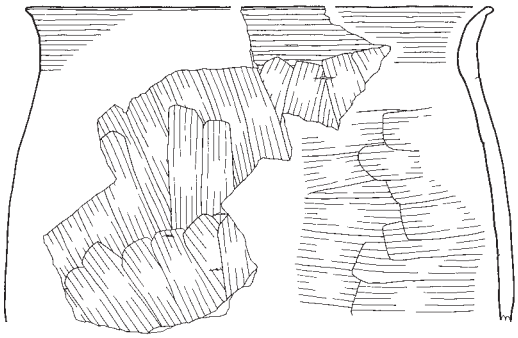


第 10 図　SI01・SI02 土師器

SI03

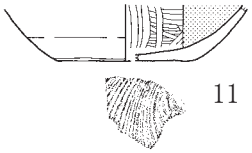


9

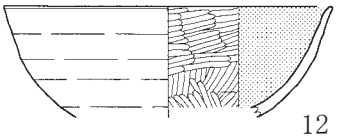


10

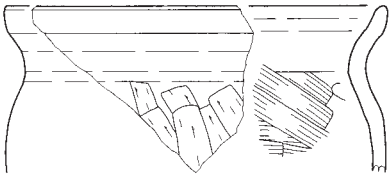
SI04



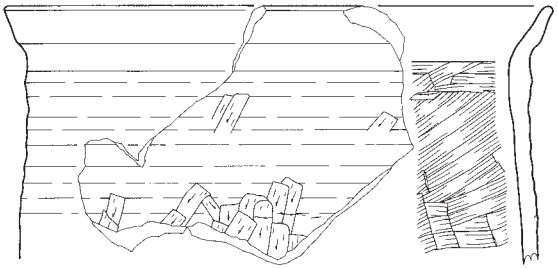
11



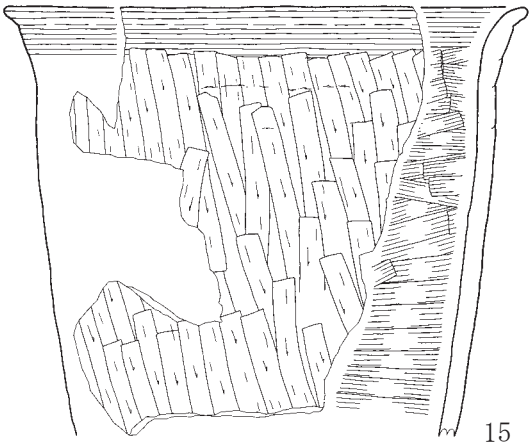
12



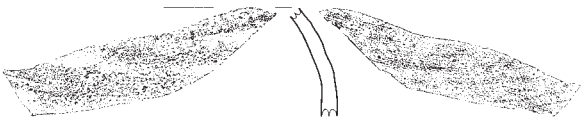
13



14

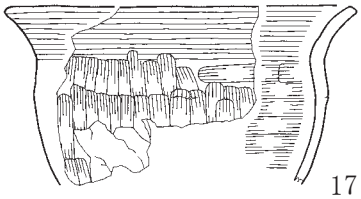


15

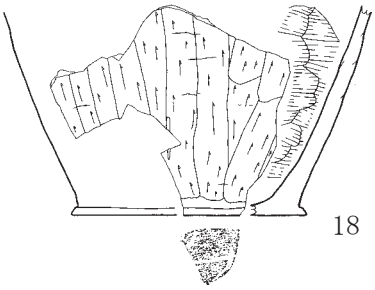


16

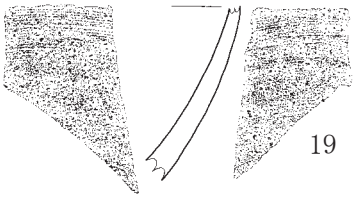
遺構外



17



18



19

20

0　1：3　10cm

第 11 図　SI03・SI04・遺構外土師器・須恵器

第２表　土師器・須恵器観察表

番号	種別	器種	出土位置	法量(cm)			重量(g)	調整	備考
				口径	器高	底径			
1	土師器	坏	SI01 床面	13.8	4.8	5.9	141	ロクロ ヘラミガキ 黒色処理 回転糸切	墨書「千」
2	土師器	長胴甕	SI01 床面	—	(10.6)	6.6	201	ヘラケズリ ヘラナデ 木葉痕	
3	土師器	長胴甕	SI01 カマド	—	(7.6)	9.9	256	ヘラケズリ ヘラナデ	カマド支脚
4	土師器	長胴甕	SI01 埋土	18.0	(8.2)	—	44	ヨコナデ ヘラケズリ ヘラナデ	
5	土師器	長胴甕	SI02 埋土	13.4	(6.5)	—	52	ヨコナデ ヘラナデ	内面炭化物付着
6	土師器	長胴甕	SI02 床面	17.7	(15.4)	—	149	ヨコナデ ヘラケズリ ヘラナデ	
7	土師器	長胴甕	SI02 埋土	—	(10.3)	—	88	ロクロ ヘラケズリ	頚部径 19.9
8	土師器	長胴甕	SI02 埋土	—	(2.6)	7.9	44	ヘラケズリ ヘラナデ 板痕	ロクロ長胴甕か
9	土師器	長胴甕	SI03 埋土	11.2	(4.2)	—	36	ヨコナデ ヘラケズリ ヘラナデ	内面炭化物付着
10	土師器	長胴甕	SI03 埋土	18.1	(12.8)	—	90	ヨコナデ ヘラナデ	内面炭化物付着
11	土師器	坏	SI04 埋土	—	(2.1)	5.3	13	ロクロ ヘラミガキ 黒色処理 回転糸切	
12	土師器	坏	SI04 埋土	13.1	(4.4)	—	18	ロクロ ヘラミガキ 黒色処理	
13	土師器	長胴甕	SI04 埋土	15.1	(6.5)	—	39	ロクロ ヘラケズリ ヘラナデ	
14	土師器	長胴甕	SI04 埋土	21.7	(10.2)	—	117	ロクロ ヘラケズリ ヘラナデ	
15	土師器	長胴甕	SI04 埋土	20.8	(16.5)	—	243	ヨコナデ ヘラケズリ ヘラナデ	外面炭化物付着
16	須恵器	長頚瓶か	SI04 埋土	—	(4.5)	—	22	ロクロ	外面自然釉
17	土師器	長胴甕	ＩＢ７ｅ Ⅰ～Ⅱ層	13.8	(7.1)	—	40	ヨコナデ ヘラナデ	内面炭化物付着
18	土師器	長胴甕	ＩＢ７ｅ Ⅰ～Ⅱ層	—	(8.2)	9.3	64	ヘラケズリ ヘラナデ 木葉痕か	
19	須恵器	甕	試掘トレンチ 下段	—	(7.0)	—	31	ロクロ ヘラケズリ	出土位置ＩＢ８ｅ付近に相当
20	須恵器	大甕	試掘トレンチ 上段	—	(4.5)	—	16	タタキ目 アテ具痕	出土位置ＩＢ６ｄ～７ｄ付近に相当

４　縄文時代の遺物包含層

縄文時代の遺物を含む土層が２箇所に分かれ検出された。それぞれを「遺物包含層１」「遺物包含層２」として報告する。

遺物包含層１（第12図、写真図版９）

〔位置〕調査範囲の南西部、西及び南からの傾斜が緩くなった地点に分布する。グリッドではＩＢ５ｂ～５ｆ、ＩＢ６ｂ～６ｆ、ＩＢ７ｂ～７ｊ、ＩＢ８ｂ～８ｉ、ＩＢ９ｅ～９ｉに位置する。図では実線で包含層の範囲を示したが、同じベースの土層（基本土層Ⅲ層）は周囲と連続しており、また遺物も少量包含し、実際には明瞭な範囲を提示することは困難である。図示した範囲は、顕著に遺物量が多い範囲である。西側、南側の急斜面では基本土層Ⅲ層は、非常に薄い堆積であり、包含層の範囲として一線を画することができる。ただし、図示した範囲外の西側斜面のＩＡ６ｉで大型の破片が出土し、これも遺物包含層１に属する遺物として扱っている。

〔重複〕古代の竪穴住居ＳＩ01、ＳＩ02、ＳＩ03の構築の際の掘り込みが本包含層にも及んでおり、遺物包含層の一部が乱れている。

〔形態〕図で示した範囲の形状は東西長約33ｍ、南北幅12～14ｍの隅丸長方形のプランである。面積は約402㎡である。プランの西側と南側が急斜面であり、斜面が緩くなった本包含層の範囲に遺物を含む土が流れ込み堆積したものと推測される。

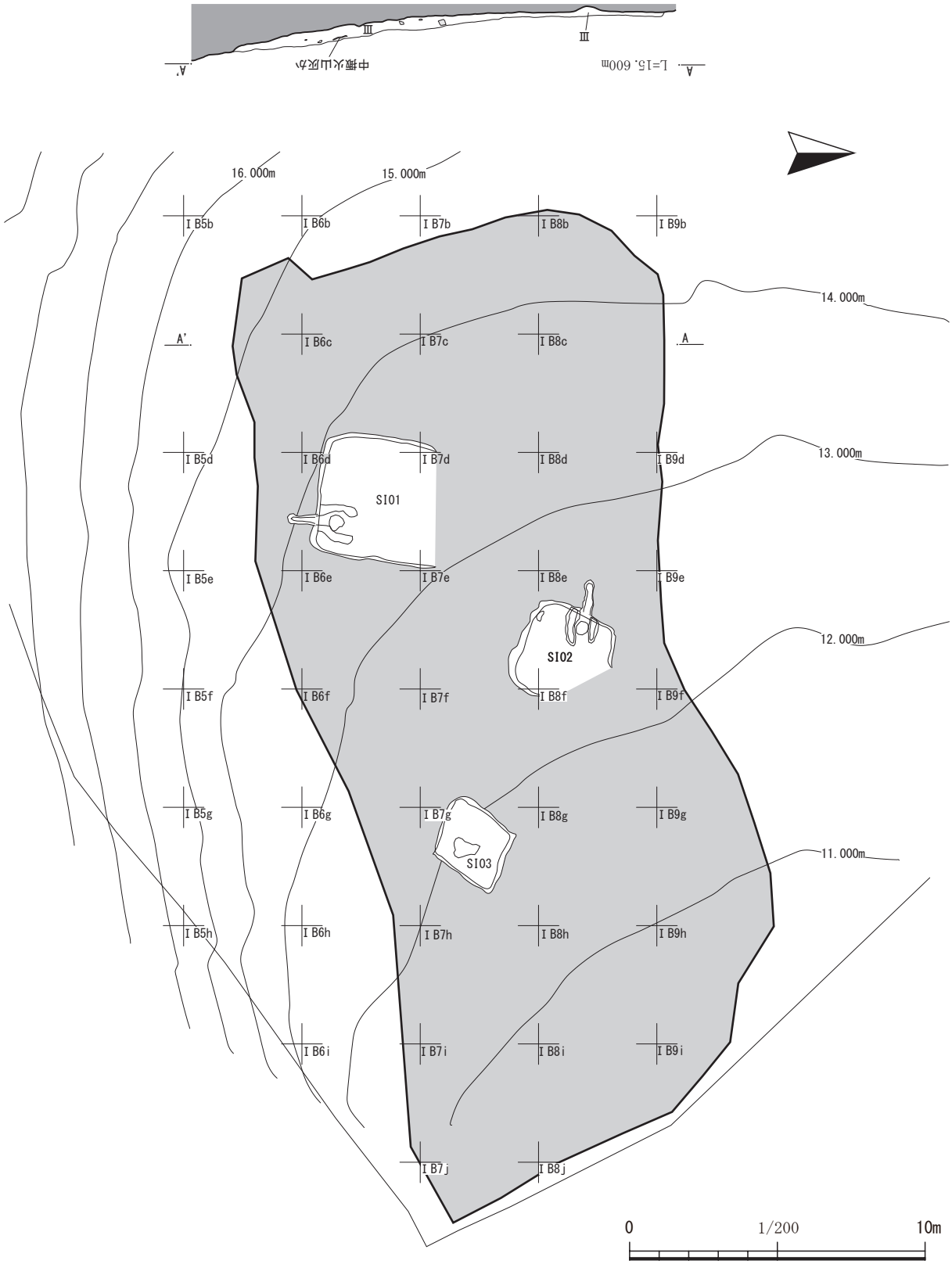
〔土層〕基本土層Ⅲ層に相当する土層が遺物包含層である。層厚は30～50㎝である。土色は10ＹＲ３／４暗褐色土で、縄文土器片、炭化物粒を多量に混入している。また10ＹＲ４／４褐色土をまだらに混入している。土層中に中撹火山灰らしきものがみられたが、極少量であり、降下した堆積状況ではなく、二次堆積と推測される。

〔出土遺物〕出土遺物は縄文土器（土器片利用土製品１点を含む）が総重量で75,334ｇ、石器（成品）44点、総重量3,082.1ｇが出土した。この内、縄文土器を6,190ｇ、土器片利用土製品１点26ｇを図化し報告する。石器は全点を報告する。出土遺物の重量には、竪穴住居ＳＩ01、ＳＩ02、ＳＩ03の貼床調査中、包含層１と重複する範囲に設置した試掘トレンチ出土の縄文土器、石器も含んでいる。住居貼床調査中に出土した遺物は、貼床を構築する土からの出土ではなく、包含層土のⅢ層からの出土と理解される状況であった。また、住居跡の埋土から出土した縄文時代の遺物も包含層出土遺物としてカウントしている。

出土した縄文土器は、主要な時期のものでは早期中葉の貝殻・沈線文系土器、前期初頭の土器、前期前葉の大木１式相当の土器が出土しており、広い時間幅のものを含んでいる。これらの土器の出土状況は、時期別の地層の上下は判断できず、一括の混在した状況で包含されていると認識された。また、土器は接合率も悪いことから、層順に対応する一次堆積ではなく、多地点から土砂とともに移動し、再堆積した状況と推測される。そして、土器の年代に時間幅があり、石器についても各時代のものが混在して存在していると推測される。また、この他、大木２ｂ式相当（136）、大木９式相当（137）、前期中葉以降の縄文土器片（138）があるが、客体的なものと判断される。また土器片の縁辺部と表面を擦って形作り、穿孔を有する土器片利用の「土製品」が１点（139）出土している。繊維を含んだ土器片で、前期初頭～前半のものと推測される。

〔性格〕縄文時代の遺物を含む遺物包含層である。ただし、一次的な廃棄の状態ではなく、二次堆積したものと推測される。

〔年代〕出土した土器から、縄文時代前期前葉以降に再堆積して生成された遺物包含層と推測される。



包含層１＝基本土層Ⅲ層（A-A'）
10YR3/4　暗褐色土　縄文土器片　炭化物粒多量混入　10YR4/4　褐色土まだらに少量混入　中掫火山灰らしきもの少量混入

第 12 図　遺物包含層１

遺物包含層２（第13図、写真図版９）

〔位置〕調査範囲の中央北部、西からの傾斜が緩くなった地点に分布する。グリッドではⅡＢ２ｂ～２ｄ、ⅡＢ３ｂ～３ｄ、ⅡＢ４ｂ～４ｄ、ⅡＢ５ｂ～５ｄ、ⅡＢ６ｂに位置する。図では実線で包含層の範囲を示したが、同じベースの土層（基本土層Ⅲ層）は周囲と連続しており、また遺物も少量包含し、実際には明瞭な範囲を提示することは困難である。図示した範囲は、顕著に遺物量が多い範囲である。調査区内の包含層の形状から調査区外北側にも包含層が伸びると推測される。

〔重複〕古代の竪穴住居ＳＩ04の構築の際の掘り込みが本包含層にも及んでおり、遺物包含層の一部が乱れている。また近代以降の攪乱もみられた。

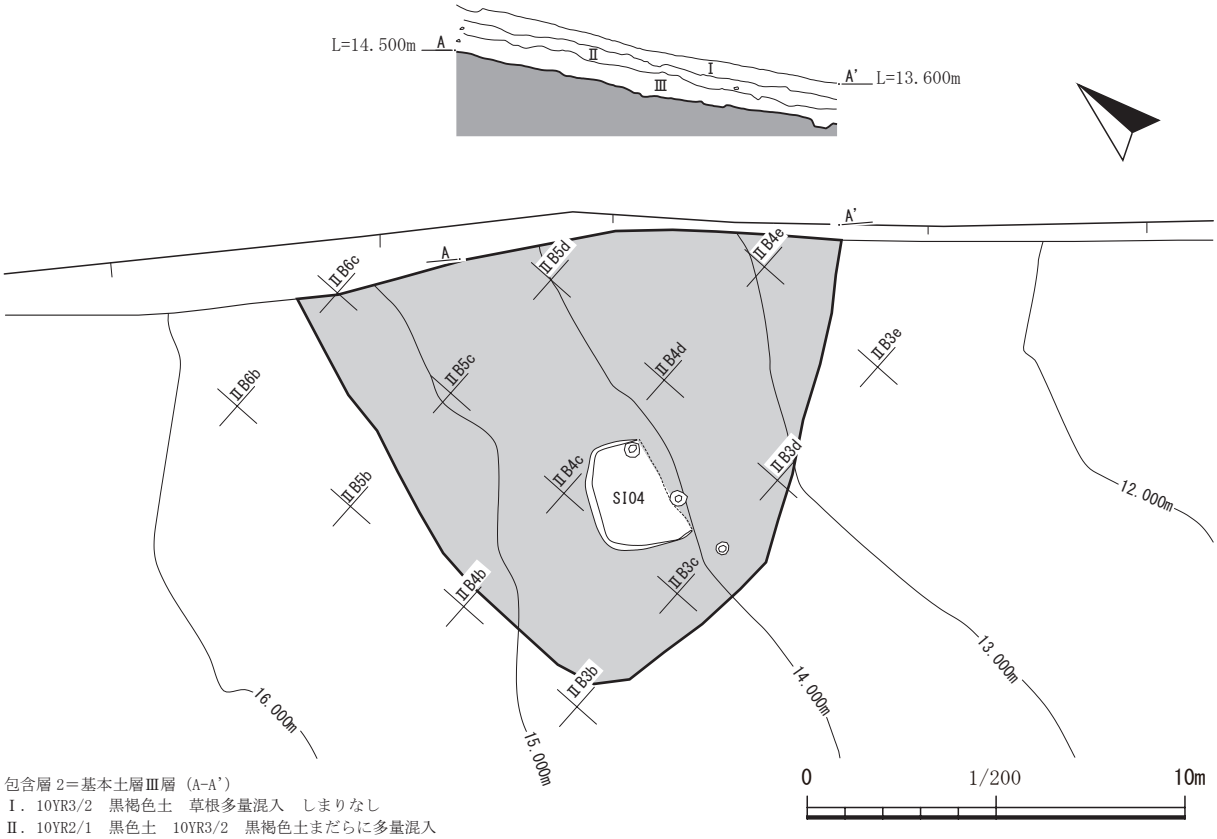
〔形態〕図で示した範囲の形状は東西長約11ｍ、南北径約14ｍの半円形のプランである。面積は約111㎡である。プランの西側が急斜面で斜面が緩くなった本包含層の範囲に遺物を含む土が流れ込み堆積したものと推測される。

〔土層〕基本土層Ⅲ層に相当する土層が遺物包含層である。土色は10ＹＲ３／４暗褐色土で、縄文土器片、炭化物粒を多量に混入している。また10ＹＲ４／４褐色土をまだらに混入している。土層の下部に砕けた岩石が多量に混入している。層厚は20～50㎝である。

〔出土遺物〕出土遺物は縄文土器が総重量で6,621ｇ、石器（成品）８点、総重量1,176.1ｇが出土した。この内、縄文土器は354ｇを図化し報告する。石器は全点を報告する。出土した縄文土器は、主要な時期のものでは早期中葉の貝殻・沈線文系土器、前期初頭の土器、前期前葉の大木１式相当の土器が出土しており、広い時間幅のものを含んでいる。これらの土器の出土状況は、時期別の地層の上下は判断できず、一括の混在した状況で包含されていると認識された。また、土器は接合率も悪く、層順に対応する一次堆積ではなく、多地点から土砂とともに移動し、再堆積した状況と推測される。そして、土器の年代に時間幅があり、石器についても各時代のものが混在して存在していると推測される。

〔性格〕縄文時代の遺物を含む遺物包含層である。ただし、一次的な廃棄ではなく、二次堆積したものと推測される。当初、包含層１と包含層２は範囲が離れるため、時期差があるのではないかと予想していたが、出土した土器の型式構成、時間幅も共通しており、同一の包含層とみなしても良い結果となった。両包含層を隔てる空間は谷地形の底になっており、元来はそこにも包含層が存在し、両包含層は連続していたが、谷底部分の包含層は調査区外の東方に流失したとも推測される。いずれにせよ、包含層２の遺物密度は、包含層１に比較すると圧倒的に低く、包含層の主体部は、包含層１の方である。

〔年代〕出土した土器から、縄文時代前期前葉以降に再堆積して生成された遺物包含層と推測される。



包含層２＝基本土層Ⅲ層（A-A'）
Ⅰ．10YR3/2　黒褐色土　草根多量混入　しまりなし
Ⅱ．10YR2/1　黒色土　10YR3/2　黒褐色土まだらに多量混入
Ⅲ．10YR3/4　暗褐色土　10YR4/4　褐色土まだらに少量混入　下部に砕岩を多量に混入　縄文土器片を含む

第13図　遺物包含層２

5　縄文時代の遺物

縄文土器（第 14 ～ 19 図、写真図版 12 ～ 14）

遺物包含層１と遺物包含層２から縄文土器が出土している。遺物包含層１からは 75,318 ｇ（土器片利用土製品を除く）、遺物包含層２からは 6,621 ｇの出土で、合計 81,929 ｇとなり、これが今回の調査で出土した縄文土器の総重量である。この内図示したものは 43 点（土器片利用土製品を除く）、合計重量 6,544 ｇを図示した。これら図示した土器の個々のデータ、属性、法量等については観察表にまとめている。101 ～ 138 は遺物包含層１、140 ～ 144 は遺物包含層２からの出土土器である。

101 ～ 106 は遺物包含層１出土の貝殻文・沈線文系土器である。101、102 は接合しないが同一個体と推測される破片をそれぞれ３点図示した。貝殻文・沈線文系土器で全体器形が揃う個体はないが、いずれも口縁部は波状で、体部に屈曲を持ち上半部が広がる「キャリパー」形の器形である。また、底部が残存する個体もないが、尖底～丸底の形態と推測される。文様は貝殻腹縁文、棒状の工具を押し込むように連続して刻む押引沈線、通常の沈線、先端が尖る工具で施される連続刺突文、棒状工具で施される刺突文がみられる。そして、これらを組み合わせて文様帯が構成されている。型式的には明神裏Ⅲ式、物見台式に類似するもので、時期は縄文時代早期中葉と推測される。107 ～ 111 は口唇部に類似する連続圧痕が施される土器である。施文は組縄による原体とする見解が主流のいわゆる「ピッチリ縄文」である。胎土には繊維が顕著に含まれており、いずれの個体も類似した質感の土器である。縄文時代前期初頭に位置付けられる土器である。112 ～ 114 は口縁端部から口唇部が僅かに膨隆する断面形が類似する土器片である。これは施文の際に、縄文原体の押し付けが強かったための形状と看取される。113 と 114 は「ピッチリ縄文」で縄文原体の末端の圧痕が顕著で、あたかもループ文や綾絡文の様な表出になっている。特に 113 はこれが３段にわたってみられ、意図的な文様表現と感じられる。胎土には繊維が顕著に含まれており、112 ～ 114 は縄文時代前期初頭の時期と推測される。115、116 は口縁部上端に連続する圧痕が施されている。どちらも縄文時代前期初頭と推測される。115 の縄文原体は「ピッチリ縄文」と思われる。117 は縄文原体が、前々段反撚ＬＲＲである。口唇部にも同じ縄文原体が施文されている。縄文時代前期初頭と推測される。118 は口縁上端部に連続する圧痕が施され、結束のあるＲＬとＬＲの羽状縄文が用いられている。縄文時代前期初頭と推測される。119 は結束のあるＲＬ縄文が施されている。縄文時代前期初頭と推測される。120 ～ 122 は口縁部に「ループ文」の文様帯を持つものである。120 は、２段のループ文が斜位回転によって山形に施されている。121、122 は３段のループ文が横位に施されている。122 は結束のない羽状縄文が施文されている。いずれも縄文時代前期前葉、大木１式相当と判断される。123 は不明瞭であるが、不整撚糸文が口縁部に横位に施されていると観察される。縄文時代前期前葉、大木１式相当であろうか。124 は不整撚糸文が口縁部に横位に施され、結束のない羽状縄文が用いられている。縄文時代前期前葉、大木１式相当と判断される。125、126 は斜位の縄文が施されている土器である。縄文時代前期初頭～前葉と推測される。127、128 は底部尖底部の破片である。縄文原体がつぶれており判別が難しいが、127 は「ピッチリ縄文」と推測される。縄文時代前期初頭に属すると推測される。129、130 は底部付近～尖底部の土器片である。縄文原体は「ピッチリ縄文」であり縄文時代前期初頭と推測される。縄文原体、胎土の類似から、上半部片である 107 ～ 111 の底部形態が 129、130 に相当すると理解される。131 は底辺部～底部の土器片である。底部は径が極端に小さいが平底である。縄文時代前期初頭～前葉と推測される。132 は平底の土器片である。縄文時代前期初頭～前葉と推測される。133 はＲ撚糸文を横位に施文している。胎土には繊維が混入せず硬緻であり、縄文時代早期に属する可能性

もあるが、明確に判断できない。134、135 は撚糸文が横位に施されている。135 は平底の底部片である。縄文時代前期初頭～前葉と推測される。136 は平底の底部～底辺部片で、波状連鎖撚糸文が施される。大木２ｂ式に相当すると判断される。137 は隆凹線による区画を有する土器片である。縄文時代中期大木９式に相当する。なお、今回の調査で出土した明確な縄文時代中期の土器片はこの１片のみである。138 は底辺部の縄文土器片である。胎土、質感から今回の出土主体の早期中葉、前期初頭～前葉ではなく、それよりも以後の所属と推測される。しかし、文様の特徴が見いだせず、詳細な時期は判断できない。

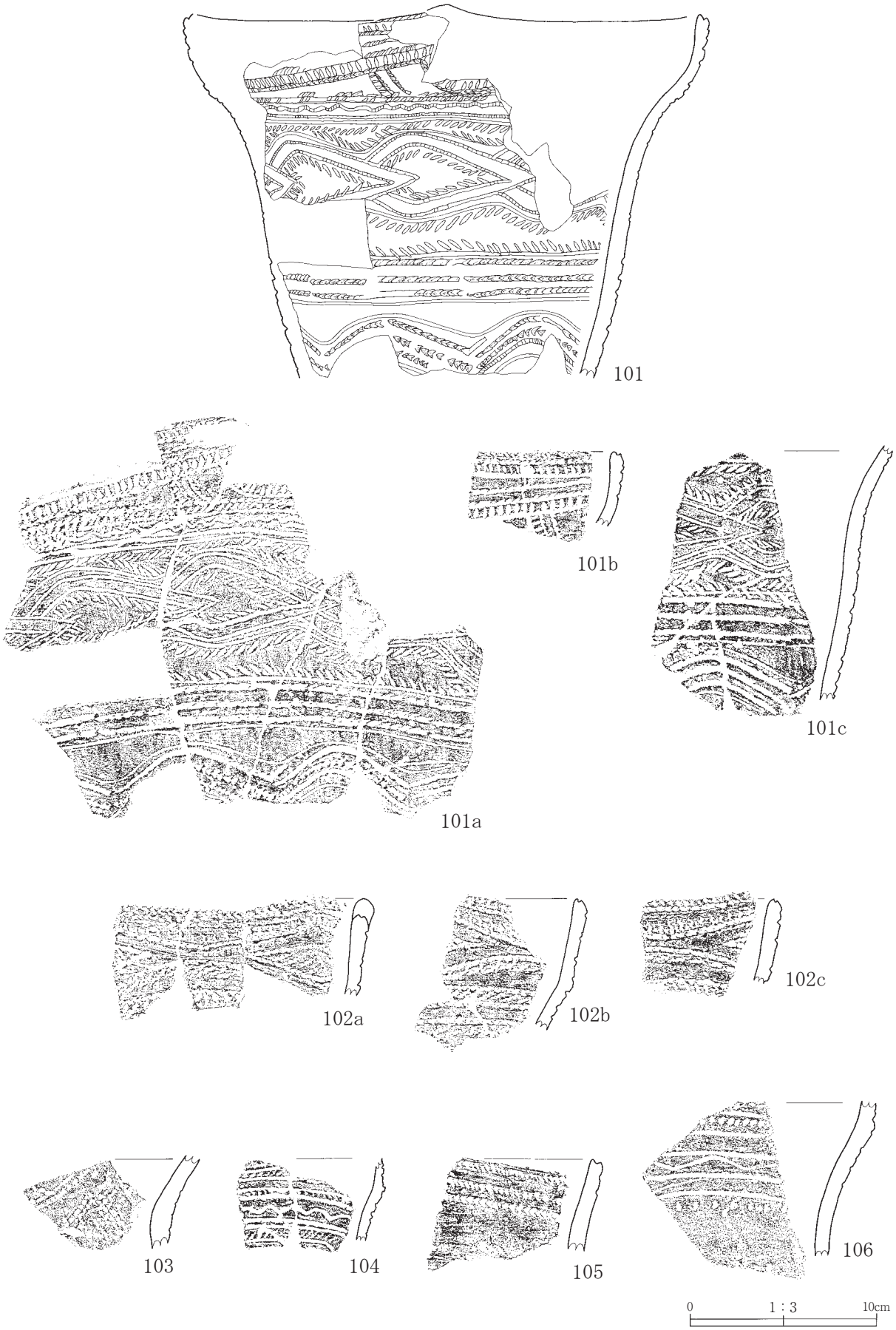
140 ～ 144 は遺物包含層２出土の縄文土器片である。140 は連続する刺突文と沈線文が施される貝殻、沈線文系土器である。遺物包含層１出土の 101 ～ 106 と同時期の縄文時代早期中葉、型式的には明神裏Ⅲ式、物見台式に類似すると判断される。141、142 は前々段反撚ＬＲＲの縄文原体が用いられている。縄文時代前期初頭～前葉と推測される。なお、141 と 142 は同一個体の可能性が高い。143 は「ピッチリ縄文」が施されており、縄文時代前期初頭と推測される。144 は口縁部に横位の不整撚糸文が施されている。縄文時代前期前葉、大木１式に相当すると推測される。

土器片利用土製品（第 19 図 139、写真図版 14）

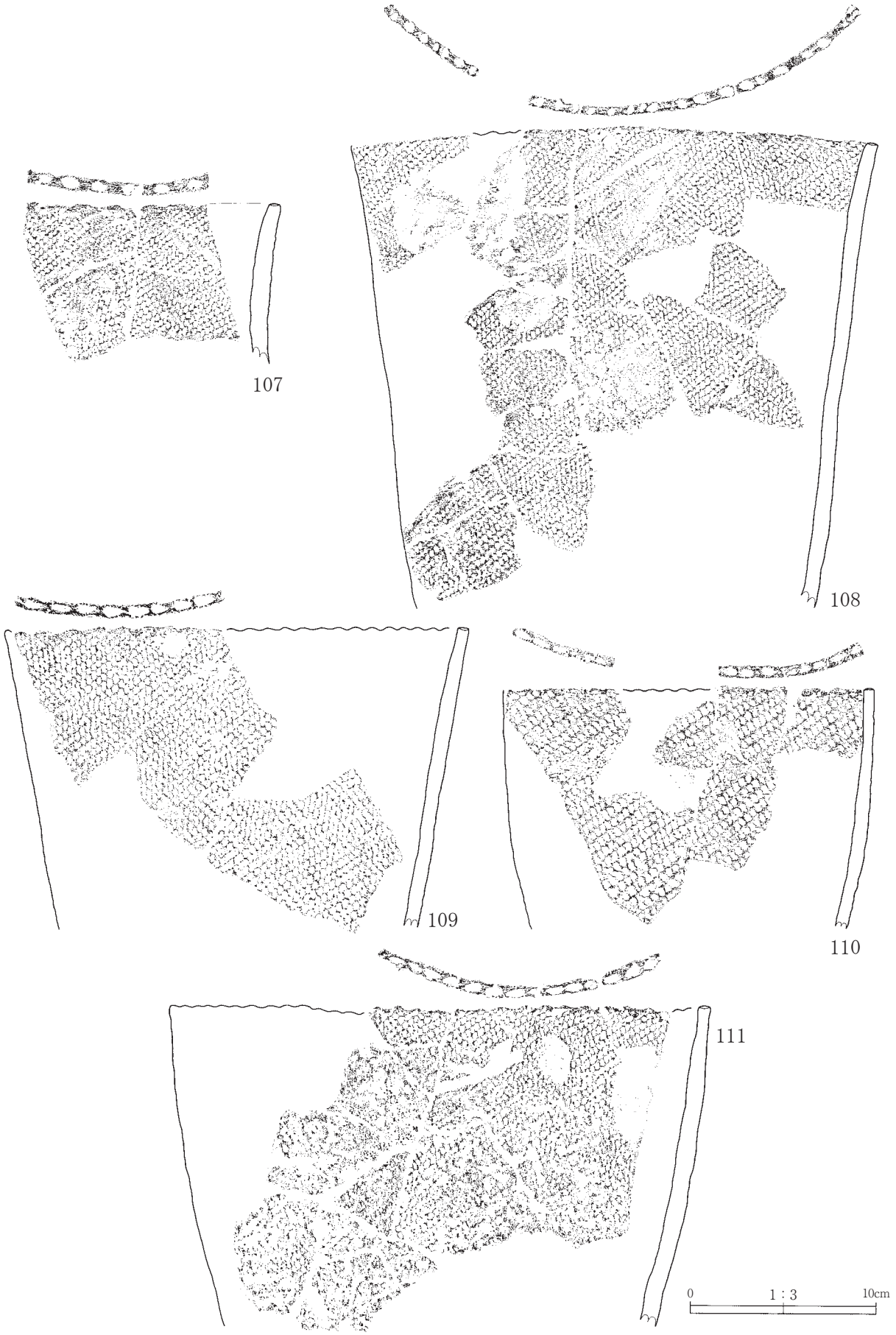
遺物包含層１出土の 139 を「土器片利用土製品」として報告する。本調査で１点のみの出土である。縄文土器片の縁を擦って成形しているものである。土器外面も擦って整形していると観察される。内面には擦りは観察されない。また、上部（図示した）の端部に穿孔が施されている。下半部が欠損しており全体形は不明であるが、側部のラインをみると円形にはならず、小判形を呈すると推測される。形状が円形ではないと推測されることから「土器片円盤・円板」の名称を用いていない。使用している土器は繊維が顕著な胎土であり、今回調査で主体の縄文時代前期初～前葉に属すると推測される。縄文原体の施文が観察されるが、整形による擦りによって原体の種別を判別できない。

石器（第 20 ～ 26 図、写真図版 15 ～ 18）

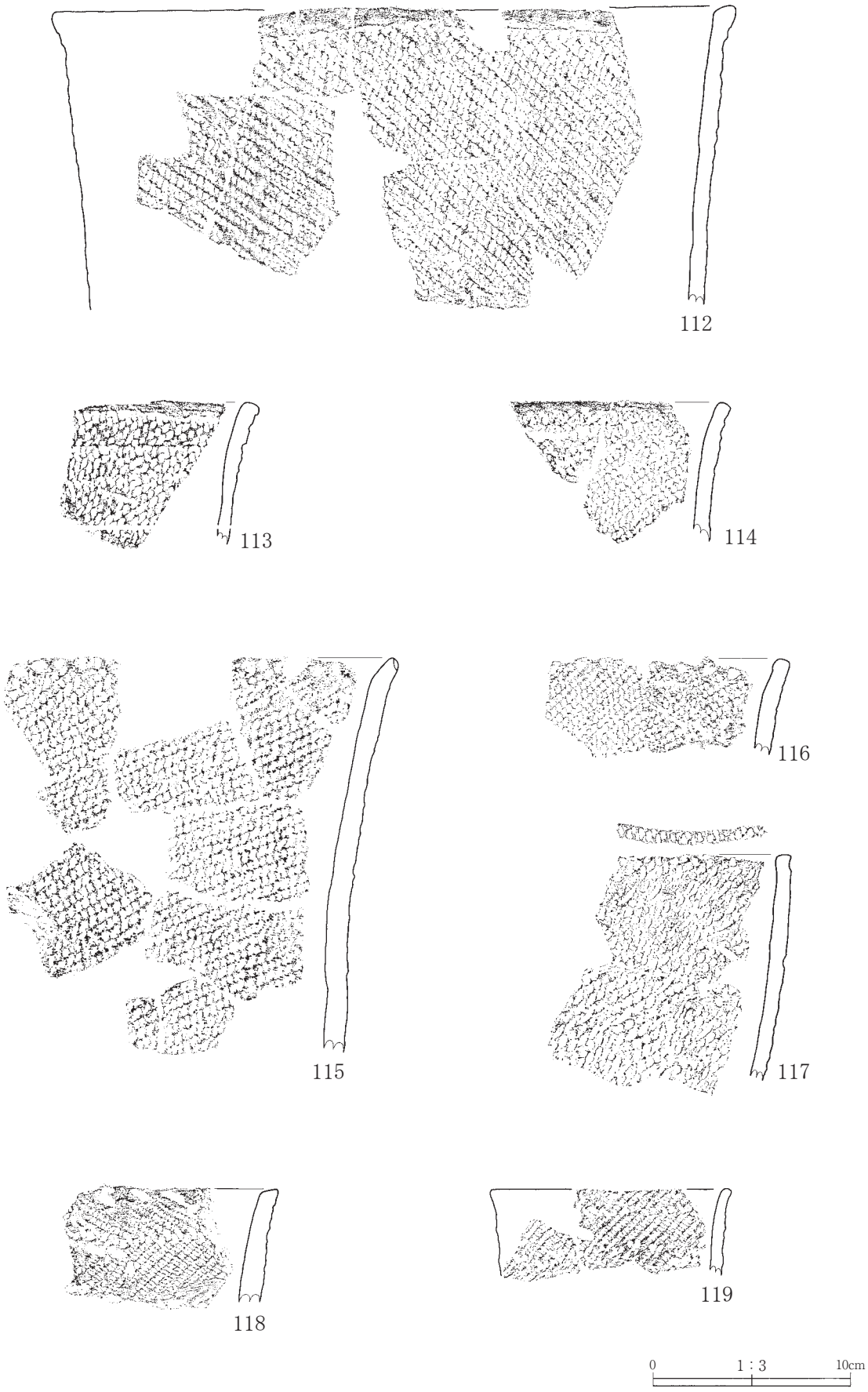
石器（成品）は遺物包含層１から 44 点、総重量 3,082.1 ｇが出土した。また、遺物包含層２からは石器（成品）８点、総重量 1,176.1 ｇが出土した。これに加え、排土捨場から採取した出土地点不明の石器が１点、重量 4.6 ｇがある。これらが今回の調査出土石器（成品）の全てであり、全点を図示した。総計 53 点、合計重量 4,262.8 ｇとなる。各々のデータ、属性、法量等については観察表にまとめている。遺物包含層１、２ともに、縄文時代早期中葉、前期初頭～前葉の土器が主体であり、これらの石器も概ねこの時期に伴うものと推測される。201 ～ 244 は遺物包含層１出土の石器である。石鏃が３点（201 ～ 203）、石匙が 22 点（204 ～ 226）、石箆が１点（227）、スクレイパー類 10 点（228 ～ 237）、磨製石斧３点（238 ～ 240）、敲磨器類４点（241 ～ 244）が出土している。石鏃は全て無茎鏃である。石匙は点数が多く、縦長のもの、横長のもの、斜めに長いものが混在しているが縦長の物が過半数を占める。210 はつまみ部が未調整？であるが、石匙に分類している。227 は形状から石箆とした。１点のみの出土である。228 ～ 237 は定形の石器ではないが刃部を有しており、スクレイパー類とした。238 ～ 240 は全面を研磨した磨製石斧である。240 は刃部が著しく欠失している。241 ～ 244 は礫石器の敲磨器類である。いずれも磨痕と敲打痕が認められる。245 ～ 252 は遺物包含層２出土の石器である。石鏃１点（245）、スクレイパー類１点（246）、石匙３点（247 ～ 248）、磨製石斧２点（250、251）、敲磨器類１点（252）が出土した。遺物包含層１と同様に石匙の割合が高い。252 は磨痕のみが認められ、磨石とするのが妥当であろうか。253 は排土場から採取された石匙である。遺物包含層１出土の可能性が高いが確認できず、出土位置は不明である。



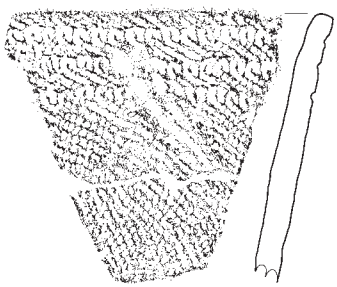
第 14 図　遺物包含層 1 土器（1）

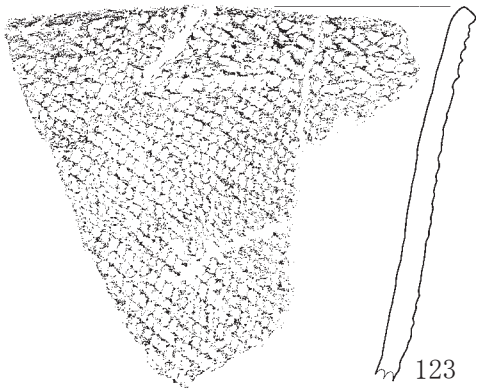


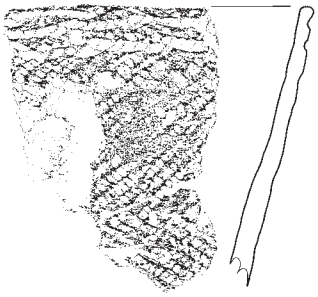
第15図　遺物包含層1土器（2）

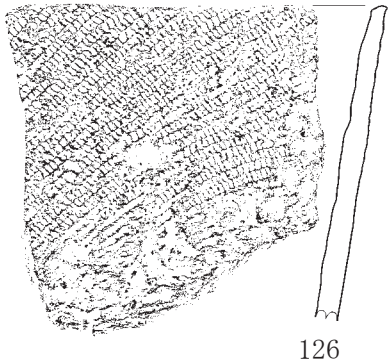


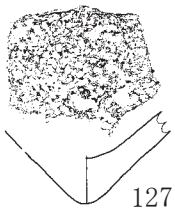
第16図　遺物包含層1土器（3）

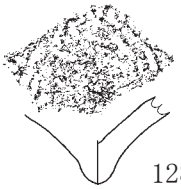


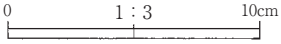




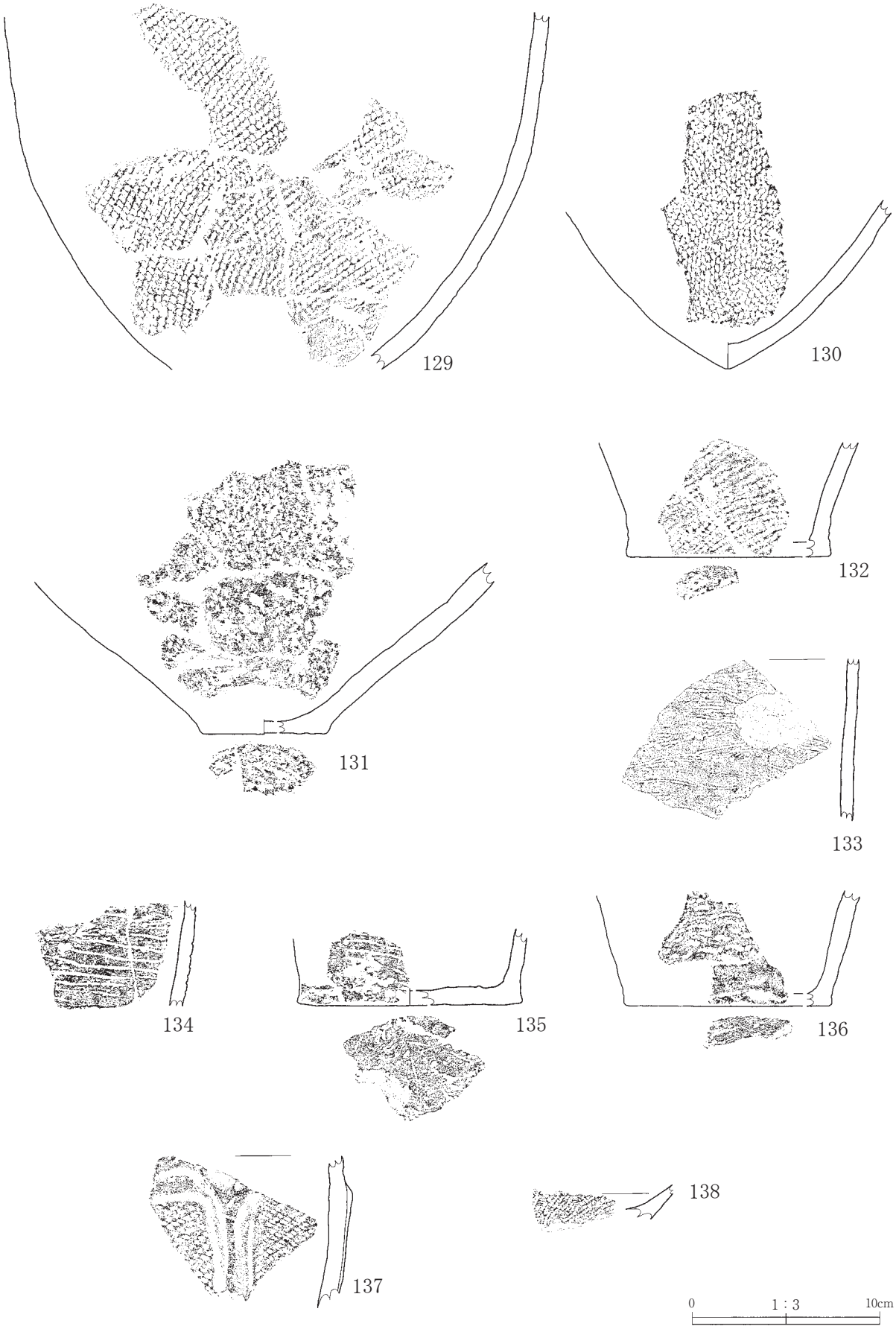




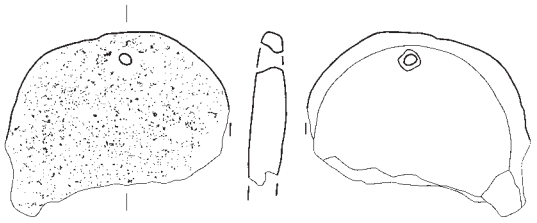


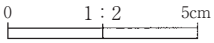


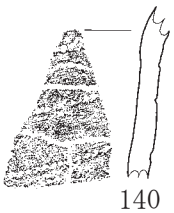
第 17 図　遺物包含層 1 土器（4）

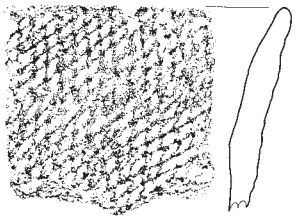


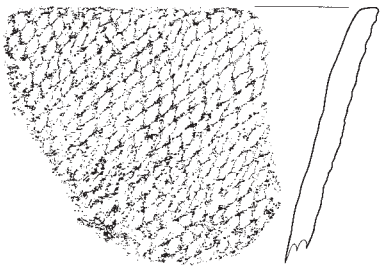
第18図　遺物包含層1土器（5）

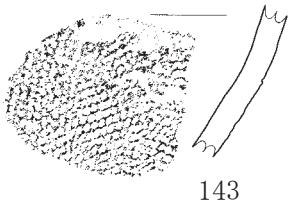


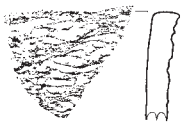


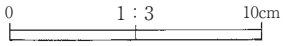












第19図　土製品・遺物包含層２土器

第３表　縄文土器観察表（遺物包含層１）

番号	器種	部位	出土位置	層	法量(cm) 口径	器高	底径	重量(g)	胎土	時期
101	深鉢	口縁～体部	ⅠB6ｃ、7ｃ	Ⅲ	28.4	(20.0)	—	1074	硬緻	早期
	３片に分かれる　押引沈線文　刺突文　連続する刺突文　　貝殻、沈線文系土器									
102	深鉢	口縁部	ⅠB6ｄ	Ⅲ	—	(7.0)	—	151	硬緻	早期
	３片に分かれる　貝殻腹縁文　　内面平滑　貝殻、沈線文系土器									
103	深鉢	体部上半	ⅠB6b	Ⅲ	—	(4.4)	—	37	硬緻	早期
	貝殻腹縁文　内面平滑　沈線文系土器									
104	深鉢	体部上半	ⅠB6b、7c	Ⅲ	—	(4.2)	—	24	硬緻	早期
	押引沈線文　貝殻腹縁文　連続する刺突文　　貝殻、沈線文系土器									
105	深鉢	口縁部	ⅠB7e	Ⅲ	—	(4.9)	—	42	硬緻	早期
	連続する刺突文　　貝殻、沈線文系土器									
106	深鉢	体部	ⅠB8b	Ⅲ	—	(8.0)	—	85	硬緻	早期
	沈線　刺突文　　貝殻、沈線文系土器　胎土に白い礫顕著に混入									
107	深鉢	口縁部	ⅠB7c	Ⅲ	—	(8.4)	—	121	繊維	前期初
	口唇部連続する圧痕　「ピッチリ縄文」見た目ＬＲ　前段の撚り見分けられない									
108	深鉢	口縁～体部	ⅠB7d	Ⅲ	28.4	(24.9)	—	511	繊維	前期初
	口唇部連続する圧痕　「ピッチリ縄文」見た目ＬＲ　前段の撚り見分けられない									
109	深鉢	口縁～体部	ⅠB7f	Ⅲ	24.8	(15.9)	—	223	繊維	前期初
	口唇部連続する圧痕　「ピッチリ縄文」見た目ＬＲ　前段の撚り見分けられない									
110	深鉢	口縁～体部	ⅠB7g	Ⅲ	20.0	(12.3)	—	161	繊維	前期初
	口唇部連続する圧痕　「ピッチリ縄文」か　見た目ＬＲ　前段の撚り見分けられない									
111	深鉢	口縁～体部	ⅠA6i	Ⅲ	28.6	(16.4)	—	423	繊維	前期初
	口唇部連続する圧痕　「ピッチリ縄文」見た目ＬＲ　前段の撚り見分けられない									
112	深鉢	口縁～体部	ⅠB6b、7b	Ⅲ	34.2	(14.6)	—	416	繊維	前期初
	ＲＬ縄文か　口縁部上端部に原体の圧痕が顕著につく　口唇部がやや膨隆する									
113	深鉢	口縁部	ⅠB8b	Ⅲ	—	(7.1)	—	55	繊維	前期初
	「ピッチリ縄文」か見た目ＬＲ　原体の末端の圧痕が顕著につく　口唇部がやや膨隆する									
114	深鉢	口縁部	ⅠB7c	Ⅲ	—	(6.9)	—	54	繊維	前期初
	「ピッチリ縄文」か　見た目ＬＲ　原体の末端の圧痕が顕著につく　口唇部がやや膨隆する									
115	深鉢	口縁～体部	ⅠB6f	Ⅲ	—	(19.2)	—	472	繊維	前期初
	ＬＲ縄文か　口縁上端部に連続する圧痕									
116	深鉢	口縁部	ⅠB7c	Ⅲ	—	(4.9)	—	54	繊維	前期初
	「ピッチリ縄文」か　見た目ＬＲ　前段の撚りｒか　口縁上端部に連続する圧痕									
117	深鉢	口縁～体部	ⅠB6d、7d	Ⅲ	—	(11.4)	—	120	繊維	前期初
	前々段反撚ＬＲＲ　口唇部にも縄文原体施文									
118	深鉢	口縁部	ⅠB5c	Ⅲ	—	(5.4)	—	75	繊維	前期初
	結束のあるＲＬとＬＲの羽状縄文　口縁上端部に連続する圧痕									
119	深鉢	口縁～体部	ⅠB5d、6d	Ⅲ	11.9	(4.4)	—	31	繊維	前期初
	結束のあるＲＬ縄文									
120	深鉢	口縁部	ⅠB6ｃ、6e	Ⅲ	22.0	(5.6)	—	80	繊維	前期
	ＲＬ縄文　斜位回転による山形を呈するループ文　大木１式か									
121	深鉢	口縁～体部	ⅠB6e、7e	Ⅲ	—	(10.5)	—	121	繊維	前期
	ＲＬ縄文　口縁部に３段のループ文　大木１式か									
122	深鉢	口縁部	ⅠB7g	Ⅲ	—	(5.9)	—	57	繊維	前期
	ＲＬとＬＲの結束のない羽状縄文　口縁部に３段のループ文　大木１式か									
123	深鉢	口縁～体部	ⅠB7b	Ⅲ	—	(14.8)	—	234	繊維	前期
	ＲＬ縄文　口縁部横位の不整撚糸文か　大木１式か　外面炭化物付着									
124	深鉢	口縁～体部	ⅠB7h	Ⅲ	—	(10.4)	—	86	繊維	前期
	ＲＬとＬＲの結束のない羽状縄文　口縁部に横位の不整撚糸文　大木１式か									

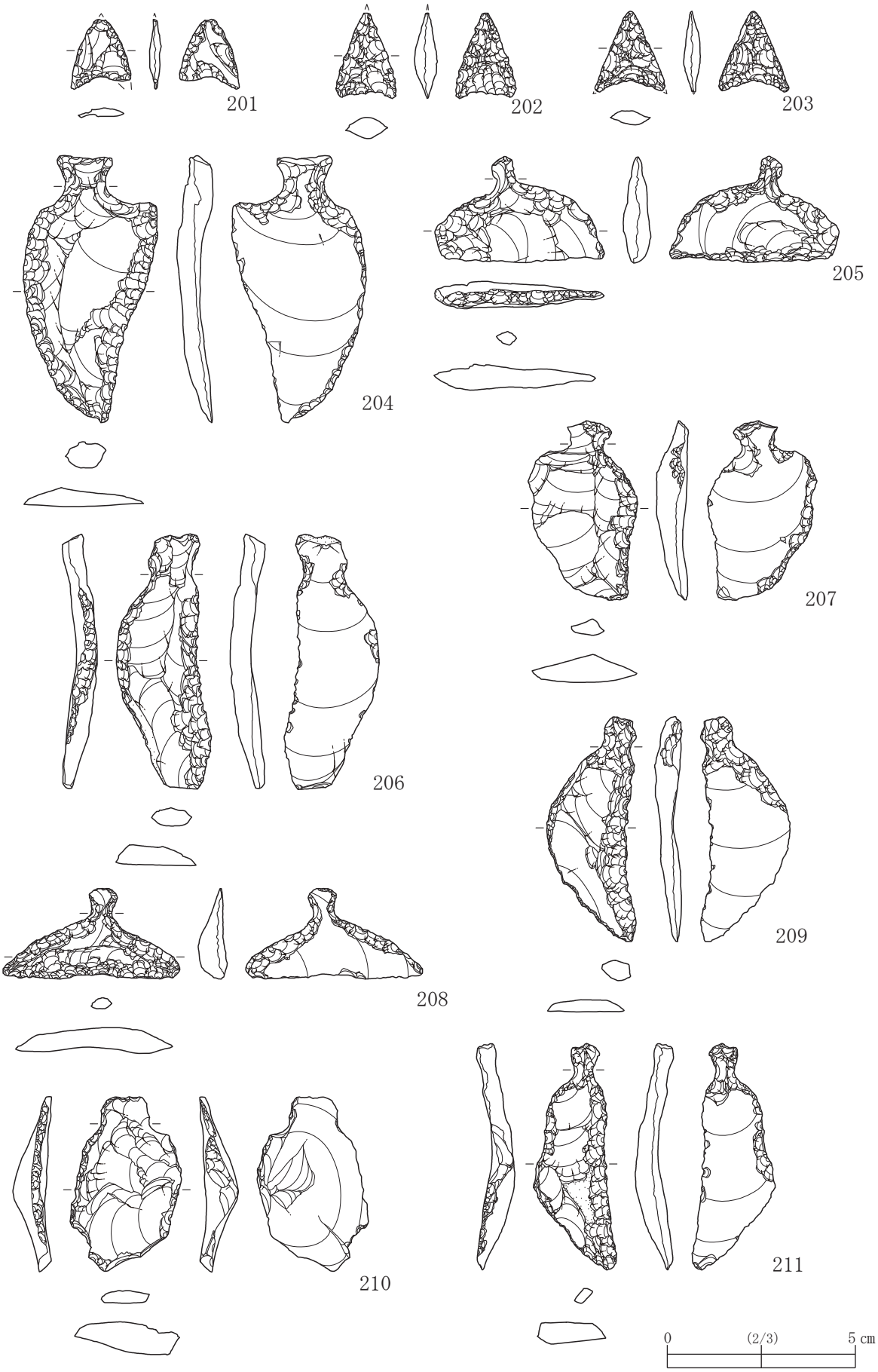
番号	器種	部位	出土位置	層	法量(cm)			重量(g)	胎土	時期
					口径	器高	底径			
125	深鉢	口縁～体部	ⅠB7ｆ	Ⅲ	―	(14.1)	―	335	繊維	前期
	ＬＲ縄文									
126	深鉢	口縁～体部	ⅠB7ｆ	Ⅲ	―	(12.5)	―	181	繊維	前期
	ＲＬ縄文か　繊維含むが硬緻な焼成									
127	深鉢	尖底部	ⅠB7c	Ⅲ	―	(3.9)	尖底	38	繊維	前期初
	「ピッチリ縄文」か　見た目ＬＲ　前段の撚りみえず									
128	深鉢	尖底部	ⅠB7e	Ⅲ	―	(3.2)	尖底	21	繊維	前期初
	尖底部の破片　縄文原体よくみえず									
129	深鉢	体部下半	ⅠB7ｆ	Ⅲ	―	(19.1)	―	310	繊維	前期初
	「ピッチリ縄文」見た目ＬＲ　前段の撚り見分けられない									
130	深鉢	体部下半	ⅠB8b、8c	Ⅲ	―	(8.3)	尖底	82	繊維	前期初
	「ピッチリ縄文」見た目ＬＲ　前段の撚り見分けられない									
131	深鉢	底～体部下半	ⅠA6i	Ⅲ	―	(8.1)	6.5	195	繊維	前期
	器面摩耗しており判別困難　ＬＲ縄文か									
132	深鉢	底～体部下半	ⅠB7e	Ⅲ	―	(10.8)	6.1	49	繊維	前期
	ＬＲ縄文									
133	深鉢	体部	ⅠB7f	Ⅲ	―	(8.2)	―	62	砂粒多	前期？
	Ｒ撚糸文を横位に施文　胎土に繊維混入せず　早期の可能性もあるか									
134	深鉢	体部	ⅠB8b	Ⅲ	―	(5.4)	―	35	繊維	前期
	Ｒ撚糸文を横位に施文									
135	深鉢	体部	ⅠB6c	Ⅲ	―	(3.8)	11.8	55	繊維	前期
	Ｒ撚糸文を横位に施文									
136	深鉢	底～体部下半	ⅠB7f	Ⅲ	―	(6.0)	11.1	42	繊維	前期
	波状連鎖撚糸文　大木２ｂ式か									
137	深鉢	体部	ⅠB7e	Ⅱ	―	(8.1)	―	66	砂粒	中期
	ＲＬＲ縄文　隆凹線による区画　大木９式									
138	深鉢	体部下半	ⅠB8d	Ⅱ	―	(1.8)	―	12	砂粒	不明
	ＬＲ縄文　前期中葉以降の土器か　特定できず									

第４表　土製品観察表（遺物包含層１）

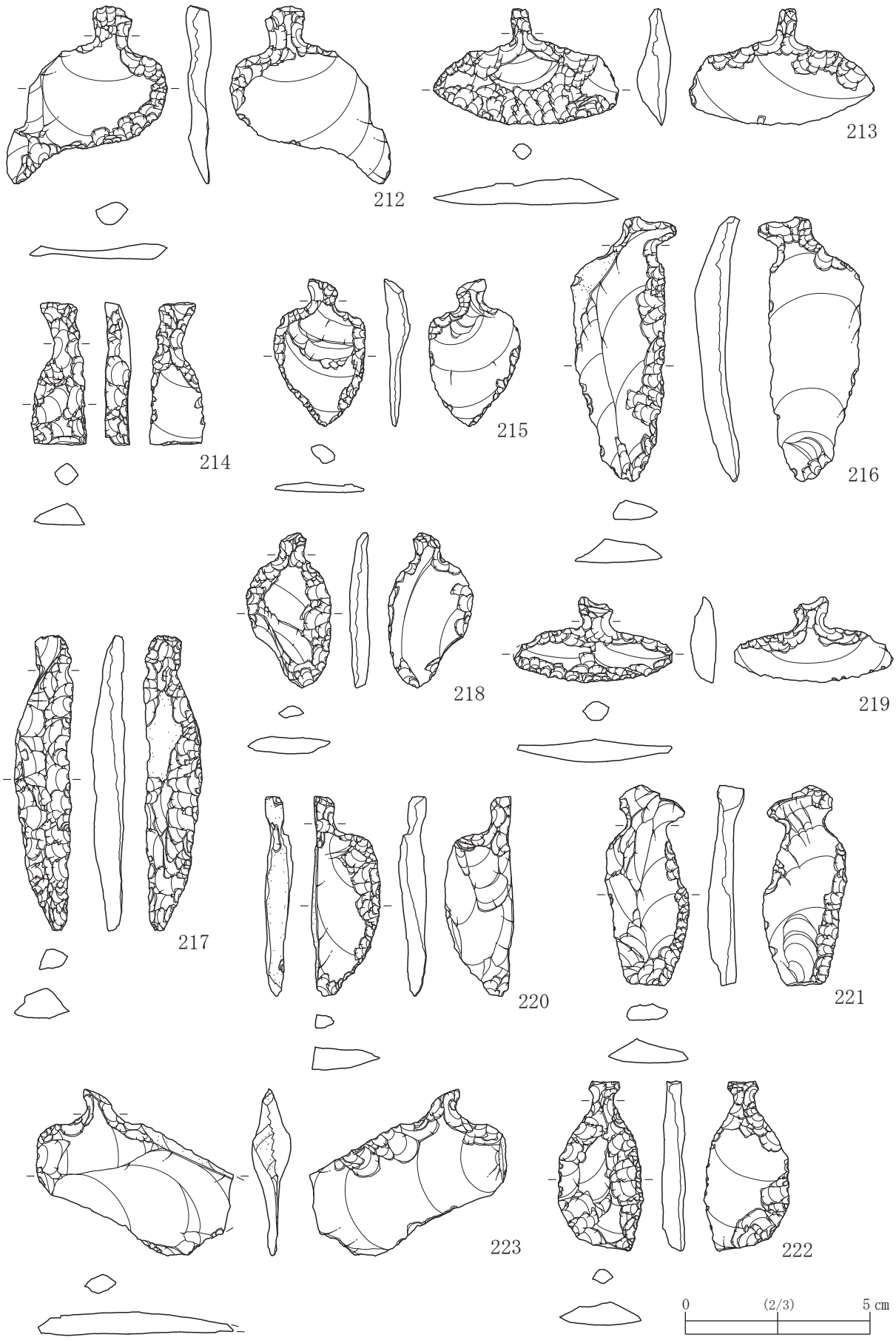
番号	種別	出土位置	層位	幅	高さ	厚さ	重さ	胎土	時期
139	土器片利用土製品	ⅠB6ｃ	Ⅲ	5.9	(6.1)	0.9	26	繊維	前期
	土器片の縁を擦り成形している　端部に穿孔あり　器面に縄文施文されているが不明瞭　器面も擦って整形と推測される。　繊維を含む胎土で前期初頭～前半にの土器片と推測される。								

第５表　縄文土器観察表（遺物包含層２）

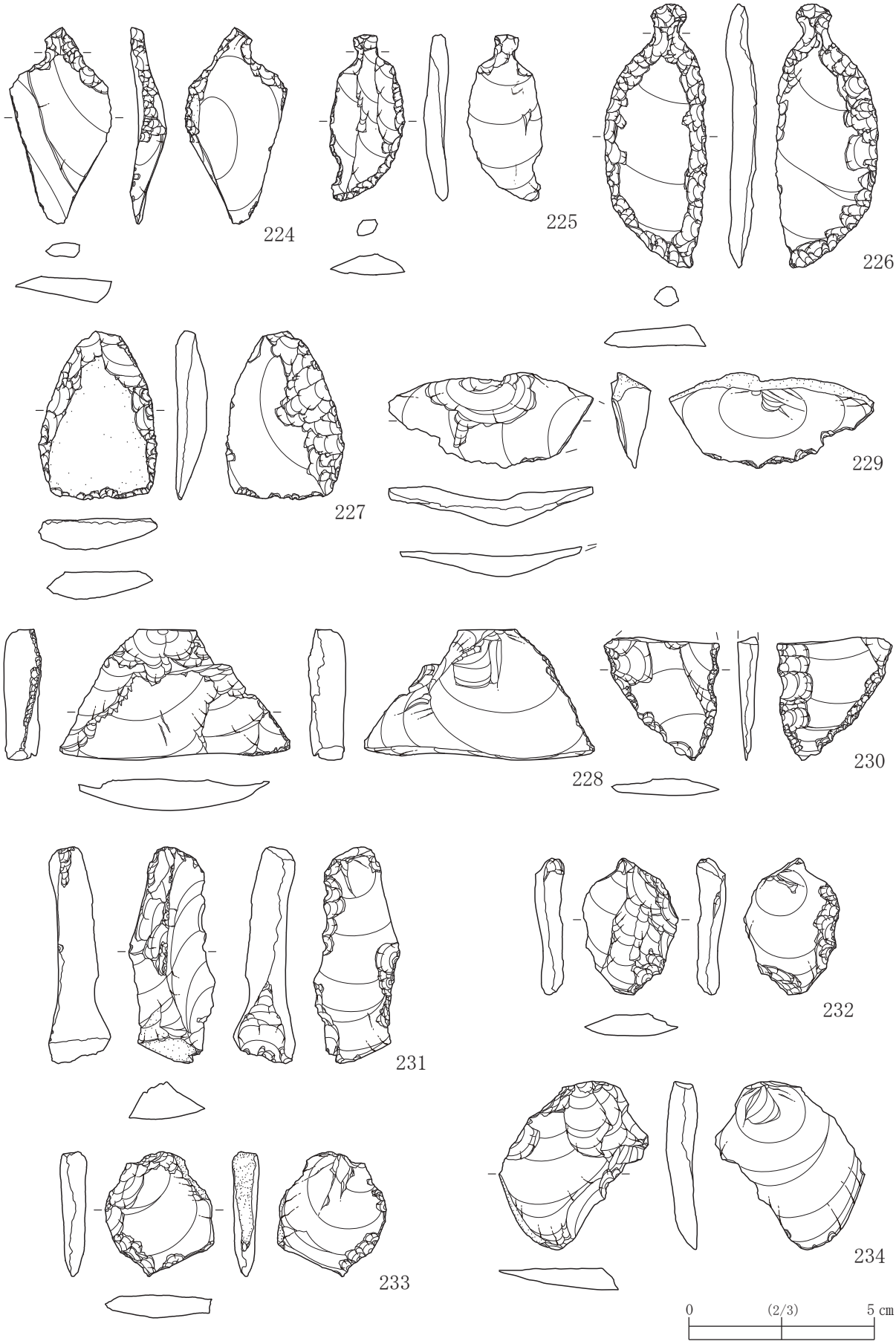
番号	器種	部位	出土位置	層	法量(cm)			重量(g)	胎土	時期
					口径	器高	底径			
140	深鉢	体部	ⅡB5c	Ⅲ	―	(6.3)	―	27	硬緻	早期
	連続する刺突文と沈線文　貝殻、沈線文系土器　胎土に白い礫混入									
141	深鉢	口縁部	ⅡB3d	Ⅲ	―	(7.8)	―	105	繊維	前期
	前々段反撚ＬＲＲ　142 と同一個体か									
142	深鉢	口縁部	ⅡB4b	Ⅲ	―	(9.4)	―	142	繊維	前期
	前々段反撚ＬＲＲ　141 と同一個体か									
143	深鉢	体部下半	ⅡB4d	Ⅲ	―	(5.4)	―	55	繊維	前期初
	「ピッチリ縄文」　見た目ＬＲ　前段の撚りみえず									
144	深鉢	口縁部	ⅡB3b	Ⅱ	―	(4.3)	―	25	繊維	前期
	横位の不整撚糸文　大木１式か									



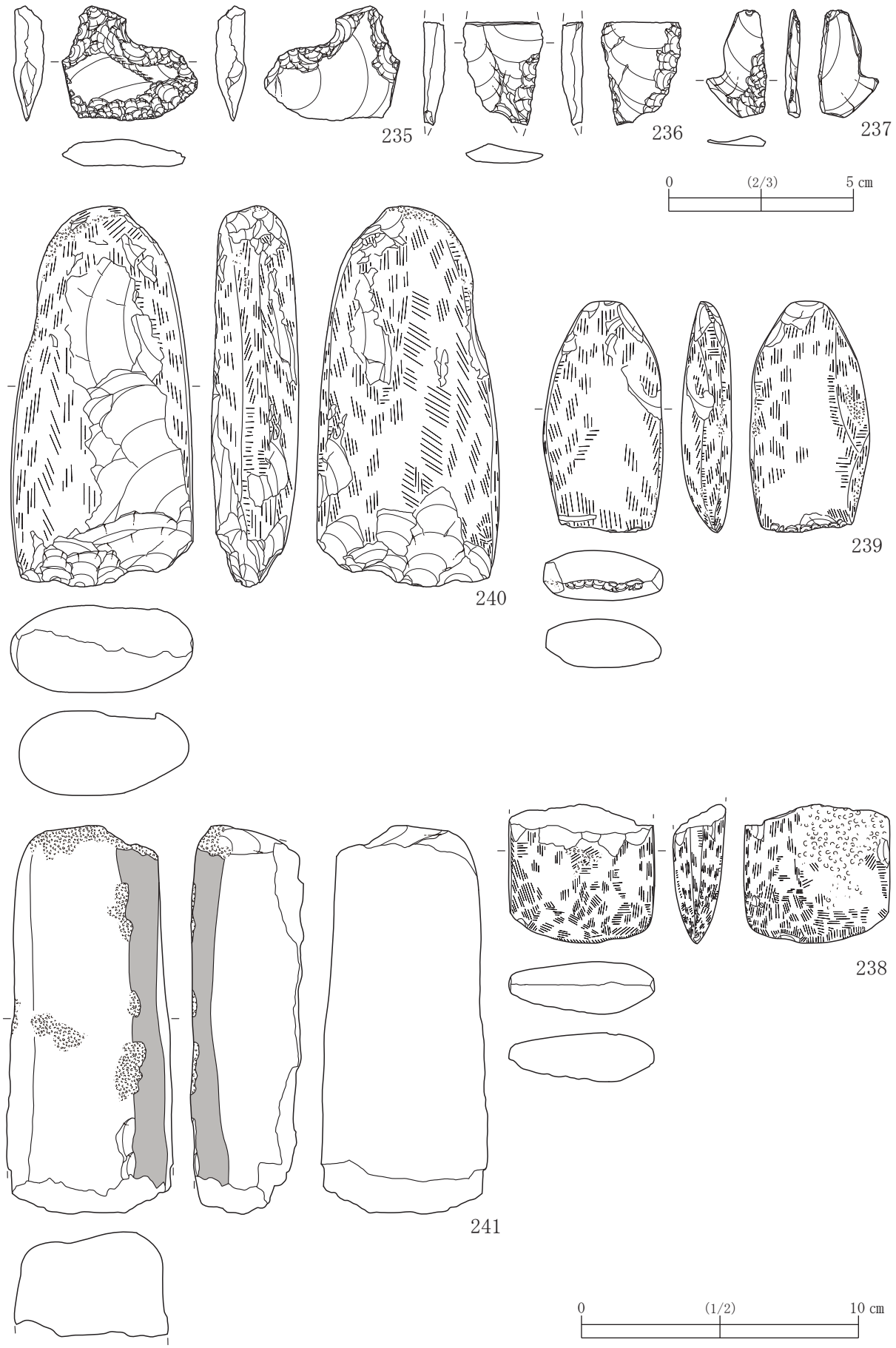
第 20 図　遺物包含層 1 石器（1）



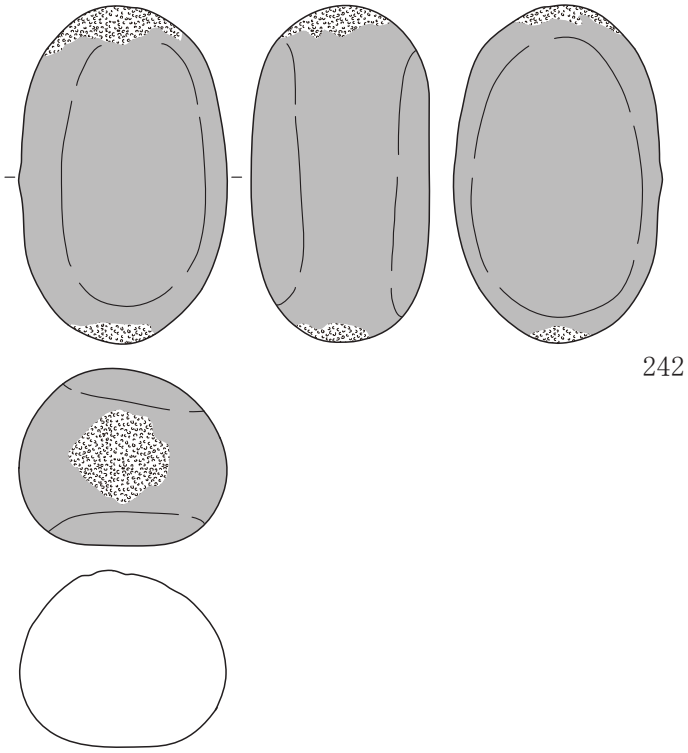
第 21 図　遺物包含層 1 石器（2）

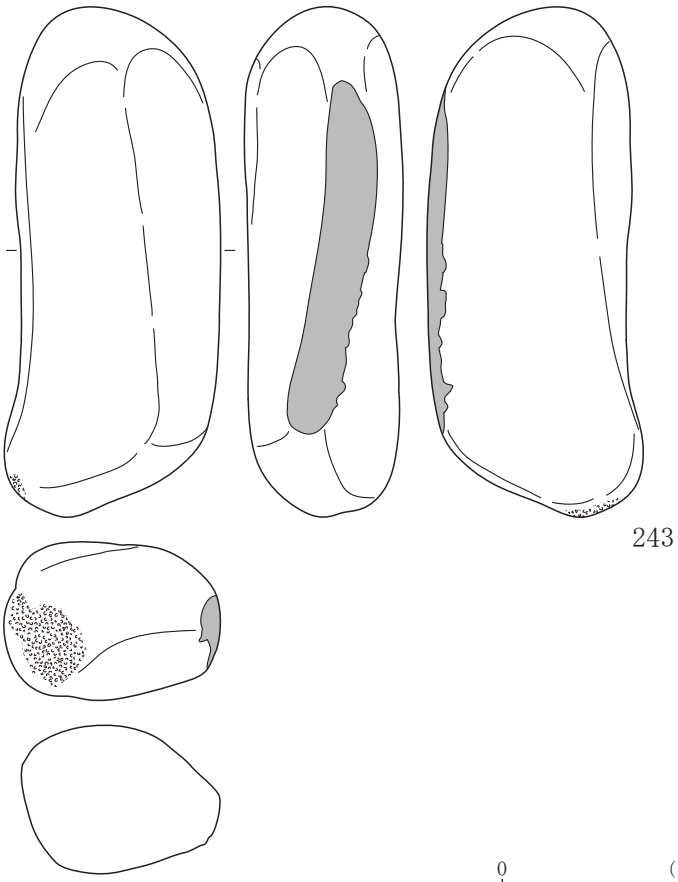


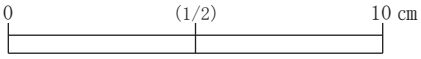
第 22 図　遺物包含層 1 石器（3）



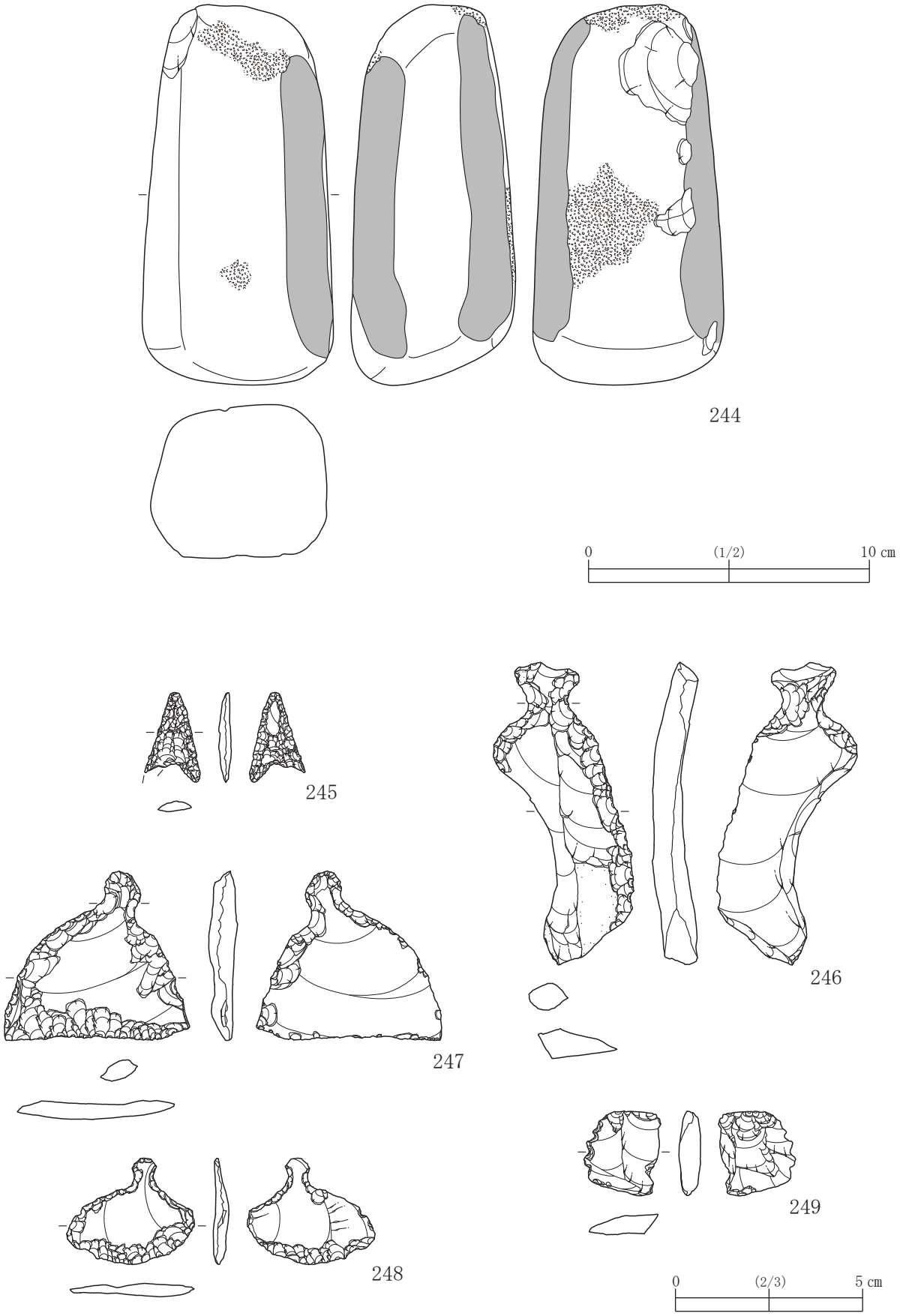
第 23 図　遺物包含層 1 石器（4）



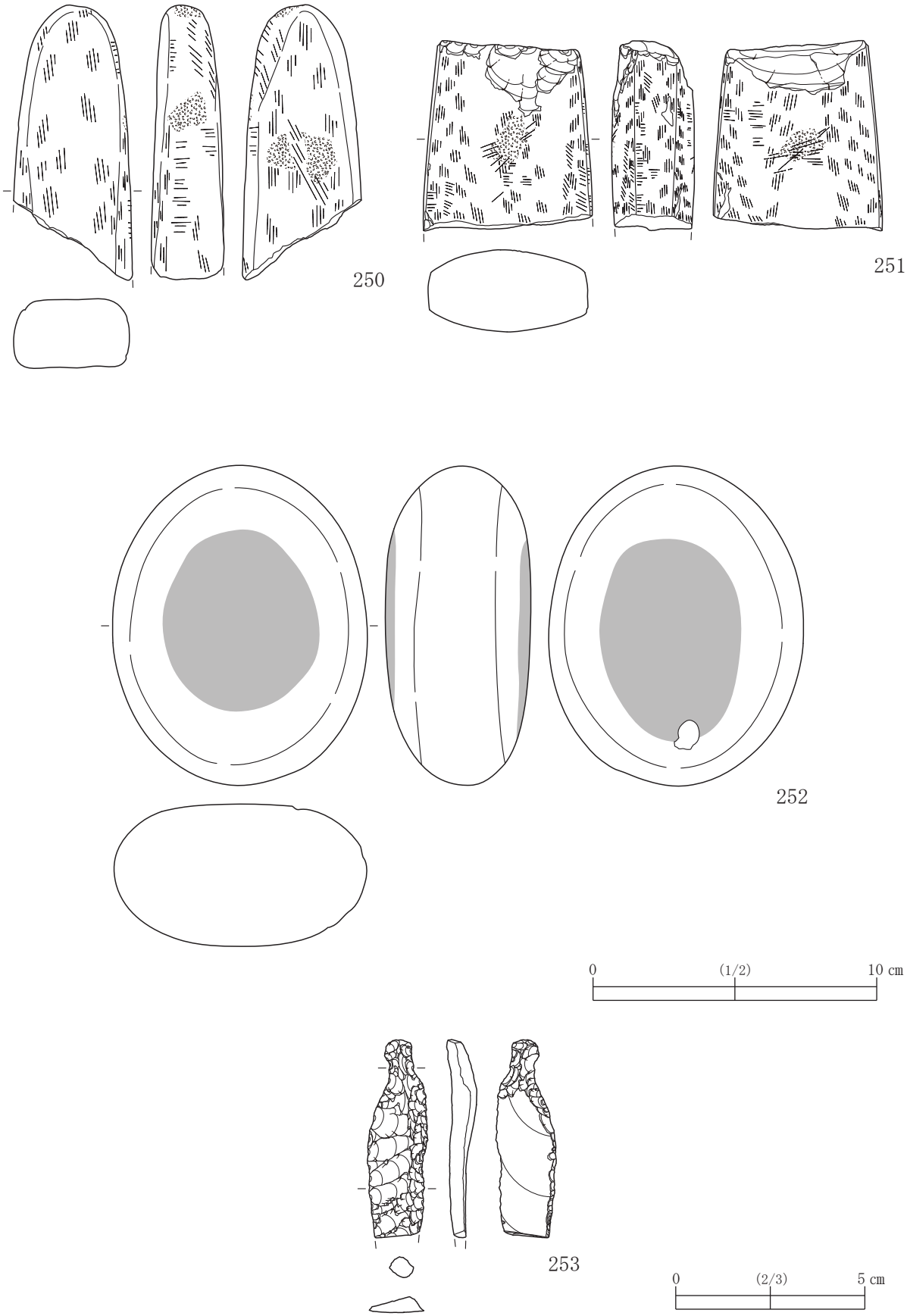




第 24 図　遺物包含層１石器（５）



第 25 図　遺物包含層１石器（６）・包含層２石器（１）



第 26 図　遺物包含層２石器（２）・遺構外石器

第６表　石器観察表（遺物包含層１）

No.	器種	出土位置	層位	寸法（mm・g）			重　さ (g)	石質
				長さ	幅	厚さ		
201	石鏃	ⅠB6b	Ⅲ	14.8	15.2	2.6	0.6	頁岩（北上山地）
202	石鏃	ⅠB7c	Ⅲ	21.1	15.6	5.8	1.2	頁岩（北上山地）
203	石鏃	調査区南東	表採	17.9	18.2	4.2	1.1	頁岩（北上山地）
204	石匙	ⅠB6c	Ⅲ	69.7	34.1	7.5	13.8	頁岩（北上山地）
205	石匙	ⅠB8c	Ⅲ	27.4	43.0	6.8	7.2	頁岩（北上山地）
206	石匙	ⅠB7f	Ⅲ	66.8	21.4	6.0	9.8	頁岩（北上山地）
207	石匙	ⅠB7c	Ⅲ	45.5	27.4	7.9	7.7	頁岩（北上山地）
208	石匙	ⅠB6d 付近	Ⅲ	22.6	46.4	6.9	4.7	頁岩（北上山地）
209	石匙	ⅠB7d	Ⅲ	58.1	21.1	6.5	6.2	頁岩（北上山地）
210	石匙	ⅠB6d 付近	Ⅲ	44.9	27.4	8.7	9.1	頁岩（北上山地）
211	石匙	ⅠB7b	Ⅲ	56.5	19.2	6.9	6.3	頁岩（北上山地）
212	石匙	ⅠB7f	Ⅲ	36.7	37.0	6.2	6.7	頁岩（北上山地）
213	石匙	ⅠB8e	Ⅲ	30.7	49.6	8.3	8.1	頁岩（北上山地）
214	石匙	ⅠB6d 付近	Ⅲ	37.9	14.3	6.8	3.9	頁岩（北上山地）
215	石匙	SI02	埋土	38.5	24.3	6.0	3.0	頁岩（北上山地）
216	石匙	ⅠB7f	Ⅲ	70.6	25.0	8.9	13.8	頁岩（北上山地）
217	石匙	ⅠB7b	Ⅲ	78.9	14.7	8.6	9.3	頁岩（北上山地）
218	石匙	ⅠB6c	Ⅲ	41.1	22.4	5.0	4.6	頁岩（北上山地）
219	石匙	ⅠB7f	Ⅲ	22.9	42.2	6.8	4.4	頁岩（北上山地）
220	石匙	ⅠB7c	Ⅲ	53.2	18.2	7.0	6.0	頁岩（北上山地）
221	石匙	ⅠB6c	Ⅲ	53.1	21.4	7.1	8.9	頁岩（北上山地）
222	石匙	ⅠB6c	Ⅲ	44.6	22.8	6.2	6.3	頁岩（北上山地）
223	石匙	ⅠB7e	Ⅲ	32.2	52.4	10.3	12.7	頁岩（北上山地）
224	石匙	ⅠB5d	Ⅲ	52.0	26.1	7.4	7.8	頁岩（北上山地）
225	石匙	下段トレンチ	試掘	42.2	19.8	5.7	4.8	頁岩（北上山地）
226	石匙	調査区南東	表採	69.8	27.2	6.7	13.4	頁岩（北上山地）
227	石篦	ⅠB7d	Ⅲ	44.4	31.4	8.0	10.9	頁岩（北上山地）
228	スクレイパー類	ⅠB6c	Ⅲ	34.8	61.2	9.8	19.1	頁岩（北上山地）
229	スクレイパー類	ⅠB7c	Ⅲ	24.4	54.0	10.1	7.5	頁岩（北上山地）
230	スクレイパー類	ⅠB7e	Ⅲ	31.4	30.6	5.4	4.7	頁岩（北上山地）
231	スクレイパー類	ⅠB7c	Ⅲ	56.8	21.4	15.9	13.8	頁岩（北上山地）
232	スクレイパー類	ⅠB7e	Ⅲ	36.0	25.0	7.3	5.9	頁岩（北上山地）
233	スクレイパー類	SI02	埋土	32.4	28.4	6.9	7.0	頁岩（北上山地）
234	スクレイパー類	ⅠB7f	Ⅲ	42.7	36.2	7.6	11.0	頁岩（北上山地）
235	スクレイパー類	ⅠB7e	Ⅲ	29.8	35.0	7.7	8.0	頁岩（北上山地）
236	スクレイパー類	SI01	埋土	27.4	21.1	5.6	3.2	頁岩（北上山地）
237	スクレイパー類	ⅠB7c	Ⅲ	28.5	15.8	3.4	1.5	頁岩（北上山地）
238	磨製石斧	ⅠB6d 付近	Ⅲ	49.4	52.0	17.9	59.0	砂岩（北上山地）
239	磨製石斧	ⅠB7ｇ	Ⅲ	82.2	42.5	17.8	93.7	ヒン岩（北上山地）
240	磨製石斧	ⅠB6d	Ⅲ	135.0	64.9	30.9	419.9	凝灰岩（北上山地）
241	敲磨器類	ⅠB7f	Ⅲ	138.0	58.8	39.4	561.3	閃緑岩（北上山地）
242	敲磨器類	ⅠB7d	Ⅲ	88.8	54.6	46.6	334.4	花崗岩（北上山地）
243	敲磨器類	ⅠB7c	Ⅲ	133.8	53.2	41.2	498.3	閃緑岩（北上山地）
244	敲磨器類	ⅠB9g	Ⅲ	133.2	66.6	56.8	885.0	砂岩（北上山地）

第７表　石器観察表（遺物包含層２）

No.	器種	出土位置	層位	寸法（mm）			重　さ（g）	石質
				長さ	幅	厚さ		
245	石鏃	ⅡB6b	Ⅰ	18.9	14.5	3.1	0.6	頁岩（北上山地）
246	石匙	ⅡB3b	Ⅱ	77.9	28.3	9.2	18.0	頁岩（北上山地）
247	石匙	ⅡB4d	Ⅲ	44.0	48.9	7.1	11.7	頁岩（北上山地）
248	石匙	ⅡB4d	Ⅲ	27.6	32.8	3.5	2.6	頁岩（北上山地）
249	スクレイパー類	ⅡＢ３d	Ⅲ	22.0	19.1	5.5	2.6	玉髄（北上山地）
250	磨製石斧	ⅡB4d	Ⅲ	85.8	40.6	25.2	147.2	砂岩（北上山地）
251	磨製石斧	ⅡB4d	Ⅲ	64.8	58.8	28.7	214.9	ヒン岩（北上山地）
252	敲磨器類（磨石）	ⅡB4d	Ⅲ	111.2	88.6	50.2	794.7	閃緑岩（北上山地）

第８表　石器観察表（排土場中）

No.	器種	出土位置	層位	寸法（mm・g）			重　さ（g）	石質
				長さ	幅	厚さ		
253	石匙	排土中		51.4	15.3	6.5	4.6	頁岩（北上山地）

Ⅴ　ま　と　め

１　概　　要

今回の迫田Ⅰ遺跡の調査で検出された遺構は、古代（平安時代前半）の竪穴住居跡４棟、縄文時代の遺物を包含する遺物包含層２箇所である。出土遺物は、土師器、須恵器、縄文土器、縄文土器片利用土製品、縄文時代の石器である。

２　古代の竪穴住居跡

古代（平安時代前半）の竪穴住居跡４棟が検出された。この内、カマドを確認できたのは、ＳＩ01（南壁）、ＳＩ02（西壁）の２棟である。ＳＩ03はカマドを有せず、ＳＩ04はカマドの有無が不明である。いずれの住居跡も出土土師器の年代観から９世紀中葉から10世紀初頭に属すると推測される。

３　古代の出土遺物

古代の土師器、須恵器は総量で2,573ｇの出土である。この内、図示したものは20点、合計重量1,714ｇである。土師器坏はいずれもロクロ調整で内面黒色処理のものである。（１）は外面に「千」の文字が墨書されている。長胴甕は非ロクロのものとロクロのものの両者が存在する。須恵器は長頸壺？、甕、大甕があるが、いずれも小破片で全体器形は推測できない。いずれも９世紀中葉から10世紀初頭に属すると推測される。

４　縄文時代の遺物包含層

縄文時代の遺物包含層が２箇所検出された。遺物包含層１は調査区南西部、遺物包含層２は調査区中央北部に分布し、どちらも基本土層Ⅲ層に相当する土層に遺物を包含している。出土遺物は遺物包含層１では縄文土器75,318ｇと土器片利用土製品１点、石器44点が出土した。遺物包含層２では縄文土器6,621ｇと石器８点が出土した。縄文土器の年代は、遺物包含層１、２ともに縄文時代早期中葉、前期初～前葉のものが主体で、双方が共通する。

５　縄文時代の出土遺物

縄文時代の遺物は、総量で81,929ｇが出土した。この内43点、6,544ｇを図示した。縄文土器には貝殻腹縁、沈線等で施文される貝殻文・沈線文系土器一定量がある。早期中葉の明神裏Ⅲ式、物見台式に併行と推測される。また「ピッチリ縄文」が施される土器も一定量出土した。これらは前期初頭に相当する。そして、口縁部にループ文や不整撚糸文が施される縄文時代前期前葉、大木１式相当の土器がある。その他の胎土に繊維を有するが、時期を確定できない土器も縄文時代前期初頭から前葉に納まるものと推測される。これ以外に大木２ｂ式、大木９式などがごく微量出土している。また土器片利用の土製品が１点出土した。土器片を成形し、端部に穿孔を施したものである。石器は成品が53点出土した。供伴する土器から縄文時代早期中葉、前期初頭～前葉のものと推測される。

Ⅵ　火 山 灰 分 析

（株）火山灰考古学研究所

１　は　じ　め　に

東北地方北部の三陸沿岸域の地層や土壌の中には、十和田、岩手、秋田駒ヶ岳、焼石、鳴子、肘折、愛島、沼沢などの東北地方の火山のほか、洞爺、浅間、榛名、御岳、三瓶、阿蘇、姶良、鬼界など遠方の火山に由来するテフラ（火山，いわゆる火山灰）が数多く認められる。とくに、後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログ（町田・新井，1992，2003，2011）に収録されており、考古遺跡などで調査分析を行い年代や層位が明らかな指標テフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには考古遺物や遺構の年代などに関する情報を得られるようになっている。

下閉伊郡大槌町迫田Ⅰ遺跡の発掘調査でも火山灰の可能性がある土層が検出されたことから、発掘調査担当者により採取された試料を対象に、実験室内でテフラ分析（テフラ検出分析，テフラ組成分析，屈折率測定，ＥＰＭＡ分析）を実施して、すでに年代が明らかにされている指標テフラとの同定を行うことになった。

２　分　析　試　料

テフラ分析の対象となった試料は、迫田Ⅰ遺跡においてSI02床面火山灰と命名され、発掘調査担当者により採取されたものである。

３　テフラ検出分析

（１）分　析　方　法

SI02床面火山灰に含まれるテフラ粒子の量や特徴を定性的に把握するために、テフラ検出分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

１）試料14gを秤量。
２）超音波洗浄により泥分を除去。
３）80゜Ｃで恒温乾燥。
４）実体顕微鏡下でテフラ粒子の相対的な量や特徴を観察。

（２）分　析　結　果

テフラ検出分析の結果を表１に示す。試料から比較的粗粒な軽石やスコリアは検出されなかったものの、火山ガラスがごく少量検出された。火山ガラスは、繊維束状軽石型や分厚い中間型である。それらの色調は、無色透明や淡褐色である。不透明鉱物（おもに磁鉄鉱）以外の重鉱物としては、斜方輝石、単斜輝石、角閃石が認められる。

４　テフラ組成分析（火山ガラス比分析・重鉱物組成分析）

（1）分　析　方　法

SI02 床面火山灰について、火山ガラスの形態色調別含有率と、重鉱物や軽鉱物の含有率を合わせて求める火山ガラス比分析と、重鉱物組成分析（火山ガラス比分析と合わせてテフラ組成分析とする）を実施して、火山ガラスの色調形態別含有率を求め、重鉱物組成上の特徴を定量的に明らかにした。分析の手順は次のとおりである。

1）試料 25g を秤量。
2）超音波洗浄により泥分を除去。
3）80゜C で恒温乾燥。
4）分析篩により 1/4 ～ 1/8mm と 1/8 ～ 1/16mm の粒子を篩別。
5）偏光顕微鏡下で 1/4 ～ 1/8mm 粒径の 250 粒子を観察し、火山ガラスの色調・形態別含有率ならびに軽鉱物や重鉱物の含有率を求める（火山ガラス比分析）。
6）偏光顕微鏡下で 1/4 ～ 1/8mm 粒径の重鉱物 250 粒子を観察し、重鉱物組成を求める（重鉱物組成分析）。

（2）分　析　結　果

テフラ組成分析の結果を図１に、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析の結果を表２と表３に示す。SI02 床面火山灰に含まれる火山ガラス、軽鉱物、重鉱物の含有率は、順に 0.8％、17.2％、3.6％で、その他とした風化した鉱物や細粒の岩片が多く含まれている。この試料に含まれる火山ガラスは、中間型ガラスと繊維束状軽石型ガラスである（各 0.4％）。不透明鉱物（おもに磁鉄鉱）をのぞく重鉱物としては、順に斜方輝石（14.0％）、単斜輝石（4.4％）、角閃石（1.2％）が認められる。

5　屈折率測定（火山ガラス・斜方輝石）

（1）測　定　方　法

SI02 床面火山灰に含まれる火山ガラスと鉱物（斜方輝石）の屈折率測定を行って、指標テフラとの同定精度の向上を図った。測定対象とした火山ガラスは 1/8 ～ 1/16mm のもので、また斜方輝石は >1/4mm のものを実体顕微鏡を用いてピッキングした後に軽く粉砕したものである。測定方法は、温度変化型屈折率測定法（壇原，1993）に従った。

（2）測　定　結　果

屈折率の測定結果を表４に示す。この表には岩手県域の後期更新世後半以降の代表的指標テフラの火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率特性も合わせて示した。SI02 床面火山灰に含まれる火山ガラス（18 粒子）と斜方輝石（30 粒子）の屈折率は、それぞれ n ：1.502-1.513 と γ ：1.704-1.710 である。

6　EPMA 分析（火山ガラスの主成分分析）

（1）分　析　方　法

指標テフラとの同定確度をさらに向上させるため、個々の粒子の些少な領域の主成分組成を明らかにできる EPMA 分析を実施した。分析対象は、偏光顕微鏡下で 1/4 ～ 1/8mm 粒子の中から手選した火山ガラスである。また、分析に使用した電子線プローブマイクロアナライザ（EPMA）は、山形大

学理学部の日本電子 JXA8600MWDS 型 EPMA である。加速電圧 15kV、照射電流 0.01 μ A、ビーム径 10 μ m の条件で行った。なお、補正には Oxide ZAF 法を用いた。

（2）分　析　結　果

SI02 床面火山灰に含まれる火山ガラスの EPMA による主成分分析の結果を表５に、また SI02 床面火山灰と代表的な指標テフラに含まれる火山ガラスの主成分組成を表６に示す。

SI02 床面火山灰に含まれる火山ガラスの主成分組成は、bimodal 組成となっている。分析対象 12 粒子のうち、８粒子（タイプＡと呼ぶ）は残りの４粒子（タイプＢ）と比較すると、SiO_2 および K_2O に乏しく、逆に TiO_2、Al_2O_3、FeO*、MgO、CaO、Na_2O をより多く含む傾向にある。タイプＡ、タイプＢともに、その主成分組成から、十和田系テフラに類似している。

7　考　　察

SI02 床面火山灰に含まれる火山ガラスのうち、タイプＡは、主成分組成から約 6,000 年前の十和田中掫テフラ（To-Cu，大池ほか，1966，早川 1983a，町田・新井，1992，2003，2011）に由来すると考えられる。一方、タイプＢは、主成分組成から 915 年に十和田火山から噴出した十和田 a 火山灰（To-a，大池，1972，町田ほか，1981，Hayakawa，1985）に由来すると考えられる。これらの同定は、火山ガラスや斜方輝石の屈折率の range が広いこと、また斜方輝石や単斜輝石（合わせて，両輝石）の割合が比較的大きいことと矛盾しない。

なお、重鉱物として、両輝石のほかに角閃石が含まれていることは、ほかに、約 1.5 万年前の十和田八戸テフラ（To-H，早川 1983b，Hayakawa，1985，町田・新井，1992，2011）などが混在している可能性があることを示唆している。いずれにしても、SI02 床面火山灰は純度が低く、テフラ層とは考えにくい。したがって、層位や年代の指標とする際には注意が必要である。

8　ま　と　め

大槌町迫田Ⅰ遺跡で採取されたテフラ分析用試料（SI02 床面火山灰）を対象として、テフラ検出分析、テフラ組成分析（火山ガラス比分析・重鉱物組成分析）、火山ガラスおよび鉱物の屈折率測定、さらに火山ガラスの EPMA 分析を実施した。その結果、SI02 床面火山灰には、十和田中掫テフラ（To-Cu，約 6,000 年前）や十和田 a テフラ（To-a，915 年）などが混在していることが判明した。

文献

青木かおり・新井房夫（2000）三陸沖改訂コア KH9-3，LM-8 の後期更新世テフラ層序．第四紀研究，39，p.107-120.

新井房夫（1972）斜方輝石･角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究, 11, p.254-269.

新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法２」，p.136-149.

壇原　徹（1993）温度変化型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法２」，東京大学出版会，　p.149-158.

早川由紀夫（1983a）十和田中掫テフラ層の分布，粒度，組成，年代．火山，28，p.263-273.

早川由紀夫（1983b）火山豆石として降下堆積した十和田火山八戸火山灰．火山，28，p.25-40.

Hayakawa, Y. (1985) Pyroclastic geology of Towada volcano. Bull. Earthq. Res. Inst. Univ. Tokyo, 60, p.507-592.

町田　洋・新井房夫（1992）「火山灰アトラス」．東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫（2003）「新編火山灰アトラス」．東京大学出版会，336p.

町田　洋・新井房夫（2011）「新編火山灰アトラス（第２刷）」．東京大学出版会，336p.

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p.562-569.

大池昭二（1972）十和田火山東麓における完新世テフラの編年．第四紀研究，11，p.232-233.

大池昭二・中川久夫・七崎　修・松山　力・米倉伸之（1966）馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰　第四紀研究，５，p.29-35.

第１表　テフラ検出分析結果

試料	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物
	量	色調	最大径	量	形態	色調	（不透明鉱物以外）
SI02床面火山灰				(*)	pm(fb), md	無色透明, 淡褐	opx, cpx, am

****:とくに多い, ***:多い, **:中程度, *:少ない, (*):非常に少ない. bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型, sp:スポンジ状, fb:繊維束
cl:無色透明, p-br:淡褐色, br:褐色. ol:カンラン石, opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, am:角閃石, bi:黒雲母. ():量が少ないことを示す.

第２表　火山ガラス比分析結果

試料	火山ガラス						軽鉱物	重鉱物	その他	合計
	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)				
SI02床面火山灰	0	0	0	1	0	1	43	9	196	250

bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型, cl:無色透明, pb:淡褐色, br:褐色, sp:スポンジ状, fb:繊維束状. 数字は粒子数.

第３表　重鉱物組成分析結果

試料	ol	opx	cpx	am	bi	opq	その他	合計
SI02床面火山灰	0	35	11	3	0	186	15	250

ol:カンラン石, opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, am:角閃石, bi:黒雲母, opq:不透明鉱物. 数字は粒子数.

第５表　迫田Ｉ遺跡 SI02 床面火山灰に含まれる火山ガラスの EPMA 分析結果

分析対象	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	total
1	76.99	0.34	13.27	1.99	0.09	0.47	2.17	3.47	1.21	100.00
2	76.65	0.43	13.39	1.98	0.08	0.45	2.32	3.46	1.23	100.00
3	76.58	0.43	13.71	2.00	0.07	0.49	2.15	3.31	1.25	100.00
4	76.19	0.38	13.57	2.07	0.09	0.50	2.42	3.59	1.18	100.00
5	75.69	0.48	13.86	2.11	0.04	0.51	2.38	3.69	1.24	100.00
6	76.11	0.37	13.82	2.13	0.10	0.51	2.08	3.59	1.30	100.00
7	76.53	0.43	13.22	2.04	0.13	0.51	2.49	3.37	1.29	100.00
8	75.45	0.43	13.70	2.21	0.07	0.66	2.54	3.67	1.27	100.00
タイプＡ：平均値	**76.27**	**0.41**	**13.57**	**2.07**	**0.08**	**0.51**	**2.32**	**3.52**	**1.25**	**100.00**
9	78.19	0.38	12.62	1.73	0.09	0.36	1.84	3.47	1.31	100.00
10	77.39	0.44	12.78	2.10	0.13	0.57	1.98	3.29	1.32	100.00
11	77.89	0.43	12.88	1.73	0.16	0.35	1.75	3.41	1.40	100.00
12	78.23	0.32	12.58	1.62	0.07	0.32	1.93	3.63	1.29	100.00
タイプＢ：平均値	**77.93**	**0.39**	**12.71**	**1.79**	**0.11**	**0.40**	**1.87**	**3.45**	**1.33**	100.00

第４表　屈折率測定結果

地点・試料・指標テフラ	火山ガラス		斜方輝石		文献
	屈折率(n)	測定点数	屈折率(γ)	測定点数	
迫田Ⅰ遺跡・SI02床面火山灰	**1.502-1.513**	**18**	**1.704-1.710**	**30**	**本報告**
岩手県域の代表的指標テフラ(後期更新世以降)					
十和田a(To-a)	1.500-1.508		1.706-1.708		町田・新井(2011)
榛名二ッ岳伊香保(Hr-FP)	1.500-1.503				町田・新井(2011)
十和田中掫(To-Cu)	1.508-1.512		1.703-1.709		町田・新井(2011)
鬼界アカホヤ(K-Ah)	1.506-1.513				町田・新井(2011)
肘折尾花沢(Hj-O)	1.499-1.504		1.712-1.715		町田・新井(2011)
秋田駒柳沢(Ak-Y)			1.718-1.723		町田・新井(2011)
秋田駒小岩井(Ak-K)			1.708-1.712		町田・新井(2011)
十和田八戸(To-H)	1.505-1.509		1.706-1.708		町田・新井(2011)
浅間板鼻黄色(As-YP)	1.502-1.504				町田・新井(2011)
鳴子潟沼上原(Nk-U)	1.492-1.500				町田・新井(2011)
姶良Tn(AT)	1.498-1.501				町田・新井(2011)
十和田大不動(To-Of)	1.506-1.510		1.707-1.710		町田・新井(2011)
鳴子柳沢(Nr-Y)	1.500-1.503		1.717-1.722		町田・新井(2011)
大山倉吉(DKP)	1.508-1.514				町田・新井(2011)
焼石山形(Yk-Y)	1.501-1.503		1.720-1.725		町田・新井(2011)
焼石村崎野(Yk-M)	1.503-1.508		1.717-1.722		町田・新井(2011)
阿蘇4(Aso-4)	1.506-1.510				町田・新井(2011)
鳴子荷坂(Nr-N)	1.500-1.502		1.724-1.728		町田・新井(2011)
肘折北原(Hj-Kth)	1.499-1.502		1.728-1.733		町田・新井(2011)
御岳第1(On-Pm1)	1.500-1.503				町田・新井(2011)
三瓶木次(SK)	1.496-1.498				町田・新井(2011)
洞爺(Toya)	1.494-1.498				町田・新井(2011)

本報告における屈折率の測定は，温度変化型屈折率測定法(壇原，1993)による.

第６表　迫田Ⅰ遺跡火山灰試料と後期旧石器時代以降の指標テフラに含まれる火山ガラスの主成分化学組成

地点・試料	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	備考
迫田Ⅰ遺跡・SI02床面火山灰・タイプA	**76.27**	**0.41**	**13.57**	**2.07**	**0.08**	**0.51**	**2.32**	**3.52**	**1.25**		本報告
迫田Ⅰ遺跡・SI02床面火山灰・タイプB	**77.93**	**0.39**	**12.71**	**1.79**	**0.11**	**0.40**	**1.87**	**3.45**	**1.33**		本報告
指標テフラ											
十和田a(To-a)	77.87	0.37	12.81	1.75	0.10	0.42	2.00	3.29	1.34		八木(未公表)
沼沢湖(Nm-N)	78.10	0.24	12.10	1.14	0.09	0.19	1.34	3.35	3.45		青木・新井(2000)
十和田中掫(To-Cu)	75.08	0.44	13.28	2.46	0.08	0.63	2.63	4.04	1.29		八木(未公表)
鬼界アカホヤ(K-Ah)	75.24	0.53	12.85	2.42	0.08	0.47	2.02	3.32	3.00		八木(未公表)
肘折尾花沢(Hj-O)	77.79	0.16	12.76	1.05	記載なし	0.44	1.09	3.61	3.10		青木・新井(2000)
十和田八戸(To-H, pfl上部)	78.30	0.29	12.67	1.52	0.06	0.29	1.73	3.84	1.30		青木・新井(2000)
十和田八戸(To-H, pfl下部)	76.38	0.40	13.43	1.90	0.11	0.44	2.22	3.88	1.24		
浅間板鼻黄色(As-YP)	78.15	0.27	11.99	1.33	0.04	0.26	1.30	3.72	2.89		八木(未公表)
鳴子潟沼上原(Nr-KU)	77.98	0.22	12.28	1.22	記載なし	1.01	1.59	4.23	1.47		青木・新井(2000)
姶良Tn(AT)	78.25	0.13	12.14	1.26	0.04	0.11	1.09	3.41	3.56	0.02	八木(未公表)
十和田大不動(To-Of, pfl)	77.82	0.36	12.45	1.88	0.08	0.33	1.87	3.97	1.25		青木・新井(2000)

いずれの数値も無水に換算.

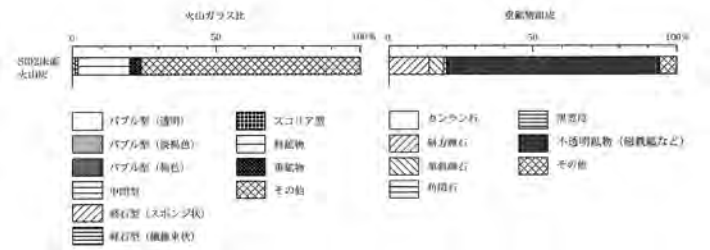
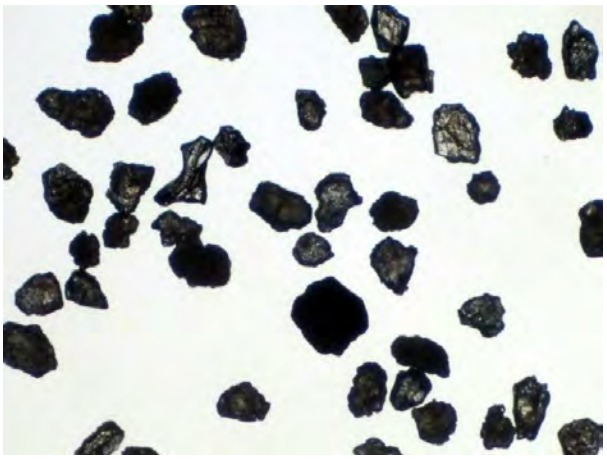


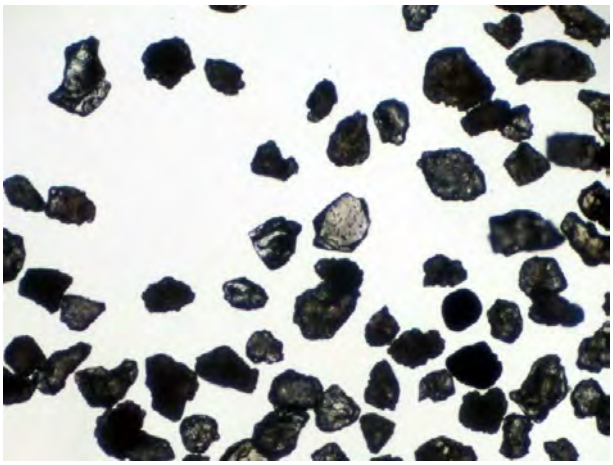
図１　迫田Ⅰ遺跡のテフラ組成ダイヤグラム

迫田Ⅰ遺跡テフラ分析写真図版



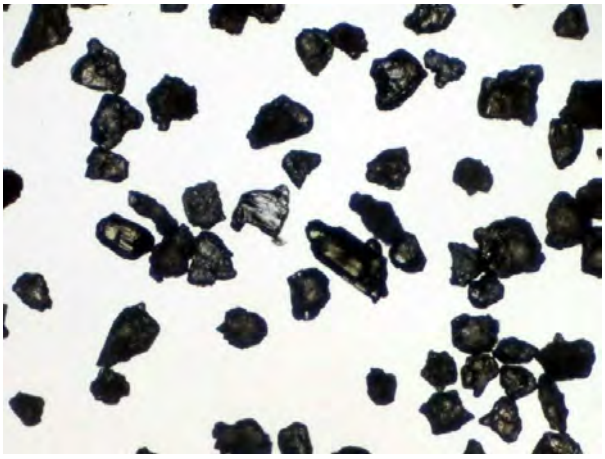
0.2mm

写真１　SI02 床面火山灰（透過光）
中央左上：繊維束状軽石型ガラス.



0.2mm

写真２　SI02 床面火山灰（透過光）
中央：中間型ガラス.



0.2mm

写真３　SI02 床面火山灰（透過光）
中央・中央左（有色鉱物）：斜方輝石.

写　真　図　版

調査区遠景（南から）

調査区遠景（西から）

写真図版１　調査区遠景

調査区全景（直上）

調査区全景（北西から）

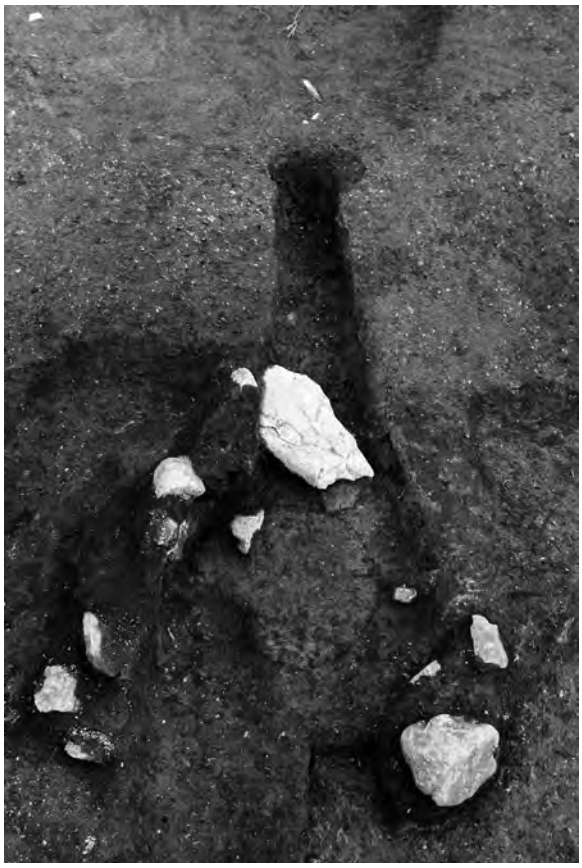
写真図版２　調査区全景

ＳＩ０１　完掘（北から）

ＳＩ０１　断面（北から）

ＳＩ０１　断面（西から）

写真図版３　SI01 竪穴住居跡（１）



カマド完掘（北から）

カマド煙道　断面（西から）

カマド火床面ｂライン　断面（北から）

検出（南から）

Ｐ１出土状況（北から）

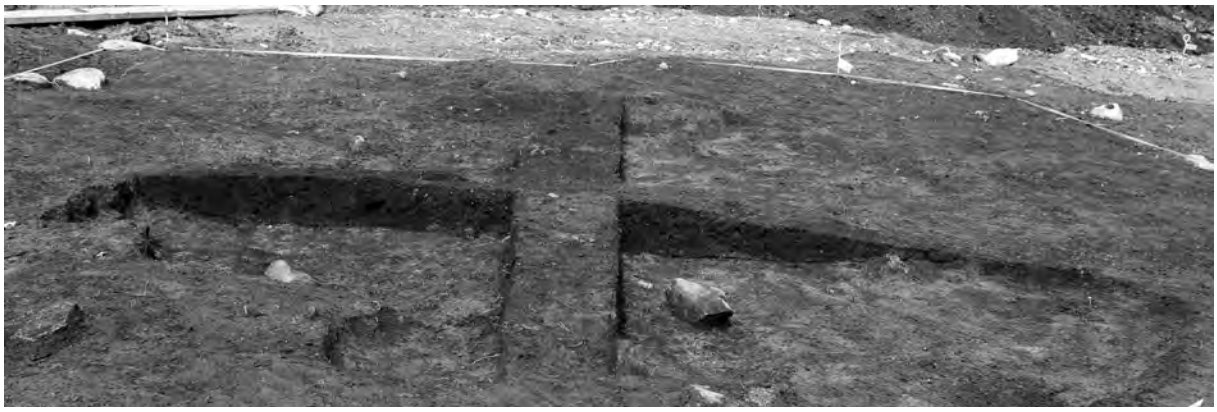
Ｐ２出土状況（北から）

支脚出土状況（北から）

写真図版４　SI01 竪穴住居跡（２）

ＳＩ０２　完掘（東から）

ＳＩ０２　断面（東から）



ＳＩ０２　断面（南から）

写真図版５　SI02 竪穴住居跡（１）

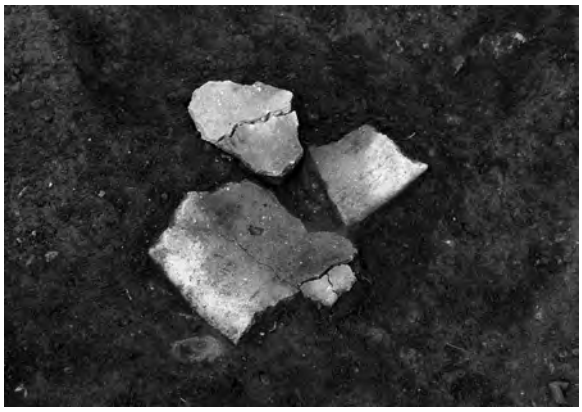
カマド完掘（東から）

カマド煙道　断面（西から）

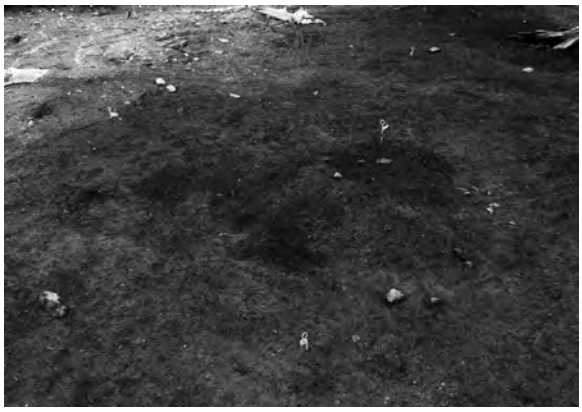
カマド火床面ｂライン　断面（南から）

カマド火床面ａライン　断面（南から）

カマド火床面ｂライン　断面（東から）



Ｐ１出土状況（東から）



検出（北西から）

写真図版６　SI02 竪穴住居跡（２）

ＳＩ０３　完掘（東から）

断面（西から）

断面（北から）

検出（北西から）

貼床除去後（東から）

写真図版７　SI03 竪穴住居跡

ＳＩ０４　完掘（東から）

断面（南から）

断面（西から）

検出（東から）

貼床除去後（東から）

写真図版８　SI04 竪穴住居跡

包含層１断面（西から）

包含層２断面（南から）

調査区南西部（北から）

調査区南東部（南東から）

作業風景

現地公開の様子

写真図版９　遺物包含層・作業風景等

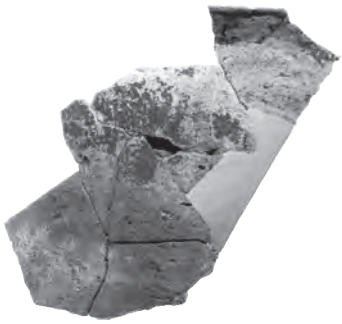
SI01

SI02

写真図版 10　SI01・SI02 土師器

SI03

9



10

SI04

11

12

13

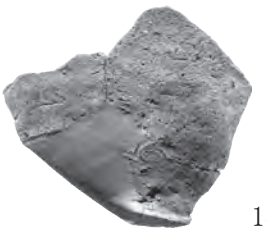
14

15

16

遺構外

17



18

19

20

写真図版 11　SI03・SI04・遺構外土師器、須恵器

101a

101b

102a

101c

102b

103

104

105

102c

106

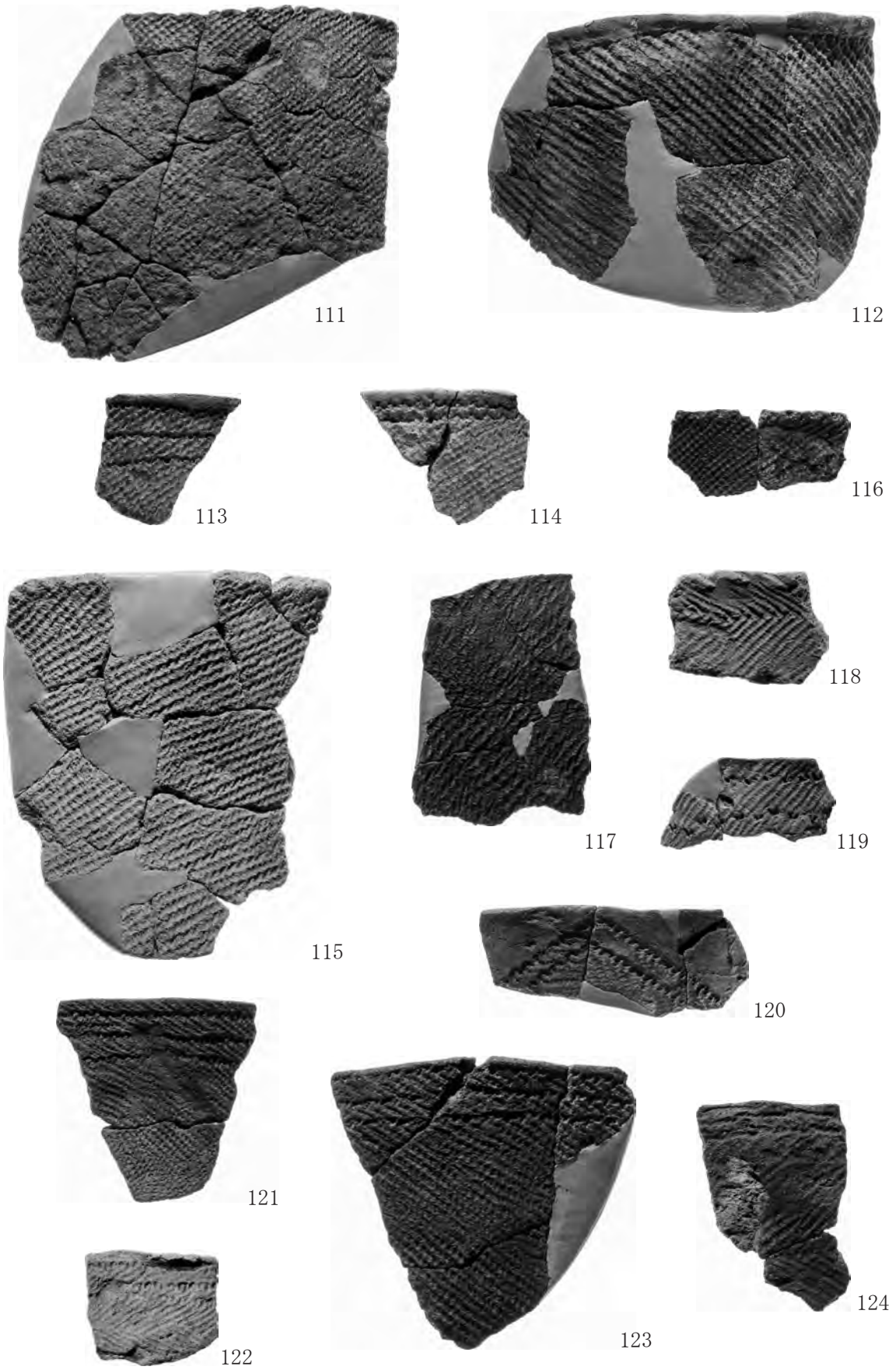
107

108

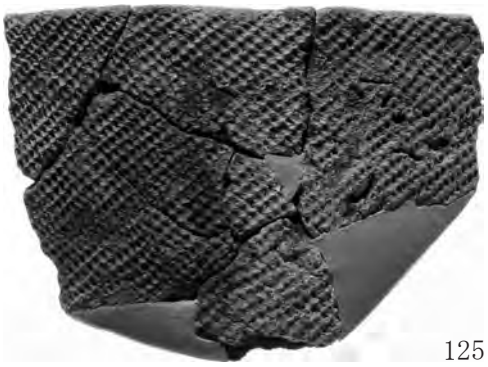
109

110

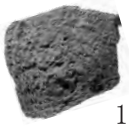
写真図版 12　遺物包含層 1 土器（1）

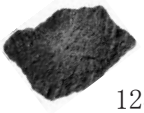


写真図版 13　遺物包含層１土器（２）


125

126


127


128

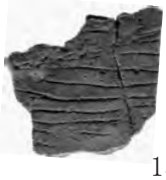
129

130

131

132

133


134

135

136

137

138

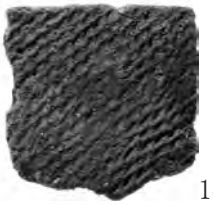
139

140

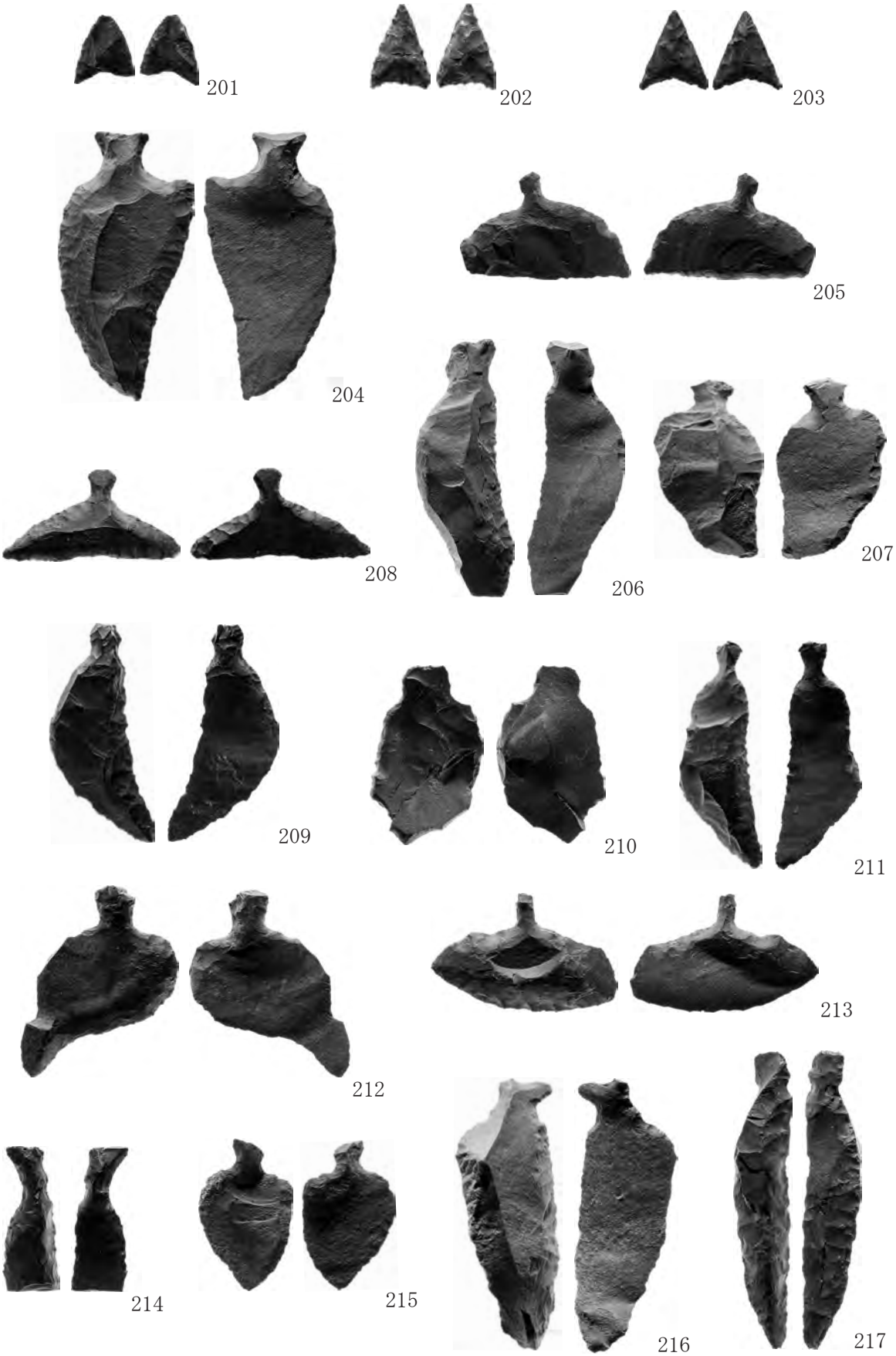
143

142

144


141

写真図版 14　遺物包含層１土器（３）・土製品・包含層２土器



写真図版 15　遺物包含層 1 石器（1）

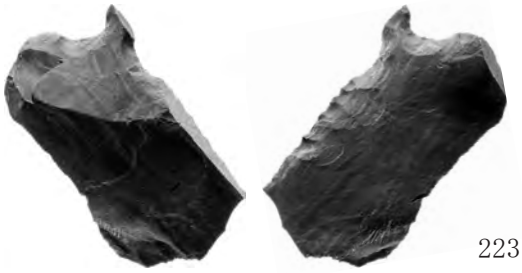
218

219

220

221

222


223

224

225

227

228

226

229

232

230

231

233

写真図版 16　遺物包含層１石器（２）

234

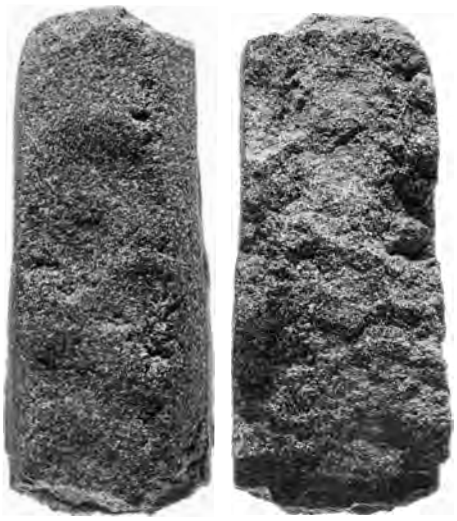
236

237

235

238

239


241

240

243

242

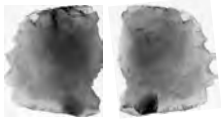
写真図版 17　遺物包含層 1 石器（3）

244

245

246

248

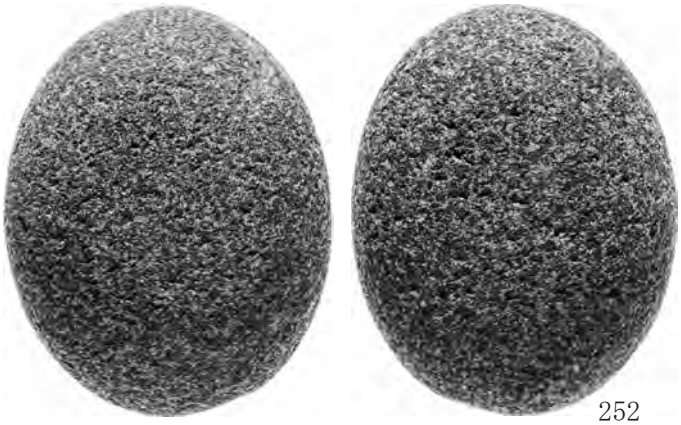


249

247

251

250



252

253

写真図版 18　遺物包含層１石器（４）・包含層２石器・遺構外石器

報告書抄録

ふりがな	はさまだ1いせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	迫田Ⅰ遺跡発掘調査報告書
副書名	三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第688集
編著者名	羽柴直人、對馬利彦、酒井野々子
編集機関	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　ＴＥＬ（019）638-9001
発行年月日	2018年３月１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
はさまだ　いせき 迫田Ⅰ遺跡	かみへいぐんおおつちちょう 上閉伊郡大槌町 おおつちだい　ちわりあざ 大槌第15地割字 はさまだ 迫田60－1ほか	03461	MG33－ 0061	39度 22分 11秒	141度 53分 57秒	2016.08.01 ～ 2016.10.21	2,600㎡	三陸沿岸 道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
迫田Ⅰ遺跡	散布地	縄文時代	遺物包含層２箇所	縄文土器 土器片利用土製品 石器	
	集落跡	平安時代	竪穴住居跡４棟	土師器 須恵器	

要約	迫田Ⅰ遺跡の調査で検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡４棟、縄文時代の遺物を包含する遺物包含層２箇所である。出土遺物は、縄文土器、縄文土器片利用土製品、縄文時代の石器、土師器、須恵器である。２箇所の包含層は縄文時代早期中葉と前期初～前葉の遺物が主体である。縄文土器は早期中葉の明神裏Ⅲ式、物見台式に併行、前期初頭の「ピッチリ縄文」が施される土器群、前期前葉の大木１式相当の土器がある。また、土器片利用の土製品が１点出土した。土器片を成形し、端部に穿孔を施したもので、前期初頭～前葉のものと推測される。石器は成品が53点出土した。共伴する土器から縄文時代早期中葉、前期初頭～前葉のものと推測される。古代の遺物は土師器、須恵器がある。いずれも９世紀中葉から10世紀初頭に属すると推測される。土師器坏には「千」の文字が墨書されるものがある。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 688 集

迫田Ⅰ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

印　刷　平成 30 年 2 月23日
発　行　平成 30 年 3 月 1 日

編　集　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒 020－0853　岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地
電　話（019）638－9001

発　行　国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所
〒 026－0301　岩手県釜石市鵜住居町第 13 地割 1 番 4 号
電　話（0193）28－4731

（公財）岩手県文化振興事業団
〒 020－0023　岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号
電　話（019）654－2235

印　刷　セーコー印刷
〒 020－0877　岩手県盛岡市下の橋町 2 番 23 号
電　話（019）651－3606

Ⓒ（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2018